

IS～透明だった少女は
何を思う～

はにゅー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

未来から過去にタイムスリップした過去に感情の大半を失った少女は歴史が変わっ
てしまつた世界で何を思うのか
前日談開始しました

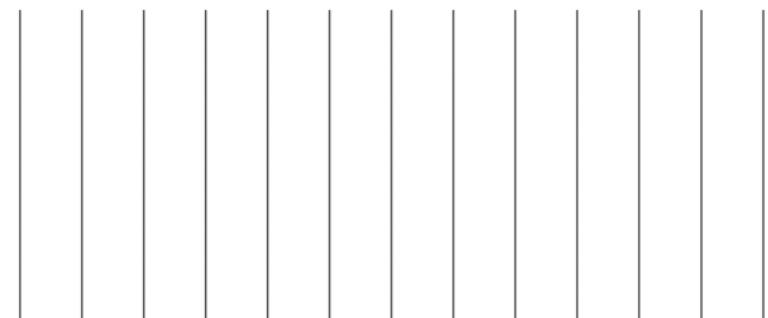
目

次

プロローグ1	プロローグ2	キャラ紹介・ワード説明	第1話	第2話	第3話	第4話	第5話	第6話	第7話	第8話
54	47	40	31	26	21	18	14	11	6	1

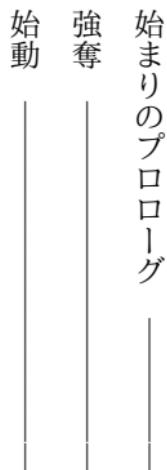
第1話	第2話	第3話	第4話	第5話	第6話	第7話	第8話 (修正)	第9話	第10話	第11話	第12話	
140	134	129	123	116	108	98	89	81	76	69	62	59

第22話
第23話
第24話
第25話
第26話
第27話
第28話
第29話
第30話
第31話
第32話
第33話
人物設定



220 216 210 203 199 192 185 179 170 164 157 150 143

前日談



始まりのプロローグ

240 231 224

プロローグ1

（宇宙戦艦「榛名」艦内のとある一室）

（西暦2150年、人類はインフィニット・ストラトス略してISと呼ばれる最新鋭のパワードスーツにより、宇宙に進出しコロニーやプラン特などの新しい人間が住める環境を作り、太陽光パネルの進歩や軌道エレベーターによりエネルギー問題の大半は解決した。）

だが、その反面戦争や環境破壊は何も解決しなかった。相も変わらず、世界のあちこちで紛争が起き自然が百年前の地球のおよそ十分の一以下になり、北極の氷のほとんどが溶けた。極めつけは宇宙と地球の対立。そう、現在は地球と宇宙による第4次世界大戦の真っ只中なのだ。

「はあ、考えただけで鬱になる……。」

溜息をつきながらもとりあえずレポートを書く手をゆるめない。

（そしてその戦争も終わりが見え始めていたときだつた。今回の戦争を引き起こした張本人である宇宙軍総帥の織斑千秋は自軍の劣勢を察し、自分の信用のおける手勢や研究

者を連れてまだ完成したばかりのタイムマシンを使い過去へと飛んだ。わが部隊はある程度までは飛んだ時間を観測できたため、こつちも開発中だったタイムマシンを使い織斑千秋達を追撃することとなつた。タイムスリップは多大なリスクを伴いかつ、タイムマシン自体二人までしか人間を収容できないため、追撃する隊員は少数精銳であることが好ましい。その追撃する隊員は……。』

と、そこまで書いたところで、通信機からコールがなつた。私はのろのろとそれを取つた。

「サー・シヤ少佐、博士から至急第1格納庫に来てくれとのことです。」

オペレーターから嬉しくない通信がきて、私は気だるげに了解、と告げてさつさと通信を切つた。博士からの招集といつたら、もうあれしか思いつかなかつたのでもういよいよきてしまつたと思うと私はさつきよりも重い溜息をついてしまつた。このことは機密事項なので誰にも相談できないと思うともつとだるくなつてしまふ。なぜなら博士が私を招集した理由はあれなのだから。私はさつさと身支度を整えると、これから起ることを憂鬱に思いながら第1格納庫へ急いだ。

「やあ、サー・シヤ。急で悪いけどタイムマシンに乗つてもらうよ。」

とんでもないことをさらりと言いやがつた目の前の青年は藤堂といつて、私の上司であり、現在所属している部隊のトップに位置する人なのだが、もともとが研究職だつた

ため、艦長室にいるよりこういった作業場にいるときの方が多い変わり者の変態科学者だ。（そもそもうちの部隊自体が技術的などの意味で変態ばかりの部隊と言われているが）

「ずいぶん唐突な出だしですね。どうかしたんですか？」

そう私が告げると、藤堂が困ったような表情を浮かべながらばれたかとつぶやいた
「やっぱりサーシャには隠し事はできないな。オーケー話そう。いやね、逃げた織斑千秋を追う最後のチャンスだというときには、近くの宙域に敵の大部隊を観測したんだ。
しかもこっちの場所がまるでわかつていてるかのようにね」

軽く言つたその内容はかなりやばい状況だつた。
「それってかなりやばくないですか？」

と私がいうと藤堂が

「かなりやばいどころか絶対絶命だよねえ」

と藤堂は困り切つた表情で言つた。

「先の戦闘でこっちの損耗が激しい上にこのタイミングを逃すと織斑千秋を追撃できな
いときた」

「万全の時のこっちの足の速さならまだ逃げられるとおもいますが」

私は苦虫を食い潰したような表情で言つた。

「こんな時に限つてメインエンジンがまだ直つていらないなんて」

前の戦闘で戦艦のブースターが大破しておりまだ本調子ではないのだ。さらに戦艦用のV.O.Bも使い切つてるし。

「そこでだ、今からさつさと君を過去に飛ばそうと思うんだが」

と彼が言つたことを聞いたときは何言つてるかよくわからなけど、あれ？ ちょっと待

て

「それって最大戦力を手放すつてことじやないですか！ ちょっと考え直してくださいよ！」

「まあまあ落ち着いて」

「これが落ち着いていられますか!!」

いつもは人形みたいとか感情ないの？とか言われる私でも流石に声を荒げてしまつた

「その代わりに編成を考え直してみた、I.Sパイロットのクリスは今回の防衛に出てほしいから代わりに新人パイロットのエフイ・ハーミットに行つてもらうことにして。エフイ來てくれ」

博士が格納庫の方に呼びかけると奥からこじんまりとした金髪の少女が来た
「エフイ・ハーミット二等兵と言います！ 噂のサーシャ少佐と共に任務ができるなんて

光栄でふゆ……！」

囁みながらも元気に答えた少女。確かに元気もいいし、ガッツもありそななんだけど「博士」この娘本当に耐えられるの？」

「ああ、ある程度は強化したからね。十分いけると思うよ。ああそれとサー・シャとエフイ、時間がないから早くタイムマシンに乗つてくれ。そろそろ追いつかれる頃だ。」

そう藤堂が言つた瞬間に大きな振動に襲われ、おさまつた瞬間に警報がなつた。

「さあ早く!!」

そういうわれる前に私はさつさとタイムマシンに駆け出し、エフイは藤堂に言われた時にはつとして駆け出したはいいんだけど、すぐにこけてる。本当に強化されているか心配になるくらいどんくさいわね。大丈夫かしら数秒たつてなんとかエフイが乗つたところで藤堂がタイムマシンの起動をさせながら

「タイムスリップ中何が起きるかわからないからその点だけ頭にとどめておいてくれ!! じゃあ起動させるよ!!」

と説明した。タイムマシンからぱちぱちという音共になんだか焦げ臭いにおいがしてきていた時に、機械音で「ジャンプ」という音が聞こえた瞬間意識が遠のいていった。

プロローグ2

「どこかの無人島」

ずしんと重い衝撃があつて目が覚めた。なんて乱暴なタイムマシンなんだ……。ドラ○モンのタイムマシンだつてもうちよつとお淑やかな運転だというのに。これじや夢も口マンもあつたもんじやない。とくだらないことを考えているとパートナーのことが頭に浮かんだ。といつても流石にここまで乱暴な運転じや無事じやないだろうと思つて辺りを見回してみると、すぐ近くに「はうううううう」となんだかあざとさがある間抜けな声が奥の方から聞こえてきた。

「…………うん? エフィの声はこんなに高く幼い感じだつただろうか? いくら精神年齢が低そうに見えてももう二十歳は超えていたと思うのだが。と考え込みながら立ち上がつてみたらズルツと服が落ちた。

「…………ハイ?」

いや、ちよつと待て服が脱げた? 確かタイムスリップする前に着ていた服はぴつちりと自分の体に合つた服だつたはず。なのに何故下着までもが脱げた? 導かれるように

自分の体を見た。ここに来る前は女性の平均くらいはあるかな位の胸が縮んでいたしかなり視点が低く感じる。まさかまさかそんなわけがないと思いつつそこらへんに落ちた自分の服から手鏡をとり出して改めて自分の体を見た。

もう何の言い訳ができないくらい完璧に背が縮んでいた。骨格や筋肉の付き具合などを見て、単に背が縮んだわけではなく全体的に幼くなっていることがわかつた。まあ、わかつたところで心がついていかなければ全く意味がないんだが。

果然と鏡を見ていたら奥の方から悲鳴が聞こえてきたので覗いて見ると

「何か背が縮んでいますぐ!!どこの少年探偵ですかこれはーー!!」

と、なんだか割と心に余裕を持つていてそうな声だった。そんなどこか呑気な感じの相棒に溜息をつきつつ声をかけることにした。

「大丈夫?と言いたいところだけど随分と余裕そうね。安心したわ」

「全然余裕じゃないです!めちゃくちや混乱しますよ!なにがどうなつてるわけ!?」

もう分かりやすいくらい動搖してるわねこの子。結構余裕がありそうだと思つてたけどそもそもなかつたみたいね

「少佐殿は何でそんなに落ち着いていられるんですか!」

と言われた。私そんなに落ち着いているように見えるのかな。

「別に落ち着いているわけじゃないわ。むしろあなたよりも動搖しているわ。でも今騒

いだり慌てたりしたつてなにも自体は解決したりしないから必死で冷静になろうとしてるだけよ』

それと、と続けて

「少佐殿だなんて堅苦しく呼ばなくていいわ。私のことはサーシャって呼んで。みんなはそう呼んでるし。さくにやんだけはお断りだけどね」

「え? は、はいわかりましたではさーにや「サーシャ」…………サーシャさんつてよばさせてもらいます。」

とエフイが不愉快なあだ名で私を呼びそuddたので即訂正させてもらつた。けどどうしてだろう? エフイが妙に怯えた顔になつてゐるのは。私そんなに怖かつたのかな。なんて考えながら周囲にISスースの入つたバッグを探し、見つけたバッグからISスースを取り出した。

昔もそだつたかは知らないけれど今のISスースはどんな体系でもフィットできるように作られており、さらにメタルジヤケットも数発程度なら防ぎどんな環境でもある程度なら活動できる優れものだ。前からこの機能には感謝していたが、今ほど感謝しなかつた日はない。

「着替え終わりましたく、さーn y……シャさん。」

今不愉快なあだ名が聞こえた気がしたけど……まあいい。さつさと今いる時代を確認しなければ。飛んだ時代と場所によつてはガスマスクと酸素ボンベが必要になるし。と、タイムマシンの中になつた計器を調べてみたんだけど、うん。あれだけ乱暴で体内の臓器がちぎれるのではないかと不安になるくらいに振動があつたにもかかわらずちゃんと目的の時代には到着してるわね。絶対誤作動起こして目的の時代には全く関係のない時代に飛んだと思つていたのに

「サーシャさん、わたしたち今どの時代にいるんですか？」

「約150年前ね。場所は太平洋の赤道近くにある無人島」

「無人島つて、あのすべて海に沈んだ伝説の島のことですか？」
そう、私たちの時代の地球はどうの昔に無人島などの小さな島は海に沈んでいた。あのジャパンですら半分近くは海に沈んでいたくらいなのだ。

「ええ、そうね。あの伝説の島よ。それとガスマスクと酸素ボンベはいらぬわよ。今の時代には汚染された地域は存在しないわ。まだコジマ粒子が発見されていないはずだし。」

「じゃあ、青い空やきれいな海に生い茂る自然も見れるつてことですか!?」
エフィイが興奮するのも無理はないわね。かなりうるさいけど。私たちの知つてる海は緑色で濁っているし空は灰色だし何より自然が少なすぎる。おかげで自然より

も砂漠の方が多いくらいだし。でも私も今興奮気味だ。だつて写真や映像媒体くらいでしか見たことのないものが外に出れば自分の目で見れるのだから。

はやる気持ちを抑えつつ私は装備を整えタイムマシンの外に足を踏み出した。そこには、私の想像していたより何倍も美しい風景があつた。グレーではなくスカイブルーの空、濁つて一センチの先も見えない濁つた海でもなく底まで透き通つていてきれいなエメラルドグリーンの海。後ろには力強い緑が生い茂る木々たち。今まで見たことのないようなものが見れて感動し、興奮している感情とは裏腹に、何故今の時代の人類はこんな素晴らしいものを壊してしまつたのかと疑問に思った。

キヤラ紹介・ワード説明

〈キヤラ紹介〉

サーシャ・エーデルバイン

22歳

銀髪蒼眼 身長165センチメートル 体重??キログラム スリーサイズ

不明 階級少佐

今作の主人公。過去に人体実験された影響で記憶と感情の大半を消失し、家族のことも忘れてしまっているが、本人は特に気にしていない。その影響からか彼女には羞恥心というものがあまりなく下着姿で男性の前に出ても全く気にしていない。だが、IS操縦技術は部隊の中ですば抜けており、高速戦を得意としている。所持ISは第7世代型IS 武御雷

エフィ・ハーミット

20歳 緑髪緑眼 身長161センチメートル 体重秘密キログラム スリーサイズB96……(ここから先は消されている)

階級二等兵

臨時のサーシャの相棒として指定された。彼女自身まだ軍学校を卒業したばかりで

ほとんど実戦経験がなく、彼女自身相当抜けている部分がある。眼の良さと家事が人に自慢できることらしく、その眼の良さで同期の中でもトップクラスに狙撃がうまく、料理の腕もプロに迫るくらいの腕。所持ISは第6世代量産型陽炎

藤堂 純一郎

年齢不詳 黒髪黒目 身長175くらい 体重不明 階級少将

サーシャの所属する部隊の隊長なのだが彼は研究者なのであまり隊長と呼ばれるのが苦手なのか隊長と呼ばれるととても困った顔をする。かなりだらしなく部屋は汚い大事な書類をしょっちゅうなくしている。だが、とても優秀。タイムマシンの理論を組み上げたり、戦艦やISの設計をしたりしている。彼自身の経歴は不明。家族構成も不明とかなり謎が多い人物もある。

〈ワード〉

・現在の地球

西暦2150年、宇宙開発が進みスペースコロニーや軌道エレベーターといった構造物の実用化に成功し2150年

現在の宇宙の人口は4500万人を超えていて、だが、地球の環境破壊が進み、陸地の約三分の一が砂漠と化し、自然も2015年と比べ十分の一にまで減つてしまっている。酸素の循環は機械でおこなわれている。

・ 2150年の戦争

2150年の戦争は100年前とは大きく異なり、戦車や戦闘機、イージス艦などは一線を退き、ISが主力となっている。100年以上前はISコアに限りがあり、量産が出来ず、女性しか乗れない欠点があつたが、疑似ISコアの開発の成功によつて問題は解決された。絶対防御が出来ない、単一能力が発動しない、形態移行は一次移行までと制限が多いがオリジナルとは違い、男性でも搭乗可能になつていて、現在のISの世代は基本的には第6世代であり、一部が第7世代になつていて、ISコア搭載型の世代には第8世代が登場した。

2150年の戦場は地上の他に宇宙、どちらにも対応できるようにISコア搭載型の母艦が必要になつた。それによつて、従来の戦艦よりも低燃費かつ、耐久性が高く、高威力の兵器を積めるようになつた。

この時代にも一応パワードスーツはあるが、やはりISと比べると見劣りしてしまう上に、最大稼働時間も一番活動ができる地上で3時間と短く、第2世代のISにも単機では勝てないという事実があり、一部でしか使用されてない。

第1話

「タイムマシン内」

「で、これからどうするんですか？ サーシャさん？」

しばらく外の風景を2人揃つてぼおーと30分くらい見続けた後、先に我に返ったエフィから現実を突きつけるような言葉を言われた。

…………もう少し現実を逃避していたかつたんだけど仕方ない。そこで今の自分たちの状況について考えてみた。

今いるこの場所は海に囲まれた無人島でタイムマシンが見つかる心配はほぼない。（まあこの後念のため森の中に隠すが）食料も魚を釣るなり、森の中で採るなりすればいい。水はタイムマシンの中にある浄水設備を使えば問題ない。雨水を凌ぐ場所もタイムマシンの中に寝ればいい。（タイムマシンは中がかなり広いので2人並んで寝ても全く問題ない位の広さ）ここまででは、何にも問題はない。問題はないんだけどなあ
「標的を探すのどうしよう…………」

それが問題だった。なんせこの時代にはなんの伝手もなければ戸籍すらない。挙句

のはてにはこの時代のお金もないとなると織斑千秋の情報を集めることができない。

「仕方ない。傭兵でもやるか」

それしかなかつた。戸籍もお金もなく更には体が幼くなつてゐる私たちが織斑千秋の情報を集めつつお金を稼ぐ方法と言つたらこれくらいしか思いつかなかつた。エフィは渋々と承諾したようだ。あまり納得はしてないみたいね。無理もないか。やつと正規兵になれたと思ったのに、すぐに非正規兵になるなんて嫌だものね。私は気にしないけど。

「さて、最初はどこの国に行こうかしらね」

「アフガンがいいんじゃないんですか？あそこはしょっちゅう内戦が起きてたし、資産家も多いはずだから、雇つてくれますよ！多分」

見通しが甘すぎる気がするけど、傭兵をやるとしたらあそこが一番いいのかもね。成功したらたくさん報酬もらえるだろうし。

「そうと決めたらさつさと準備するわよ。移動用にIS持つていくんだからそつちの準備もしなければいけないんだから。」

何故ISを持つて行かなきやならないのかはここは無人島で移動手段が皆無であり、目的地のアフガニスタンまでの距離は千キロを超えているからと、もしものためというのもある。ちなみに、現代のISはステルス性能は基本的に高く、この時代のレーダー

にはかかるないくらいの性能のため、移動中に見つかる心配はほとんどない。本当に便利なのよねECSって。

「準備出来ましたー！」

とエフィイの声が聞こえてきた。結構準備に時間かかったわねあの子。ISの調整にそんなに手間取ったのかしら？

「随分時間がかかつたね」

「何を持っていくか迷つてしまいまして。」

持つていく物はマニュアル通りのものでいいのに……何を迷う必要があつたのかしら。まさかとは思うけど、

「まさかお菓子とか余計なもので悩んでたんじゃないでしょうね」

と私がじと目で言うと、エフィイは驚いた様子で

「サーシャさんすごいです、大正解です！もしかしてエスパーですか？」

と抜かしやがつた。こいつにとつて今回のは遠足みたいなものなのか？

「お菓子はチョコレートにしておきなさい。わかつたらさつさと準備しなさい」

と言い放つとエフィイは慌てて荷物をまとめだした。やれやれ緊張感がないわねこの子は。でも、彼女のその緊張感のなさのおかげで冷静でいられるのかしら。それともわざとなのだろうか？もしわざとだとしたらこの娘結構すごいんじゃないだろうか

「サーシャさん！バナナは持つていいですか！」

……………前言撤回。これ絶対素ね。先が思いやられるわ。

第2話

（アフガニスタン紛争地域）

「結構すんなり依頼を受けられましたね。」

とエフィイがうれしそうにそう言つた。私としても以外だつたわね。見た目からしてまだ小学生くらいの子供2人があつちの方の依頼ではなくちゃんとした仕事を受けられるなんて。でも、少し妙なことがあつたのよね。

「なんで（依頼を受けるに当たつてISの所持または操縦ができる」と）なんて条件があつたんでしょうね？」

エフィイの疑問は尤もだ。まるでこれから起きる紛争にISは必要不可欠みたいな言い方だつたわ。……まさかね

「着きましたよ！ あそこが集合場所です！」

とエフィイの指さした方向にふと顔を向けた時に、エフィイが前から来ていた人に気づかずぶつかつてしまつていた。本当にどんくさいわね、この娘。しかもよりもよつてかなりいかつい人だし。こりや面倒くさいことになりそうね。

案の定いかつい顔をしたおじさんは「このくそがき!!」と声を荒げながらエフイの方に歩いて行つた。と近くにいたいかつい顔のおじさんの取り巻きの女があちやーといながら、私の耳を疑うようなことを言つた。

「烈火のIS乗りのガオウさんにぶつかるなんて死んだわね、あのお嬢ちゃん…………なんだつて？それはおかしい。この時代はまだ疑似ISコアの製造にまだ成功していないはずだ。疑似ISコアの製造に成功したのはいまから50年あとのことだし。一体どうなつているの？」

気になつた私は取り巻きの女に質問することにした。

「ねえ、美人のおねえさん。質問があるんだけどいいかな」

と女をおだてながらそう言つた。こういうタイプの女はこうおだてたほうが質問しやすくなるしね。

「仕方ないわねえ」と上機嫌で私の質問に答えてくれるようだつた。ちよろいなこの女

「で？お嬢ちゃんが知りたいことはなんなかな？」

「ガオウさんつてそんなに強いの？」

当たり障りのない質問で聞いてみることにした。変に怪しまれたら面倒だし

「ええ、強いわよ。この辺りじやISの操縦技術で彼の右に出る奴はいないくらいにはね。」

「そうなんだ」

やつぱりこの時代にはありえないはずのことが起きているわね。この時代で男がISに乗ることができたのは織斑一夏ただ一人のはずだ。なのに目の前にいる男は乗ることが出来るという。これはもしかしなくとも……………

「織斑千秋の仕業かしら？」

というか奴くらいしか思いつかない。

「じゃあガオウさんのいつも愛用してるISってどういう機体なの？」

「ガオウさんが愛用してるISはなんと言つてもラファールよ。武器も他のISよりも積めるしね」

変だな？機体の技術レベルがかわっていらないなんて。奴が疑似ISコアをばらまいたとしたら機体の技術レベルも軒並み上げると思つていたのに。もしかしたら疑似ISコアだけをばらまいただけ？うーん現状じやまだ分から

「サー・シャさん!! 考えこんでいないで早くたすけてください!! h e l p m e ! このままじや私死んじやいますから!! 早く助けてください!!!」

そういうえばエフイのことすっかり忘れていたわ。現状じやまだわからないことだらけだから情報が集まらないとどうともいえない。まずはさつさとエフイを助けて初めての依頼をこなしていきましようか。

第3話

「紛争地帯」

ガオウとかいういかつい顔をした男からやつと逃げ切り、現在私たちは依頼された紛争地帯でブリーフィングを受けていた。

「…………以上が今回の作戦である！何か質問は？」

おつとそうこうしている間にブリーフィングは終わつたみたいね。無駄に長くて退屈だつたわ。エフィに至つてはうつらうつらしているし。この娘本当に軍人なかしら？

「エフィ、さつさと出撃準備をするわよ」

「はい!! わたしまだねていませんよ！」

エフィに声をかけたら全く見当違ひなことを言われた。エフィ、それ寝てた奴が言うセリフだからね。それと声でかすぎ。そんなに声がでかいと周りに馬鹿にされるわよ。

「おいおい、ここにブリーフィング中に寝てたガキがいるぞ」

「ここはいつから小学校になつたんだよ」

と周りから馬鹿にしたような声が聞こえてきた。ごもつともで。何の反論も出来ないわ。面倒事に巻き込まれる前にさつさとこの部屋からでた方がいいわね。エフイの手を掴んでさつさとブリーフィングルームから出ようとしたときだつた。

「おい、戦争は遊びじゃねえんだ。ガキはでていけ」

とガラの悪そうな男が私たちの前に立ちふさがつた。というかさつさと出て行つて欲しいのなら何で私たちの前に立つているのかしら。なんだかすごく嫌な予感がするわ。エフイも不安そうにしているし、こいつのことを無視して行きますか。

「おい、きいてるのか」

と男が私の肩を掴む寸前で男の手を空いていた右手ではじいてエフイの手を引いて脱兎のごとく駆け出し部屋を出て、出撃ポイントに向かつた。

「サーシャさん、本当に助かりました！ありがとうございます！」

「次からは寝ないことね。今度寝たら……」

「わかりました！わかりましたよう。次からは寝ませんから」

本当かしら？なんだか信用できないけれどこれ以上言つたらかわいそうだし、ここままでにしようかしらね。

「戦況は…………こっちが劣勢みたいですね。防衛ラインがかなり下がつてゐる。持参してきた双眼鏡を見ていたエフイが報告してきた。まだ早いけどそろそろ出た

方がいいのかも。

「エフイ、まだ早いけれどそろそろ行くわよ」

「え？ は、はい！ わかりました。」

「実戦は初めてだろうけど落ち着いて対処すること。いい？」

「はい！」と大きな声をだしてくるけど緊張しているわね。無理もないか。今回ではじめてだろうしね。

人を殺すのは

「じゃあ先に行くわ。援護よろしく！」

武御雷を起動させてわたしはこの時代に来て初めての戦場の空へ飛んだ。後ろから陽炎を起動させたエフイがスナイパーライフルを展開させながら飛んできていた。結構冷静じやない、あの娘。結構本番には強いタイプなのかな。

エフィの評価が上がつていた時に、前から敵のI-Sが2機こっちに向かつて飛んできていた。敵の機体はどれも第二世代か。やっぱり機体の技術はあがつてないのか？ い

や、こんな小規模の戦闘じゃなにもわからないし、分析は仕事が終わってからにしよう。まずはこの仕事を片付けてからだ……！

「落ちろ！」

敵が撃つてきた弾をかわしながら、相手の懷に飛び込み対IS用プラズマブレードで相手のシールドスキンごと相手の胴を両断した。

結構もろいわね。やっぱりまだスピード用だつたせいなのかしら。さてもう一体の方はと。頭撃ち抜かれて撃墜されてるわね。いい腕してるわ、流石は狙撃部門トップといつたところね。

さつき斬り飛ばしたISからライフルを奪い、別の方向から来ていたラファールに撃ちながらそう思っていると

また別の方向からラファール、テンペスタ、ストームの3機がこつちに向かってライフルを撃つてきていた。

また敵？ いくらなんでも侵入されすぎじゃない？ つてライフルの弾尽きちゃったか。ちょうど相手の使つていてるライフルも同じみたいだし頂いちやいますかね

「何だ!? この化け物みたいな速さは!? 全くあたらねえ！」

「黙つて撃ち続けろ!! 懐に入られたら終わりだぞ！」

さつきのを見ていたのか接近されないように2機で弾幕を張つてるわね。ラファー

ルはつと……

「もらつた!!」

と後ろから声がしたと思ったら後ろからバシュという音がした。まあ無駄だけどね。

「なんでだ……直撃したはずなのに何でダメージが入っていない!?」

「あの緑色の膜だ！あの緑色の膜で防ぎやがった！」

（プライマルアーマー）のおかげで助かつたわ。後ろに回られるなんて腕が鈍ったかしら？

（プライマルアーマー）は第6世代から搭載され始めたコジマエンジンから発生する粒子によつて発生する第3の防壁だ。出力によつては絶対防御の8割近くの防御力を発揮するものだ。ただ、コジマ粒子は人体や環境に悪影響を及ぼすものなのだが、陽炎と武御雷に搭載されたエンジンは悪影響をださない特殊な粒子らしい。

さてとあの3機をさっさと落としましようかね

第4話

（3年後のドイツ市街地）

こんなには、サーシャよ。え？ いきなり時間飛ばしすぎだろつて？ 仕方ないじやない。飛んでしまったものは。あのあとは特に記述するまでもなく敵ISを一網打尽にしてやつたわ。戦況を一気に盛り返したこと考慮されてたっぷり報酬をもらつたしね。その報酬でフランスに家を買って戸籍も取つたわ。私たちが乗ってきたタイムマシンは見つからないように細工をしてそのまま無人島に置いてきた。流石にフランスにあんなデカブツを持つていくわけにもいかないからね。それと、この時代に来た目的である織斑千秋の討伐だけどまだ奴の情報すら掴めていない。3年間も何をやつていたんだと言われると思うけど、自分たちの地盤を確保することに必死でそれどころじやなかつたし、なにより全くと言つていいほど情報が集まらなかつたのよね。まったく逃げ隠れすることに関しても一流ね。そして今私たちの現状は

「サーシャさん、目標ブラボーが動き始めました。会場の外のトイレに向かっているようです。仕掛けるのは今です。」

「了解。目標の護衛の始末は任せたわよ。」

「了解。」

誘拐の任務の真っ最中よ。今ドイツで行われている第2回モンド・グロツソの決勝戦に出場する日本人選手の弟を誘拐して欲しいと、いうね。ここまで言えば分かると思うけど、その目標というのが織斑千秋の血族であり、世界で初めてISを動かした男で有名な織斑一夏だ。なんだけど、ここでかなりおかしなことが起こっている。本来の歴史では織斑千冬の弟は一人だけのはず。だが現実は二人いることになっている。名前は織斑百春。最初は織斑千秋だと思つて調査をしてみて、百春の髪でDNA鑑定までしてみたが、結果は別人だった。つまり、どういうことなのかはまだわからないけど、私たちの知らないところで私が知つてゐる歴史がどんどん変わつていつているということだ。

…………頭が痛い。どうしてこうなつた。そもそもここは本当に私たちがいた世界の過去なのか？事故つて別の世界線に紛れ込んだとかじゃないわよね。訳も分からないまま漂流していたなんてことになつたら、本当に私たち元の時代に帰れるのか不安になつてきたな。

「目標、会場の外のトイレに入りました！」

インカムからエフイの声をきいてハツとして直ぐにトイレに向かうことにした。
そうよね。今考えていたつて仕方ないし、今は目の前のことを考えないと…………

!

織斑一夏が入つてゐるトイレに入つて、直ぐに隠し持つてゐたスタンガンを織斑一夏に押し当てる、声を出せないように口をハンカチで抑えた。相手が氣絶するのを確認し、G P Sなど位置を特定するようないかを確認した。ドイツ製の携帯か……発信機がありそだからトイレの用具入れに隠しちりますか。それ以外にもいろいろと発信機らしきものが見つかつたため、全部トイレの用具入れに隠した。次に、対象の手足をガムテープで縛り、口に猿轡をさせ、事前に用意した人がはいれそくなくらいの大きさのキャリーケースに突つ込みトイレから出て、エフィに電話をした。

「こちらフォックス1、子ウサギを籠にいれた。」

「こちらフォックス2、親ウサギを野に帰した。」

「こちらハンター、了解。子ウサギを飼育小屋に入れてくれ。」

私がフォックス1、エフィがフォックス2、依頼主がハンターよ。さてエフィも仕事を終えたようだし、指示も出たから監視カメラに気をつけながら集合地点に移動しようと。

（ドイツ倉庫地帶）

「これが約束のものよ」

私はキヤリーケースから織斑一夏を取り出して柱にくくりつけた。くくりつけている途中にうめき声がしたから、意識は戻っているようね。

「ありがとう、報酬の金だ」

と、依頼主の男は金の入ったケースをこちらに渡してきた。そのケースをエフイに投げ渡して契約通りの金は入っているかどうか確かめさせている途中に男がおもむろに倉庫に置いてあつたテレビに電源をついた。男の計画では、織斑千冬の弟をさらい脅すことで途中棄権させようという目論見だつたらしい。実際の歴史でも同じようなことが起き、織斑千冬は途中棄権をしている。だが今の時代にはいるはずのない二人目の弟がいる。だから、ひと手間かけてもう一人の方も私たち以外の人物にさらつてもらつているらしい。さつきあの男が電話して満足そうな笑みを浮かべていたから多分成功したんだと思う。さて、どうなるか……

結果は私の知つている通り、織斑千冬の途中棄権。ここまででは当たつているが、通信を傍受している限り捜索願いが出ているのは弟の方の百春だけで兄の一夏の方は出でていなかつた。

私がそのことを一夏に伝えた時、一夏はただ悲しそうに泣いてはいたが、まるでこうなることが分かっていたかのような奇妙な表情を浮かべていた。私はなんとなくそんな表情を浮かべている少年に興味を持ち思わず依頼主に

「この少年はあなたにとつてもう用済みですか？」

と質問していた。そのとき少年の肩がビクッととなつた。依頼主の男はふむと考え「たしかに用済みだな。家族からも捨てられたみたいだし、別に生かしておく意味もない。」

と私に告げた。

「それならこの少年、私がもらつても構わないでしようか？」

そのときの少年が浮かべた驚愕と困惑と歓喜と安堵が混ざり合つた表情を私は一生忘れられないと思う。

第5話

「フランス住宅地」

現在、私はフランスの首都に近い都市にある本拠地でドイツの仕事のもう一つの報酬である織斑一夏に英語を教えていた。英語は世界中で使えるし、覚えておいて損はないからだ。まあこの後フランス語も覚えさせようと思つてゐるけど。一夏がこの家に来てもう一週間が経つ。ニュースを見ても一夏を搜索しているというニュースはまだないし、新聞にもそのようなことは書かれていない。それと、この家に来て3日はずつとしゃべらないでいた一夏だが、4日目に入つて、私たちが朝食の準備をしていた時に

「ねえ、君たちはどうして俺を拾つてくれたんだ?こんな出来損ないの俺を」

とかなり暗い声色でおそるおそる聞いてきた。うーむ、拾つてきた理由は衝動的なものだから説明しづらいんだけど

「君のあの複雑な表情が気になつたから」

と簡潔に告げたら、一夏は「つへ？」と鳩が豆鉄砲を食つたような顔をした。なによ
その顔は、そんなに私変なことを言つたかな

「仕方ないですよ。サーチャさんはかなり不思議ちやんなところがありますからね。
一夏君が戸惑うのも無理も

ありません」

エフィはにこにこと笑いながら言つているが、心外だ。私はそんなに不思議ちやんな
のか？

「はい。相当な不思議ちやんです。」

「エフィ、私の心を読まないでくれる？」

「サーチャさんは普段仏頂面のくせにこういう時は表情がでてすぐ読みやすいんで
すよ」

なに？ そうなのか。 次からは表情に出ないよう気をつけなくては

「本当にそれだけなの？ このあと俺を奴隸として使つたりひどいことをするんじゃないの？」

「なんてこと言うんだお前は。 エフイならともかく私がそんなひどいことをするわけないじゃないか」

外野から 「私もそんな酷いことしませんよ！」 と抗議がでた気がするが無視無視。

「安心してください。 私もサー・シャさんも君に危害は加えないし、人身売買もする気は毛頭ないですから。」

「本当に？」

「ええ、 本当ですよ。」

そこまで聞いて一夏はとても安心した表情になつた。 私はそんなに信用なかつたのか。 あれか？ 私の仏頂面が悪いのか？ 手鏡を取り出して自分の顔をもみほぐしている

と

「一夏君、改めて自己紹介をしましよう。私はエフィ・ハーミット。それと、あそこで仮頂面な表情を気にして直そうとしている人がサーリャ・エーデルバインよ。」

「あはは…………」

「…………エフィ、あなたのおやつはなしね」

「ええ?! 勘弁してくださいサーリャさん!」

「絶対許さない」

「勘弁を、勘弁を」と泣きついてきても私は聞こえないふりをしてエフィの今日のおやつをぱくついた。うん、ちょー甘くておいしい

「ああ！私が楽しみにしていたショコラケーキが!?」

いい気味ね。私をおちよくつた罰よ。…………あれ？ そういえば一夏と大事な話をしていたような気が…………：

「じゃあ、俺はここに居ていいんですか！」

私とエフイの漫才のような会話が終わつたのを見計らつて一夏がうれしそうに言った。

あれ？『家に帰してくれ』とかじやないの？なんだかおかしい。まるで家に帰りたくないみたいじやない

エフイも私と同じことを思つたのか

「一夏君は家に帰りたくないんですか？」

と聞いた。すると一夏は悲しそうな表情をしながら、頷いた。

「あそこには俺の居場所なんてないから。俺の大切なものも居場所も全部あいつに奪われたんだ……」

「あいつって誰なんですか？なんでそんなひどいことを……」

「弟の百春です……あいつは俺を追い出そうとしていたんだ」

「お姉さんの千冬さんは？あの人は追い出そうとはしないでしよう？」

「いや、千冬姉は最初は俺にも優しかったんだ。でもいつの間にか俺を他人みたいに

……」

そこまで聞いてようやく納得した。なぜ家に帰りたくないのかとかどうして捜索願いが出なかつたのかとか

確かにそんな家には居たくないでしようね。

一夏は何かを決心したのか

「お二人にお願いがあります。俺を鍛えてください！」

「ええ!? 別に構わないんですけど…………でもどうしたんですか？」

「俺は弱くていつも誰かに守られてばかりだった。そんな俺を変えたい。強くなりたいんです！大切なものをもう奪われないように。誰かを守れるように。俺は強くなりたいです!!」

…………へえ、復讐ではなく守る為に力を求めるのか。大抵の一夏のような境遇のものは復讐のために力を求めるものだと思つてたけどね。本当に一夏は強いのね。なら

私も彼の思いに答えなきやね

「覚悟はあるみたいね。いいわ、鍛えてあげる」

「本当ですか!!ありがとうございます!」

「ただし最低限英語は覚えること。ここはジャパンじゃないんだから。日常会話くらいはできるようになないとね」

「わ、わかりました」

「それと一つ確かめたいことがあるわ。もし成功すればあなたは世界最高峰の兵器を所持できるようになる」

「ちよつ!? サーシャさん何を!?

「サーシャさんそれって?」

「あなたが I S に乗れるか試すのよ」

「えつ?」

一夏はぽかんとした表情を浮かべ慌てて

「いやいや、無理ですよ!! 男の俺が I S に乗るなんて!」

「だからこそ試すのよ。原則オリジナルコアのISには男は乗れない。だけど私のコアが言つてゐるのよ。君は乗れるつて」

「何か色々と突つ込みたいけどわかりました」

と一夏は渋々納得したようだつた。まあ、未来のことは話す訳にはいかないからね。結構苦しい言い訳だつたけど納得したようね

「でもサーシャさん、どうやつて一夏君が乗れるこどを確かめるんですか？私達のISはもう一次移行しちやつてますから試せませんよ？」

「あら、あるじやない。もう一機。あなたのISの予備機の禍津火が」

「まあ、予備のオリジナルコアもありますし、いけそうですね。じゃあ、わたしは先に地下に行つて準備してきます」

エフィイは地下室の入り口がある物置部屋に駆け足で向かつて行つた。さて、私たちも行こうかしらね。

「一夏行くわよ、地下室に」

「はい」

「ところで、私とエフィイはあなたと同い年だからそんなにかしこまらなくてもいいのよ？」

「え？ 同い年だったのか！？」

第6話

～フランスにある本拠地～

地下室に向かう階段を下りていくと鉄製の扉が見えてきた。その扉は家の中にあるにしてはやけに厳重な様子だった。電子ロックと鍵穴とか警戒しすぎだろ。しかも地下室に行く階段も隠し扉だつたし。確かにそこにISがあるのならそこまで厳重になるのかな。と俺が思つていたら、俺をあの地獄から連れ出してくれた恩人のサーシャが扉を開けて「入つて」といつも通りのむすつとした仮頂面で俺に入るよう施した。

地下室に入るとそこは観たことのないような光景だつた。壁に立て掛けられた武器の数々。床に置かれてるパツの数々。見たことのないような工具。だつて考へてもみてくれ。姉が世界最強なことと家族からギャクタイを受けていたこと以外至つて普通の一般人である俺が

「なにこれすげえかつけえ!!」

「きやつ！ いきなり叫ばないでくださいよお…………」

衝動的に叫んでも無理はないと思うんだ。だつて隠し扉から始まつて秘密の地下室。止めに工房だぜ？ これぞ男のロマンというやつだろ。だからお願ひします、サーシャさんそんなゴミを見るような日で見ないでください。あと、エフィさん。そんな「ふええ」つていいながら涙目にならないでください。あざとすぎて良心がごりごり削れるから。

「で？ それが弁明？ だとしたら頭のなかがお花畠のようね、あなたは。」

「仕方ないだろ！ かつこいいものには反応してしまうのが男の性なんだから！」

サーシャはふーんとあまり興味の無さそうな様子で、「まあいいわ。」と叫んでしまつたことを許してくれた。今度からはいきなり叫ばないようにしないとな。
俺は決意を固めサーシャの後を着いていった。

「ここに居るということは準備ができたということ？」
「はい。コアをはめるだけの簡単な作業でしたし。」

ということはこの先に I.S があるのか。手に滲んできた汗をズボンで拭つた。

「これが未だ誰も起動する事が出来ていない I.S 禍津火よ」

そこには、あつたのは漆黒の騎士だつた。今どき珍しい全身装甲（フルスキン）で腰にロングソードが二本携えられており、肩には白いカラスのデカールが付けられていた。

「じゃあ、一夏。その I.S に触れてみてちょうどいい」

言われるがままに漆黒の騎士に触れてみた。すると白い光に包まれたかと思うと俺は漆黒の鎧を身に纏つていた。その時だつた。

『搭乗者のバイタルチェック……。健康。肉体の耐久度が既定値を大きく下回つているため、ナノマシンを投与します』

機械音声がなんか物騒なこと言つてるんですけど?! そう思つたも束の間。いきなり

シャコッと音がしたかと思うと首すじ辺りにちくりとした痛みが走った。これってまさかさつきのナノマシンとやらを注入されたのか!?

「サー・シャ、なんか今ISにナノマシンとやらを俺の体に注入されたんだけど大丈夫なのかこれ!」

「体を強化するためのやつだから大丈夫よ…………多分」

「今多分って言つたよな!」

「今はそんなことはどうでもいいのよ、重要なことじゃないから。今重要なのはあなたがISを起動することに成功したことじやない」

「言われみてはつとした。そうだ、俺は男は乗れないはずのISに今乗れているんだ。

「しかも私とエフィも含めて誰も起動に成功していないじゃじゃ馬にね」「じゃあ!」

「約束だからね。いいでしようあなたを鍛えてあげる。それと禍津火はあなたにあげるわ。一夏にしか起動することあできだらうし」「いいのか?」

「ええ。それとISについてのことも教えてあげる」

「ああ、助かるよ。ありがとうサーシャ」

こうして俺、織斑一夏は新しい相棒禍津火と共に新しい生活が始まったのだつた。今はというと、英語を教わりながらISの操縦の特訓や銃の取り扱い、格闘、体づくり、整備の仕方まで強くなるために色々なことをやつた。確かにサーシャの特訓は辛かつたし、何度もくじけそうになつたし、弱音を吐きそうになつた。でも、女に負けたくないという今じや時代はずれの考え方のおかげで何とか耐えられてきた。特訓の成果はかなり早い段階で見え始めていた。

「そこだ！」

「きやつ！」

特訓を始めて3か月が経つた時に俺は初めてエフイに勝てたんだ。かなり紙一重な試合だつたけどそれでもなんとか勝てた。すごく嬉しかつたんだ。俺が勝利の余韻に浸つていた時

「すごいよ、一夏！あんなに強いエフイに勝てるなんて！」

「いや、たまたまだよシャル。エフイがフェイントに引っかかってくれなかつたら俺が負けてたんだ」

「それでもだよ。僕だってエフイからまだ一本も取れてないんだよ？」

顔を赤らめてにこつちに走つてきている女の子の名前はシャルロット。俺がフランスに来て初めてできた友達だ。なんでもシャルのお母さんとサー・シャは知り合いしくてその伝手で仲良くなつたんだ。というかサー・シャはどうやつてシャルのお母さんと知り合つたんだ？ サー・シャに聞いても「アップルパイ」って言つてはぐらかされるし、シャルのお母さんに聞いても「あらあら」って誤魔化して全く話す気がない。まあそのあたりは聞かない方がいいんだろうな。

「うう、もう一回！もう一回です一夏君！次は負けません！」

エフイさんはなんていうかいつもはどじつこでぱやーとした印象があるけどこういう勝負事になるとどうもむきになるというか頑固になるというか

「怖いんですか？」一夏君

…………なんだか分かりやすい挑発をしているけどこれに乗らない手はない。俺はもつと強くなりたいんだ。そのためにもつと経験をつまなきやな！

「一夏、頑張って！」

「おう！」

シャルの声援を受け、俺は気合を入れ直してもう一度今度はもつと確実に勝つためにエフィの元へと走つて行つた。

「「いざ勝負!!」」

第7話

——誰か助けてくれ！——

——いやあ！しにたくな——

——お前はただの兵器なんだよ!!——

……やめろ

——??????"——

——人形は人形らしく俺たちを楽しませてくれよ！なあ!!——

やめろ

——私の為に死んでよ?????"——

——お姉ちゃん……私の分まで生きて——

——今からお前の体に”————”を埋め込むだけだ——

——あなた…………だあれ？——

やめろおおおおおおおおお!!!!!!

「サーシャさん!!起きてくださいもう朝ですよ!!」

その声にハツとして目が覚めた。時計を見るともう朝の8時だ。あまりに私が起きてくるのが遅かったのか一夏が起こしに来てくれたようだ。昨日徹夜してアニメを見ていて寝坊してしまったのかな。

「さつさと着替えて朝食を食べてくださいよ。今日シャルのお母さんと会う約束しているんでしよう？」

…………そうだった。今日はシャルロットの母親のクラリスに会う約束をしていたんだつた。もう一度時計を確認してみると約束の時間まであと少ししかない。幸い約束の場所はここからそこまで遠くないから走れば朝食を摂る余裕もある。ならさつさと食べないとな

外出用の服に着替えたあと、食卓にむかつた。

一夏がこの家に来て半年が経ち、気づいたら一夏がこの家の食事係になっていた。私達のなかで一番料理がうまいのが一夏だったので自然とそうなつたのだ。

「いただきます」

今日の朝食はサンドイッチだった。急いでる私のために食べやすい形にカットされていた。

いいお嫁さんになれるな、あいつは。

一瞬一夏の背中がビクツとなつた気がしたが気にしてる余裕はないので無視無視。

「どうぞさま」

急いでいても挨拶は忘れない。それが「日本」のマナーらしい。私は食器を片付けた後急いで集合場所のカフェに向かつた。

それとしても今日の夢はなんだか嫌な夢だつたな。こんな夢を見た日は決まつて悪いことが起きる。なんだか最近のクラリスは体調を崩しやすくなつてたけどまさかね。

考え方をしているうちに目的地であるカフェに着いた。見回してみるとすぐに、クラリスを見つけた。が、やっぱり調子が悪そだつた。

「おはよう、クラリス。待たせちゃつたかしら。」

「ううん、サーシャちゃん今来たところよ。」

クラリスはにこりと笑顔を向けてきたが、やはり顔色が悪い。私の怪訝な顔に気づいたのか困ったような笑顔を浮かべた。

「やっぱりサーシャちゃんには誤魔化せなかつたか……」

「教えて、今あなたの体に何が起きてるの？」

「そこまで気づいてるんだね」

ふうと息を吐き、クラリスは今まで見たことのないような真剣な顔になつていて、思わず背をピンと伸ばした。何秒か間をおいてクラリスは重い口を開けた。

「私ね、あともうちょっとで死んじゃうんだ」

その時私は心臓が止まつたような感覚に襲われた。

「いつからなの」

「サーシャちゃんと出会う前からかな」

「今から手術を受ければ間に合うかも」

「絶対に間に合わないわ」

「どうしてそう言い切れるの…………！まだ間に合うかもしれないのに！」

「私が患っている病気はね新種の病気なんだって。まだ治療すら確立されてない上にもう手遅れみたいだし」

「そんな…………！」

「ここでも歴史が変わっているなんて…………クラリスの体調や顔色、皮膚の状態、目の状態から推測して恐らくクラリスが発症した病気はいまから50年後に発生した病気で発症率は低いが致死率は非常に高く私が生きていた時代でも進行度が一定以下までしか完治しなかった病気だ。よりもよつてクラリスが発症するなんて…………」

「シャルロットはどうするの？あなたがいなくなればあのことはどうなるの」

「そうね…………今日は私の大事な娘についてあなたにお願いがあるの」

そこで区切り、クラリスは私に頭を下げた

「お願いします。私の最愛の娘を……：シャルロットをあなたに預けたいの」

ダメかしら、と弱々しい笑顔をうかべながら私に言つた。断れるわけがなかつた。私はこの人にたくさんお世話になつたんだ、まだ恩を返しきれていないしなにより一夏がフランスに来て初めて出来た友達なんだ。

「それくらい当たり前。だから安心してクラリス。シャルロットは私とエフィイと一夏で全力で守り抜くから」

「本当にごめんなさい。あなたに押し付けるようで。それとこれをあなたに渡しておくれ」

クラリスから封筒を渡された。中を見てみると数枚の紙が入つていた。内容はシャルロットを養子にするための契約書などが入つていた。

この用意周到なところをみると随分前から自分の死を感じ取つていろいろと準備をしていたみたいね。何で私に相談してくれなかつたのよ…………！

「サーシャちゃん、私のために泣いてくれるの？」

「当たり前でしょう!! あなたは私にとつて大切な人なんだから!」

気づくと私の左目から涙が零れていて、クラリスは弱弱しくてもしつかりと私を抱きしめてくれた。

私はしばらくの間クラリスの胸の中で嗚咽を漏らし続けていた。

その数日後クラリスは息を引き取つた、とシャルロットが泣きじやくりながら私たちに訃報をもたらした。

クラリスの遺言通りシャルロットは私の養子となり、身内だけでささやかな葬式をあげた。

第8話

（数日後の葬式会場）

クラリスの葬式が終わつた直後にシャルロットの実の父親だというセドリック・デュノアという男がやつて来て、シャルロットを引き取ると言つてきた。私は生前のクラリスの約束があるので引き渡せない言うと、セドリックは「そうか」となんだか複雑そうな表情を浮かべると、せめてクラリスに祈らせてくれと頼んできた。私は断る理由もないで「どうぞ」というとクラリスの前でしばらくの間祈り続けていた。私がその様子を見ていたら、「ねえ」という声がして振り返つてみるとそこには世間一般的には美男子といえるであろう少年が立つていた。

「僕の名前はシャルル・デュノア君の名前聞いてもいいかな？」

「サーシャ・エーデルバインよ」

私の名前を聞いたとき、少し考え込んだように顔を伏せて、次に顔を上げたとき

「单刀直入に聞こう。君は何者なんだい？」

と私に尋ねてきた。いきなりなんだこいつは

『原作には』君のような子はいなかつたはずだし、何よりもシヤルロットが本家に
来ないというのはおかしいんだ。ねえ、もしかして君は『転生者』なんじやないのかい
？』

…………こいつは一体何を言つているんだ。私はこいつの言う『てんせいしや』とい
う単語に全く心当たりはないし、何より原作つてなに？もしかしてこいつはあれか？一
夏の住んでいた日本の文化でいう『中二病』というやつなのか？

「私はお前のいう『転生者』とやらでもないし、原作とやらも知らない。そういうのは
同じ趣味の奴とやるんだな」

少しの間訳のわからないといった顔をしたが、私の言つたことを理解したのか顔を
真っ赤にした。

「僕は中二病じゃない!! 事実を言つてるまでだ!」

「言い訳するのは勝手だがせめて静かにしろ。ここは亡くなつた人に静かに祈りを捧げる場所だから」

「つ～～～～!!」

なんかゆでダコのように顔を真つ赤にしてるな、こいつ。感情のコントロールがまるでなつていない。それにしても目障りだな

と私もいい加減こいつの中二病発言にうんざりし始めていたので、実力行使も厭わないでここから追い出してしまおうかと検討を始めたとき、セドリックが奥からやつて来てシャルルに「帰るぞ」と告げ、私に「ありがとう」と言うと待たせてあつた車に向かつていつた。シャルルも急いで自分の車に向かつていつた。なんだつたんだ、あれは。

「サーシャ? どうしたの?」

声がした方に顔を向けるとそこには泣きはらして目が真つ赤になつたシャルロットがいた。

「なんでもないわ。ただ変な男が絡んできただけよ」

「大丈夫だったの？それ」

「変な話を無理矢理聞かされただけよ心配はいらないわ」

「そつか」

とシャルロットは弱弱しく微笑んだ。その表情は生前のクラリスが最後に見せた笑顔とそつくりだつた。

「そういうあなたこそ平気なの？」

「私は…………平気だよ。たくさん涙を流したから大分気持ちが落ち着いたから」

…………やつぱり家族がないというのはとても寂しいことなのか。私もエフイも親がいないからわからn

…………あれ？ちょっと待て。私には家族がいたはずだ。なのに何で思い出せない？今まで忘れていた？

ナニカガオカシイ。

わたしは急に目の前が真っ暗になり、まるで底なしの穴に落ちたような不安感に襲われた。

思い……出せない。”あのとき”から前の家族のことについての記憶が抜け落ちている。必死に思いだそうとしていると突然視界にノイズがかかり急に意識が遠くなつていつた。

「お姉ちゃん」

ただ視界にノイズがかかつた時に聞こえた誰かの声がずっと耳から離れなかつた。

第9話

～数日後～

一夏 SIDE

葬式会場でサーシャさんが倒れてから数日が経つた。倒れた当初は40度の熱を出して1日中寝ていたけど、2日目の朝には熱も引いて元気そうにカレーライスを何杯も頬張っていた。

全くあの人は、無表情でなに考えてるかよくわからないけれど、動搖しているときと旨い飯を食っているときはとても分かりやすい。表情は全く変わらないんだけど、何といふかオーラというか纏っている雰囲気で分かるんだ。そういうれば新しい生活を初めてもう半年は経つけどまだサーシャさんの笑顔をみたことはないんだよなあ。エフィさんは表情豊かで何回も見たことはあるんだけど、なぜかサーシャさんは見たことがない。というか、あの仮頂面の無表情しか見たことがない。気になつて、ずっと一緒に居るというエフィさんに聞いてみたんだけど、彼女も見たことがないらしい。でもシャルのお母さんは見たことがあるつて言つてたな。どうやつてあの無表情を崩せたんだ

ろうか。やつぱり食べ物なのかな。

そういうえば、シャルはとくにサーシャが倒れてからずつと落ち込んでいて、食欲がなかつたけどサーシャが目を覚ましてからは少しずつだが、食欲も戻つてきていた。

ただ、目が覚めてからのサーシャさんはなんだか様子がおかしい。食事の時以外ずっとぼんやりとしているし、あまり寝ていないようだつた。

やつぱりシャルのお母さんが亡くなつたのがかなりショックだつたのだろうか。サーシャさんとシャルのお母さんはかなり仲が良かつたらしいから。早く元気になつてほしいと思うのは多分俺だけじゃないと思う。エフィさんもシャルも心配そうにしてたから。

そういうえば、他に変わつたことといえばシャルもISのトレーニングを始めたことだ。この前のIS適正検査の時、Aランクを出したことから国に代表候補生にならないかと再三連絡が来ているのだがシャルがその誘いを断つていた。なんで断つたのか聞いてみたら、うーんとすこし悩んだ素振りを見せて、少し意地悪そうな笑顔を見せた後に「内緒♪」とおつしやられた。

みんなそうやって隠すのはなんだか仲間はずれにされたような感じがしてならない。だけど誰にだつて話したくないことはあるのだろうと思い追及はしていない。さて、今日もシャルと一緒にISのトレーニング頑張りますかね！

一夏 SIDE OUT

サーシャ SIDE

倒れた後、私は「はずつと」あのときよりも前のことを思いだそうとしていた。むしろ今まで気にならなかつたことがおかしいくらいに記憶が抜け落ちているからだ。主に抜け落ちている内容としては、当時の訓練内容と教養以外の記憶のほとんどが該当している。これはいくらなんでも異常だ。家族のことですら忘れてはいるのに戦闘に関する記憶は全く抜けていないことがおかしすぎる。そして何よりもこんな異常なことが起きてはいるのに私はちつとも動搖していないことがなによりも異常だ。普通の人間なら恐怖するだろう、憎悪を抱くだろう、困惑するだろう、悲しむだろう。だが、私にはそれがなかつた。まるでそれが当たり前のことだというかのように私の心は何の揺らぎも起こしていない。

ねえ、博士。私は一体何者なんですか？私は本当にニンゲンなんですか？

第10話

クラリスの葬式から二週間が経過した。IS適正検査でAランクを叩き出したシャルロットは今でも政府から誘いの電話が絶えないという。最初の方はやんわりと断つていたシャルロットだったが、あまりにもしつこかつたせいなのかどんどん扱いが雑になつていき政府の使いの応対にも苛立ちが混じるようになつていて。これを深刻に見た私とエフィは傭兵の仕事で培つたコネを使い、シャルロットを執拗に勧誘している議員を突き止めまた数日かけて弱みを探つて議員の犯している汚職の数々を脅しの材料にし脅迫することでなんとかシャルロットへの執拗な勧誘は収まつた。

だが、シャルロット自身代表候補生になる気がないだけでISについては興味があるらしく私に稽古をつけてくれと頼まれた。ここで少し問題が発生した。その問題はシャルロットのISがないことだ。ISコア自体はこの前の仕事の時の歯獲したISから引っこ抜けはあるのだが、いかんせん歯獲したISは大破しており修理ができない状態だし、予備の機体も一夏に渡したので最後だったのだ。エフィと一晩中相談した結果、私たちの機体のスペアパーツから集めて新しい機体を作つてしまおうということでお話が纏まつた。幸い私の頭の中には制作に関することもあるし、エフィも整備班並みに

知識はあるしそれを作るための工具も疑似型ISコア（収納用）に入っていたのでそれを使えばいい。シャルロットには悪いが完成するまでは量産機のラフアールで我慢してもらうとする。

シャルロットと一夏のISと基礎訓練は基本的にエフィイが担当し、私はシャルロットのISの設計を担当することとなつた。適材適所というやつだ。流石のエフィイもコジマエンジン辺りの知識は乏しいのでそのあたりの知識もしつかり備えている私が担当することになったのは当然だと思う。どうして兵士である私がそのあたりの知識が豊富かというと藤堂博士が熱心に私に講義してくれたからだ。当時何もすることがなく暇を持て余していた私のために博士がしてくれたことなのだがまさかこんなところで役に立つとは思わなかつた。

そういう訳でなんとかフレームまでできたのだがここからがまた長そうである。

最近色々な問題ばかりが起きている気がする。と私は作業の休憩でブラックコーヒーを飲みながら最近起こつていたことを思い返していた。さきほどのシャルロットの勧誘しかしり、私の記憶のことしかり、そして新しい問題のようなものが浮上し始めたのいた。クラリスの葬式の時に現れたシャルルという痛い男がどうやつて突き止めたのか知らないが私の家に来るようになつたのだ。それだけならまだいいが、あの男私達のことを探つてはいるようだつた。現に不審な動きをしていた何人かの情報屋をとつつか

まえて吐かせた結果依頼主が同じだつたので間違いない。

本当迷惑だ。色々と面倒なことや考えなければならぬことがいっぱいあるのに面倒事持つてくるなよ……

私は考えただけで頭が痛くなるようなことばかりあつて頭を抱えた。

いつその男が来ないような場所に引っ越してしまおうか。それならなるべく治安が良くてモラルがあつて、ご飯がおいしいところがいいな。ああそれがいい。

私はそこらへんに置いておいたパソコンを起動し自分の理想的な国を検索し始めた。するとある国が一位にあつた。その国は

「ニッポンか…………一夏の故郷で、アニメーションの国でご飯がおいしいと評判の国だよね」

そう、サーラは一年前からアニメに魅入られてしまった。初めてアニメを見たときはカルチャーショックに襲われて衝動的にそのアニメのDVD全巻を購入してしまうくらいには驚いていた。それからのサーラは漫画やラノベを買いあさり、すっかり日本のサブカルチャーにはまってしまっていた。そんな彼女が住みやすい国の上位にその国がランクインしているとなつたら

「ニッポン行きたいなあ」

観光に行きたくなつてしまふのも無理はない。引つ越すのは無理だととしてもせめて観光ならと思つた。そういうえば一夏とエフィで旅行してないなと思い早速プランを練り始めた。

「まずは一夏のパスポートは…………知り合いにパスポート偽造できる奴がいるからそいつに頼むとしてシャルロット・パスポート持つていないだらうからその手配をして。うふふなんだか楽しくなつてきたな♪」

声色と目はとても楽しそうなサーチャではあつたが表情はいつものように無表情のため周りからみれば楽しそうのかつまらないのか判断しづらいだらうが本人がそれに気づく日はまだ遠い

「突然ですがみんなで旅行することになりました」「「はい?」」

その日の夕食私は旅行することをみんなに発表したら案の定みんなぽかんとした表情になつた。

「どうしたんですか？いきなり旅行なんて」

意外そうな表情をしたエフィイが私に訪ねてきた。

「最近いろんなことがあつたでしょ？やつぱり疲れとかストレスたまつているだろうから旅行しようかなつて」

「ふむ、確かにそうですね。それで何処の国にするんですか？」

「ニッポンという国よ」

「ええ!? 日本だつて!?

「きやあ！も、もう一夏いきなりきけばないでよ……」

サーシャの提案で思わず一夏が叫んでしまつたせいでシャルロットが驚いてしまつていた。

まあ、一夏のこの反応予想どおりね。むしろこのままスルーされた方がかえつて心配

になるし。

一夏は私に駆け寄り、シャルロットに聞こえないように小声で

「俺つて日本じや誘拐されていることになつていてるんですよね？　だつたら日本に行くのは危険じやないんですか？　それに俺パスポートもありませんし」

「そのあたりは心配いらぬわ。この時のために一夏には髪を伸ばし続けてもらつたわけだし。それに加えて偽名にすればまあられないんじやない？」

「これつてそのためなんですか？　ていうか随分と適当ですね」

ところで「あのう……」とシャルロットが申し訳なさそうに手を上げ

「私パスポート持つてないんですけど」

「その点なら大丈夫よシャルロット。あなたのパスポートはもう手配済みよ。あとは本人の記入だけね」

「ほんと！やつたあ！」

シャルロットが年相応の笑顔で喜んでいた。ふむ色々苦労した甲斐があつたな。

「それでいつ行くんですか？」

「来週。それまでみつちりと訓練してもらいたいなさい」

「はい！」

まあ一夏はなんだか気が乗らないみたいだけどそろそろ話つけないと後々面倒になつてくるかも知れないからね。あと一週間で組み立てられるかな？まあ徹夜すれば終わるか

私は旅行でどこ行くかとか用意する物などで盛り上がりつついる3人を眺めながらドクターペッパーをあおつていた。

第11話

「一週間後」

「やっとできた……」

深夜3時、まだみんな寝静まつてている時間に一人ガレージで作業していたサーシャが目の下を真っ黒な隈ができ、疲れはてた表情をしながら呟いた。この少女、前話の宣言通り一週間でISを完成させるために食べる時とトイレに行くとき以外ずっとガレージで寝ずに作業していた。普通ならそんなことはできず過労で倒れるはずなのだが、肉体強化を施され一週間寝ずに活動する訓練を受けていたお陰で倒れずに済んでいるといつたところだ。

のそのそとガレージを出て、一週間風呂に入らずに作業していたせいで臭いと体の汚れが酷いことを思いだしシャワーで念入りに体と髪を洗い、今にも眠つてしまいそうになりながらも何とか自分の部屋にたどり着いたところで力尽きてしまったのか部屋に入った瞬間倒れてそのままサーシャは寝てしまった。

～翌朝～

朝食を作る係が随分前に一夏に決まってから一夏が起きる時間は6時半になり、誰よりも先に起きるようになつた。

「今日もサーチャさんはガレージで作業中なのかな。今日は日本に旅行する日なのに」

ここ一週間サーチャはずつとガレージに引きこもつて何やら作業していたため、食事をガレージ前まで持つていく必要があつた。出来るならサーチャ自身が食事の時に出てきてくれればいいのだがエフィトイドクペの補給以外絶対出てこないらしいので仕方なく持つていつている。勿論持つていくのは一夏だ。

「いい加減出てきて食べてほしいよな。持つていくのは面倒だし、ホコリっぽい場所で食べるのには体に悪そうだしな」

独り言を言いながら身支度を整え廊下に出たときサーシャの部屋の扉が開いていることに気づいた。なんだ、もう出てきたのかと思いサーシャの部屋を覗いてみるとそこには

服どころか下着すらはいていない生まれたままの姿で床に寝ているサーシャがいた。

「うわあ!? サーシャさん、何でこんなところで寝てるんですか!? ていうか服は！ 何でも着てないんですか!?!」

サーシャの雪のように白い肌をまじまじと見てはいけないものを見かけた時ハツとして顔を真っ赤にして慌てて顔をそらしながら叫んだ。かなり大きな声で呼ばれたのにも関わらずサーシャはふにゅと寝言をもらして寝返りをうつただけで全く起きる様子はない。

「一夏あ、どうしたの？まだ朝早いよ」

目を擦りながらシャルが部屋から出てきた。シャルの部屋はサーシャの部屋の目の前なのでサーシャの部屋が見えるわけで

「ねえ、一夏。これはどういうことなのかな？」

「シヤ、シャル。違うんだ、俺は悪くないんだ。うわあ!?」

シャルはにこやかに言うがシャルの瞳にはハイライトがない。これにたいして慌てて弁明しようと試みるが一夏の足をサーチャが掴んでバランスを崩した一夏はそのまま転んだ。サーチャは寝ぼけた様子のまま一夏に足ん絡めて抱きついた。

「ササササーサさん!? 一体何をするんですか!?」

「だきまくらー」

いつもの冷たい声とは違ひ幼げな声をあげながらサーチャは一夏の手を自分の胸に持つていった

「いちかのてあたたかーい」

そのとき住宅地に乾いた音が鳴り響いたと同時に「誤解だー!」となさけない男の声

が鳴り響いた。

「「「「いただきます」」」

一夏は左頬に真っ赤な紅葉を咲かせながら、シャルは少し不機嫌そうに、エフイはそんな二人を見て怪訝に思いながらそしてこの騒動の中心人物であるサーシャはいつも通りの様子で食事を始めた。

「サーシャさん、いい加減パジャマを着て寝てくださいよ。一夏君もいるんだから」「だつて寝苦しいし」

エフイ曰くサーシャは一般人と比べて羞恥心が著しく欠如しているらしく、男の前でも平気で裸になれるくらいには羞恥心がない。なら、性的に襲われるのではないかと一夏は言つたが、エフイは苦笑しながら首を振り、サーシャはなまじ強いから襲われたとしても撃退できてしまうからなかなか治らないという。

「朝食を食べ終わつたら、荷物の最終点検と身支度を整えて12時には空港に着くようになるからね」

「「はーい」」

朝食が終わり各々準備を進める為に部屋に戻った。ここでサーシャは重大なことに気づいた

(あれ? 私準備してなくね?)

ずっと引きこもっていたので準備をするのをすっかり忘れていた。サーシャは携帯の時計を見ると時計は7時半を指していた。

(10時にここを出るから残りは2時間半くらいか。急げば余裕ね)

クローゼットからスーツケースを取り出しながらそう思つた。なお準備は余裕で間に合い新作のI.Sのデバックを行う余裕まであつたという。

「さて、そろそろ行くわよ」

(日本か……フランスから出たことがなかつたから楽しみだな♪)

(俺日本に帰つて大丈夫なのかな? 今になつて心配になつてきただ……)

(日本つて銃持ち込めないんですよね……もしも襲われた時苦手な格闘でしか対処できないのかあ。不安だ)

(飛行機乗つたらすぐ寝よう)

各々様々な思いを抱きながらIS発祥の国日本に旅立つていった

「そういえばISって持つて行つて大丈夫なのか?」

「私たちのISには特殊な仕掛けが施されているからたとえ最新鋭の探知機でもばれな
いわよ」

「科学の力つてすげえ!」

第12話

（日本）

乗る飛行機を間違えたとか、乗った飛行機がハイジャックされたなどといったトラブルもなく無事羽田空港に降り立つた。

「帰つて来たんだな、俺」

何やら一夏が黄昏た雰囲気で覚悟を新たにし、シャルロットが人混みに呑まれて迷子になつたこと以外特に変わつたこともなく一行は旅を楽しんでいた。

初日は東京ディズニーランドで遊び、2日目はディズニーシーの方に行つた。サーシャとエフィは自分達のいた時代にはこういつた遊園地は存在していなかつた為、全てが新鮮といつた感じで楽しんでおり、一夏とシャルロットは聞いたことはあつたが行つたことはないといつた感じでこちらも純粋に楽しんでいたようだ。特にシャルロットは目を輝かせながら一夏を振り回していた様子で一夏も苦笑しながらもしつかりとシャルロットの手を掴んで迷子にならないように気を使つていた。

3日目は秋葉原にいく組と池袋にいく組で分かれた。勿論秋葉原に行くのはサーシャ1人だつた。相変わらずおしゃれとかに興味をもたない様子にエフイは苦笑しながらも5時までに池袋に集合だと言い別れた。

「ようやく1人になれたわね」

サーシャがここで空気を読めない発言をしたのには訳があつた。それは織斑千冬に会いに行くという目的があつたからだ。元々日本旅行を計画した目的の1つでもあつたのだがなるべく一夏には知られたくなかったので単独行動が出来る時間を作ろうと思つていたのだが割と簡単にその時間が取れたので拍子抜けをしていた。だが、（そつか……私と同じ趣味の人いないのか）

と結構落ち込んでいた。

織斑家の場所は以前仕事で百春についての調査を行つたときに特定していたため、特に道には迷わなかつた。そしてついに織斑家にたどり着いた。

柄にもなく少し緊張しているようだ……それも無理はないか。これから会うのは現時点では世界最強の人物であり、そんな人物を相手に一夏について話をつけなければならぬのだから。

私は一度大きく息を吸い、意を決してインターホンを押した。少し待つとインターホ

ンから「はい?」と少年の声がした。私は

「すみません。私は友人の千冬さんに会いに来たんですけど千冬さんいますか?」

もちろん嘘だ

「そうなんですか、でもすみません。姉は今ドイツに行つてるんですよ」

「あ、そうなんですか」

ちよつとまちよつと待て。織斑千冬は今ドイツに居るだと? これは予想外だ。私はあと2日でフランスに帰らなくてはならない。私が帰つた後ドイツにまだ居るなら仕事のついでに会いに行けるけど居ないのならまた日本に来なくてはならない。流石にそれは面倒だ。

「千冬さんいつ帰つてくるか分かりますか?」

「後半年くらいは帰つてこないと思いますよ」

「そうなんですか……ではクラチカが半年後くらいにまた来ますと千冬さんに伝え
てください」

「分かりました」

おそらく百春であろう人物に伝言を残し次の目的地に向かおうとしたとき織斑家を後にしようとした時、織斑家から1人の少年が出てきた。その少年はどことなく一夏に似ており目は何故かオッドアイだった。

変だな。前の資料を見た時百春の目はオツドアイじやなかつたと思うんだけど。訝しんでいると、その目はいきなり光を放ち

「僕の物になれ!!」

と百春が叫んだ時、私は

（百春さん大好き！）——エラー。精神に異常が発生しています。

（もうあの人しか考えられない！）——解析完了。精神の浸食に対しカウンターを発動。

（私にはあのひとしかいないの！）——3、2、1。完了。精神の汚染を除去しました。

「ツ!!」

何だ。今何が起きた?!ああ思い出したくもない!私がこの男を一瞬でも好きになるなんて!早くここから離脱しよう。そうしよう!

私は踵を返すとありえないものを見たような啞然とした表情をした百春を置いて次の目的地に向かつた。

次の目的地は鳳鈴音の自宅

「馬鹿な。神に選ばれた僕の力が通用しないだと!? まさかあの女、転生者か！」

～～～～数時間前のある港～～～～

朝早くまだ霧も出ている早朝の港に女性の団体がとある輸送船に集まっていた。
「もうすぐこの平和ボケしたくそつたれなこの国に復讐ができる。この”兵器”でな
！」

リーダー格の女が指を指した先に一つのコンテナがあり、中には金属の鎧のような物
と銃器がずらりと並んでいた。

「手始めに今日の午後3時に”イケブクロ”を襲撃し我らの恐怖をこの国に刻むぞ
!!」

おおおおおと歎声が鳴り響き熱狂が広がっていく中、少し離れた場所でスーツを着た
青年がタバコを吸いながらまるでお気に入りのものを自慢するように呟いた。

「なあ、見ていいか天災《篠ノ乃束》。お前の作つた物の模造品で戦争が始まるぜ?
わくわくするなあおい！」

せめて愉快に踊ってくれよ?あわれな道化師達。子供ように笑いながら呟いたその
青年の呟きを誰も耳にした者はいなかつた。

第13話

そこそこの速度で走つてから10分程度で次の目的地の鳳鈴音の家に到着した。

当初の目的は一夏の数少ない友人だつたという鈴音に一夏の無事を知らせることだつたが事情が変わつた。先程のどうやつたのかまでは不明だが私に洗脳をかけてきたことだ。なんとか洗脳を解いたのはよかつたのだがここである可能性が浮上してくる。それは、百春が一夏の友人に洗脳をかけている可能性だ。恐らく百春の洗脳の対象は女性だけだと私は推測する。そうじゃなかつたら何故一夏は洗脳にかかつていない？家族にはかけられないというのなら一夏の言つていた千冬の豹変には説明がつかない。恐らく千冬は百春の洗脳にかかつていると考えられる。もし、あの洗脳に回数制限とかけられる人数の制限がなかつたら間違いなく一夏の大切なものを奪うだろう。

取り敢えず会つてみてからだと思いインターほんを押した。少したつてから「はい」と少女の声がした。

(よし、本人のようね。また無駄足にならなくて良かつたわ)

内心ホツとしながらも改めて気を引き締め

「百春様の使いで来たものよ」

勿論大嘘である。恐らく鈴音は洗脳にかかつていると推測出来るので何としてでも外に引きずり出すにはこうでもしないと出てこなさそくな気がした。

「嘘ね。あなた、百春様の使いじやないでしょ」

簡単に見破られました。

即座にプランBに移行することに決めた。まずは右目の義眼のある機能を使うことにした。私の右目は過去の実験とやらで潰れてしまつたらしい（勿論その辺りの記憶はない）ので博士達が私の為に作ってくれたのだ。ただ、博士達が悪乗りして様々な機能を取りつけており、無駄にハイスペックになっていた。

その機能の1つはハイパーセンサーである。これにより室内の生命反応を正確に探ることができる。

——サーチ完了。室内の生命反応1。周囲の生命反応は4です。

——同時に周囲に設置されている監視カメラにハツキング。……完了。偽造データを転送します。

（よし、準備ができた。あとは……）

私はI.Sを右腕だけ展開し、腕に収納されていた対I.S装甲用レーザーナイフを取り出して目の前のドアの鍵の部分を切り裂いた。キン。つという音とともに鍵の部分を切

り抜き、素早くドアを開いて電話をしようとした鈴音に向かってさつき切り抜いた鍵の部分を携帯を持っている手に投げつけた。

投げつけた鍵の部分は狙い通りに手首に命中し携帯を鈴音の手から弾き飛ばした。

「きゃあ!! あ、あんたどうやつて!?」

恐怖に染まつた表情をしていたが構つてている暇はないので直ぐに距離を詰め、腹パンをし迅速に相手を気絶させた。

鈴音がちゃんと気絶しているかを確認し、気絶していることを確認するとバッグからヘッドホンとケーブルを取り出した。ケーブルを義眼のコネクタに接続し、もう片方をヘッドホンに接続した。先ほど百春に洗脳されかけた時に義眼でデータを取り、洗脳を解くデータも揃つたのでヘッドホンを使って鈴音の洗脳を解こうと思つたのだ。理由は色々とあるのだが、一番の理由はやはり一夏の為と言える。これ以上あんな奴に一夏の大切なものを奪わせたくないという思いが強かつた。

10数分後に接続していた義眼から洗脳解除の報告が出た。

（良かつた。解けたということは鈴音はまだ洗脳されてからそこまで時間が経つていないということね）

この洗脳解除のプログラムは時間が経ち強力になつているものは解除出来ないという欠点出来ないという欠点があつた。だが、洗脳が解けたということはそこまで強力

じやなく、尚且つ時間も経っていないことだらう。

「う、うーん」

とちようど鈴音が目をさましたようだ。

「おはよう。よく眠れた?」

「あ、あんたさつきの不法侵入者! 警察に通報するわよ!」

「それよりもあなたに聞きたいことがあるわ。あなたにとつて織斑百春はなに? その言葉に怪訝な顔をしたが、すぐに

「一夏に害をなす屑野郎よ!!」

と鬼のような顔をして叫んだ。

(ふむ、洗脳は解けているみたいね。)

「さつきは百春様つて言つてたみたいだけど?」

「え?」

鈴音が何を言つてているのか分からぬと言つた顔をしたがさつきまでの記憶が蘇つたのか顔を青くして「私なんであんな奴を……」とぶつぶつと呟いていた。

「大丈夫。あなたの洗脳はちゃんと解いたわ」

「洗脳!? 私あいつに洗脳されていたの!? 許せない!!」

と言うなり家から飛び出そとしたので直ぐに腕を掴んで止めさせた。

「離して！ いまからあいつをぶん殴らなきや気が済まないんだから！」
「やめときなさい。 また洗脳されるわよ」

「ツ！」

また洗脳されるのは嫌なのか渋々殴りに行くのは止めたようだ。

「で？ あんたは何者なの？ どうして私を助けてくれたのよ？」

「私の名前はサーシャ。 織斑一夏の現在の保護者。 なぜ助けたかはあなたが一夏の友人だから」

「ちよ、ちよつと待つて。 あんた今一夏の保護者つて言つたわね！ 一夏は、一夏は無事なの？」

「うん。 とても元気そうにしている。 写真見る？」

私は携帯に一夏の写真を表示させ鈴音に見せる。 鈴音は画面を食い入るように見て、少し安心したような顔になつた。

「うん。 確かに一夏だわ。 それもここに居た時よりも幸せそう」
なんだか少し寂しそうな表情をした後、

「で？ 一夏はどうやつて知り合つたの？」

「えーと。 仕事で一夏を拉致るようない r……」

「ちよつと待つて、ちよつと待て」

いきなり鈴音が頭を抱えながら話に水を差してきた。

「…………いきなりどうしたの？」

「あんた思いつきり拉致つていったわよね!? 何がどうなつてそなつたのよ!」

「まあ色々あつて私が引き取つた」

「その色々が重要なんでしょうが！ その辺り話しなさいよ！」

「ええ～」

とても面倒くさいとは思つたがまあ半年以上行方が分からなかつたんだから仕方ないと思い話すこととした。

（少女説明中）

「…………ということよ」

「なるほどね。一応納得したわ」

取りあえず一夏の身の上の話を全てしてなんとか納得はしてもらつたようだ。

「私はそろそろ帰るけど、念のためにあなたに洗脳対策をしておくから」

「どうやってやるのよそれ」

「毎日このヘッドホンで三十分音楽を聞くことである程度は洗脳攻撃を防げる」

「なるほどね」

「それとこれからはあまり百春とは関わらない方がいいと思う。あなたの洗脳が解けているとばれたらあなた2度と解けない位に洗脳されるかも」

「それなら心配ないわ。私来週中国に行くし」

「そうなの？」

「うん。私の両親が離婚しちゃつてお母さんと一緒に中国に行くことになるし」
「それならと私はポケットから名刺入れを取り出すと名刺を鈴音に手渡した

「これは？」

「私の連絡先。困ったことがあつたらここに書かれてある電話番号に連絡して」

「わかつた。何からなにまでありがとうね」

「別に一夏の友人の為だ。これくらいは当然」

私はさらにポケットから財布を出して

「これあなたの家の修理代」

「…………本当に壊したのね。本当は怒るべきなんだろうけど私を助けてくれたわけ

だし不問にするわね」

「本当にごめん」

そして私は鳳家を後にした。

鳳家を出てすぐにISの秘匿通信にエフィイから連絡がきた。またシャルロットが迷子になつたのかと思いながら通信に出るとエフィイから切羽詰まつた声が聞こえてきた。
「大変です！ サーシャさん！ 池袋で……きやあ!! 池袋でISテロが……なんとか一夏君とシャルロットちゃんと避難させましたけど……」

「自衛隊は？ こんな時の為の自衛隊でしょう」

「自衛隊は確かに動いているんですが何せ数が多くて……。今のところ自衛隊はかなり押されています。私も一夏君達を避難させたら戦闘に参加しようと思っています」

「すぐに向かうから無茶はしないで」

「了解です！」

（何でこんな時にテロが？ いやそれよりも早く向かわないと！）

義眼の機能を使い周囲に生命反応と監視カメラがないことを確認すると武御雷を起動し巡航モードに設定し池袋に向かい飛翔した。

第14話（修正）

エフェイS I D E

サー・シヤさんと別れた後、私と一夏君とシャルちゃんの3人でショッピングを続けていた。

「でも意外だなあ。サー・シヤさんがアニメ好きだったなんて」
一夏君はサー・シヤさんがアニメ好きだったことを初めて知ったようだ。

「ふふ、サー・シヤさんは一夏君と出会う前からアニメが好きだったんですよ」「そんなに前から何ですか？てつきり最近ハマったのかと」

「サー・シヤさんは自分のことを隠すのが上手いひとだから分からなかつたのも無理はないと思うよ。」

「まあ、確かに。自分の悩みとか抱え込んでしまうタイプですよね、サー・シヤさんは」
そんな他愛無い会話をしながらショッピングをし、買い物もひと段落し3人でカフェで休憩していた時だつた。

突然外から銃声が聞こえた

「今のは!?」

「つつ！シャルちゃん一夏君伏せて!!」

エフイが叫んだ瞬間一夏とシャルは即座に床に伏せ、エフイも近くに居たウェイトレスを掴んで素早く伏せた。エフイが伏せたのとほぼ同時に店内に銃弾の嵐が襲った。店内に悲鳴が響いたが濃密な血の匂いがしなかつたことからどうやら自分の警告のおかげで死人は出ずに済んだようだ。直ぐに撃ってきた方向を見るとアサルトライフルを持つたISが別の方向に飛んで行つたところだった。

（まさか日本でISテロ!?どうして）

外からまた銃声が聞こえてきたため考えるのは止めにして避難することにした。

「表はまだ危ない！裏口から逃げよう！」

それには賛成だつた。いつさつきの奴が戻つてくるか分からなかつたし、あのテロリストが1人だけとは到底考えられなかつた。今はとにかく一夏とシャルを安全な場所に逃がさなければならぬ。

「一夏君、シャルちゃん立てる？ここから逃げるよ！」

「逃げるつて何処に!?」

「見て一夏！あれって”自衛隊”じゃない？」

店の裏口から戦闘音がしない方向に走つていくとIS打鉄を身に纏つた人たちが池

袋の中心地に飛び去つて行つたのが見えた。

「エフイさん、自衛隊の人たちはあのテロリスト達を倒せるんですか？」

走りながらシャルは不安そうに私に尋ねてきた。私はさつきちらりと見たテロリストが乗つていたISにつけられていたエンブレムを思い出しながら

「敵の数によつては自衛隊じや勝てないかも…………」

「え!? どうしてですか?!」

シャルが驚くのも無理はない。そこらへんのテロリストだつたら自衛隊の敵じやないのだが…………

「さつきのISのエンブレムを見て確信した。テロリストの正体は今中東で一番大きい傭兵团『砂漠の獅子』だね

。あいつらは練度も高くて連携が強いからね。実践経験がない軍じや敵わないくらい強い」

「そんな…………」

シャルがとても不安そうな表情をしていたが、でも大丈夫だよと言つて続けて
「私も直ぐに加勢をするから」

と自衛隊のISを一機撃墜した『グラナーダ』を睨みつけながら私は2人に告げた。
グラナーダは最近テオラインダストリーが発売したばかりの量産機でスペックも実

戦向けの万能機。それが最低6機いる。数も経験も負けている自衛隊ではいつ全滅してもおかしくはない。

「分かりました。シャルは俺が守るからどうか無茶だけはしないでください」「一夏!？」

一夏は分かつてているのか直ぐに了承したがシャルはありえないといった表情だつた。
（無理もないか……シャルちゃんにはまだ話していいからね。私たちの”本業”
を）

「大丈夫だよシャルちゃん。だつて私傭兵だもん。こういつた不利な戦況も慣れてる
よ」

私は”陽炎”を起動させた。ハイパー・センサーには敵性IS” 15機”と表示され
ていた。

（15機?! いくらなんでも多すぎない!?!）

直ぐに私はサーチャさんに秘匿通信で連絡した。

「大変です！ サーチャさん！ 池袋で……きやあ!! 池袋でISテロが……なんとか
一夏君とシャルロットちゃんと避難させましたけど……」

「自衛隊は？ こんな時の為の自衛隊でしょう」

私たちがいる場所に流れ弾が飛んできたので慌てて”プライマルアーマー”を起動させて一夏達を守った。

「自衛隊は確かに動いているんですが何せ数が多くて……。今のところ自衛隊はかなり押されています。私も一夏君達を避難させたら戦闘に参加しようと思っています」

「すぐに向かうから無茶はしないで」

「了解です！」

通信を切り、私は空に上がった。

「あ？まだ残つてたのかよ。まあいいこれで最後だから」

と前方三百メートルに居た女が打鉄を撃ち抜きなが面倒くさそうに呟いた。

(こいつの言つてることが本当なら恐らく自衛隊は全滅……そして目的がわからな
い今こいつらを好きにさせるわけにはいかない！)

アサルトライフルを構えて直ぐにグラナーダに発砲した

「おつと」

だが相手も素人ではないのでこつちの攻撃を易々とかわしお返しと言わんばかりにこつちに発砲してきた。わたしはそれを上昇して回避しながら^{ラビッド・スイッチ}高速切替でスナイパーライフルに変更してすかさず発砲した。流石の相手も避けられなかつたのか胸辺りに

着弾し、かはつとうめき声をあげながらも

「いい腕じやねえか。こっちが避けづらい弾道で撃つてくるなんてよ。」

口元から流れる血を拭いながら女は楽しそうに笑いながら確信したように

「お前遠距離支援型だろ？」

と言つた。

（やつぱりばれちゃうか）

元々私はスナイパー専門だつたため、中、近距離戦は並みより上程度の実力しかない。なのでそのことが露見する前に片を付けたかつたのだが相手がなまじ強かつた為、一機中破させるのに時間がかかつてしまつた。

「それと私相手に時間かけすぎたのは痛かつたね。ほら私の味方が次々と来てるよ？」

「まず!？」

後ろに殺氣がし、咄嗟に避けようとしたが遅すぎたらしく何発か当たりそうになつたのを”プライマルアーマー”で防いだ。

「つち！なんだよそのバリアーミたいな奴は！」

「落ち着け。バリアーといつてもエネルギーと強度には限界がある。それにあいつは撃つのは上手いらしきが避けるのは得意じやなさそうだしな。ここは私たちで十分だ

からお前たち2人で駅襲撃してこい」

「了解！」

「ツ!? させるか!!」

駅には一夏達がいる。わたしは何が何でも通すわけにはいかなかつた。だが、四方八方から銃弾の嵐が襲つてきたのでやむなく回避した。

「おいおい何処にいくんだよ、スナイパー。私たちと遊ぼうぜえ」

「あんたたち…………！」

周りには13機のIS。バリアを展開すれば突破はできるだろうが、そのときは恐らくエネルギーが尽きかけてる。構うものかと”プライマルアーマー”を展開し突破しようとした時

「いかせるかよ!!」

と背中に重い衝撃が襲つた

「かはつ……」

(うそ！プライマルアーマーを貫いた!!)

ハツとしてコジマエンジンの粒子量をみたら残りがもう少ししかなかつた。さつきの戦闘で着弾しそぎたからだ。さらにいえばさつきの重い衝撃のせいで”プライマルアーマー”が減衰してしまつた。

（くそ！陽炎のコジマ出力は低めなのが完全に裏目でた！これじやああの2機を追えないと……）

残りシールドエネルギー量は8割あるがこれだけの銃弾を受けたら一瞬で削りきられてしまう。かといって全てを避けながら離脱する技量は私にはない。だつたらやることは1つだつた。わたしは一夏君にプライベートチャンネルをつなげた。

「一夏君！よく聞いて。そつちに敵ISが2機行くわ。わたし”達”が行くまでなんとかして持たせられる？」

「分かりました！なんとか持たせてみせます。それと別にエフィさんたちの救助の前に全て倒してしまってもいいんでしょう？」

「何でフラグを立てていくんですか!?」

通信を切り、全方面からの攻撃を避けながら両手に持つてあるスナイパーライフルを相手に撃っていく。だが全ての攻撃は避けきれず、少しづつシールドエネルギーが削られていく。スナイパーライフルも一丁がダメになり、直ぐに高速切替でアサルトカノンに変更し撃していく。

数分の激闘で4機は落とせたがこつちもダメージレベルがCに入り込んでいた。

「ちつ！手こずらせやがって」

残りのグラナーダ達がこつちに銃口を向けリーダー格だと思われる女が苛立ちながら言つた。

「だがてめえはこれで終わりだ」

「それはあなたたちね」

「!」

女の真横に銀色の I.S がいつの間にかそこにいた。そしてサーシャは相手が動く前に右手に持つていた対 I.S 用ブレードでリーダー格の女の胴体をシールドバリアーごと引き裂いて両断した。

「リーダー!? くそっ！ リーダーをよくも！」

リーダーがやられたことに激昂し、数人がサーシャにアサルトカノンを撃つたが、サーシャは全弾を舞うように回避し一気に詰めより、左手に持つた大剣で女の両腕を両断した。

「ああああおあ!!」

「次」

サーシャは高速切替で両手にマシンガンを装備しながら蹂躪を再開した。

第15話（修正）

一夏 SIDE

エフイさんが行つてしまつた後、俺とシャルは避難場所である駅に向かつて いた。

「はあつ、はあつ、一夏、エフイさんは、大丈夫、かな？」

長らく走つていたせいで息を切らせながらシャルは俺に不安そうに尋ねた。

「エフイさんなら大丈夫だろ。多分サー・シャさんに連絡してるだろうし。あの人は無茶はしない人だから心配要らないさ」

シャルを安心させるように言つた直後だつた。

——警告。敵性 I S 接近中。数は 3。

「!」

待機形態の禍津火からの警告を聞き、思わず体を強ばらせてしまつた。幸い禍津火の警告は俺にしか聞こえないと（体内のナノマシンを通して聞こえるらしい。俺にはよくわからないが）周りの人たちには聞こえなかつたがシャルは俺の顔がいきなり強ばつたのに気づいて「どうしたの、一夏？」と不安そうに聞いてきた。

(くそ、シャルを不安がらせて何をやつてるんだ俺は!)

俺はまだポーカーフェイスが出来ない。そういう点を含めサーシャさんはまだ4分の1人前と言つてきていたのだろうと俺は痛感し、大人しくシャルに今の状況を報告することにした。

「シャル、落ち着いて聞いてほしい。今テロリストのISが2機こつちに向かつてきている」

「つ！だつたら僕と一夏で食い止めるしか」

「……いいのか？今から行われるのはいつもの訓練じゃない本物の殺し合いなんだぞ？」

「うん、大丈夫だよ一夏。私一人だつたら怖くて恐ろしくて戦えなかつたかもしけない。でも一夏がいるから。エフィさんが戦つてゐるから。だから僕は戦える！」
「分かつた。無茶はするなよ」

「一夏こそ！」

俺とシャルは笑い合つた後、反転し人目に入らないような場所に行つた

「ここなら大丈夫かな。来い！禍津火!!」

「僕と一緒に戦つて！天照!!」

2人は一瞬白い光に包まれ、光が消えると一夏はまるで”中世の騎士”的な黒いISを纏い、シャルは全体的に灰色のカラーリングのISを身に纏つた。その時シャルの耳に機械音声が聞こえた。

——搭乗者の生体登録を完了

——搭乗者の生体情報認識。

（え、何なのこれ？）
——警告。搭乗者の肉体強度が基準値を下回っています

シャルが少し不安になつてゐるのを余所に音声は続いていく。

——肉体強度を補填するためナンマシンを注入。

（え！？ナノマシンを注入とか言つた！？このIS…………痛！）

天照がいきなり物騒なことを言い始めたので一度一夏に相談しようとしたときチクリと首に痛みが走つた。

「ナノマシン注入されたの、私！」

「シャル落ち着け！サーシャさんが言うには健康を害さないらしいからそれ」

「え、それ本当なの？」

「ああ、現に俺も一回注入されたけどいたつて健康だし。肉体を強化されたこと以外」

「あ、やっぱりそういうものなんだ」

と話をしていたらまた機械音声が聞こえてきた

——搭乗者の肉体強度が基準値を上回りました。

——続いて搭乗者との最適化を終了しました。

——1次移行開始します。

その声がしたのと同時にシャルが再び白い光に包まれ、光が消えた時シャルのISに変化があった。1つはカラーリングがオレンジになつたこと。もう1つは大きな翼のような物が新しく追加されたことだつた。恐らくはブースターなのだろう。

「一夏、行こう！」

「おう！」

その言葉と同時にブースターに火を灯し、新人達は初めての戦場の空に飛び上がった。

テロリストのISはすぐそばまで接近していた。

「シャル！俺が先行するから援護は任せた」

「うん、任せてよ！」

俺は大型プラズマブレードを展開し、シャルはビームマシンガンを2丁展開して突出していた1機に攻撃を始めた。相手が慌てて回避している隙を見計らつてシャルはスラスターを全力で吹かせて接近した。

「うそ！？こいつはやつ！？」

「落ちろおおおおお！」

相手がこつちにアサルトライフルを向けた瞬間に俺はアサルトライフルを両断し、脚部のビームブレイドを展開し、相手を切りつけた。

「きやあああ！？こいつ何て性能なの！？」

「君の相手は私だよ！」

相棒が傷つけられたことに激昂したテロリストの相方が俺にアサルトカノンを向けるがすぐさまシャルがビームマシンガンを掃射した。相手は一時攻撃を中断し回避行動を取つた。

「逃がすか！」

俺は2機目のISに向かつてビームブーメランを投げた。だが、相手も場数を踏んでいるのかこつちのビームブーメランをぎりぎりで回避しアサルトカノンでビームブーメランを破壊した。シャルは加速しながら1機目のグラナーダにビームマシンガンを撃つたがほとんど回避され、逆にアサルトカノンで反撃を受けた。

「くつ！強い……。でも！」

シャルは高速切替^{ラピッド・スイッチ}でホーミングミサイルランチャーに変更し、接近しながら全弾発射

した。

「ちつ！面倒な」

2機目のグラナーダは

ミサイルを回避しながらアサルトライフルでミサイルを撃ち落とそうとするが、そこに大きな隙が生まれた。

「これで！落ちろ！」

俺は瞬時^{イグニッシュン・ブースト}で2機目のグラナーダに接近しようとしました。それに気づいた1機目のグラナーダが妨害しようと俺にアサルトライフルで攻撃してくるが、プライマルアーマーで全弾防ぎつつ全速力で近づいた。

「ミリア、避けてえ!!!」

「もうおせえ!!」

相手が振り返ったと同時にプラズマブレードの出力を最大まで引き上げて腕に取り付けられているサブブースターで瞬時^{イグニッシュン・ブースト}で加速しすれ違いざまにアサルトライフルを持つている腕を断ち切った。

「ああああああああ！！私の、私の腕があああああ！！」

「馬鹿！ミリア足を止めないで！！」

「え？」

切られた衝撃で足を止めた瞬間、ミリアに落とし損ねた残りのホーミングミサイルが襲い掛かった。凄まじい爆発音と爆炎が生じ、煙の中から黒焦げになつたグラナーダが町に墜落して行つた。

「ミリア!? くそ、ミリアをよくも!!」

タリサが両腕にアサルトカノンを装備し俺に向かつて乱射し始めた。
だが、ミリアはこの時怒りに我を忘れてあることを失念していた。敵はもう1機いたことに。

「背中がら空きだよ!」

「なあ!?」

この決定的な隙を見逃さず、シャルはタリサのすぐ背後まで接近し、ラビットド・スイッチ高速切替で切り替えた六連装大型パイルバンカーを相手に叩きこんだ。

「ちく……しよう」

相手のシールドエネルギーを削りつくし、体をパイルバンカーで貫かれてタリサもまた墜落して行つた。

「終わつた……のか?」

「一夏、これで終わつたんだよね?」

「ああ、そう……だな」

初めての実戦で凄まじい疲労感に襲われながらもこれ以上の殺戮を止めることが出来たと2人は素直にそのことを喜んでいた。

S I D E O U T

「はあ、はあくそー！どうして私がこんな目に…………」

港につながる暗い路地裏を片腕を無くした女が足を引きずるように歩いていた。この女は先のサーシャの殺戮を運よく腕一本失うことでの逃れられていた。

「話が違うぞ…………I S 学園と代表生と代表候補以外にあんな化け物がいるなんて…………」

「うん、それは僕にとつても計算外だつたんだよ」

「!?」

いきなり声がしたので振り返るとそこには今回のテロの協力者が薄い笑みを浮かべながら立っていた。

「おい、旦那！・話が違うじゃないか!? あんたたちがそういう奴を引き受ける約束だろ

！」

「だからそこが僕の計算外だつたんだよ。まさか傭兵達がこの国に居たなんてね。それに I.S 学園と代表達が予想以上に手強くてね。そつちに回せる戦力の余裕がなかつたんだよ」

「くそ、ふざけるなあ!!!」

女が残つた片手で青年に向かつて拳銃を向ける。

「そのせいで私の仲間がみんな死んだんだ!!お前らの不手際のせいでな!!」

「おいおい。お前らが死んだ理由をこつちに押し付けないでくれるかな。」

やれやれと青年が首を振つた。そんな青年の様子に女はさらに激怒した。だが青年はまるで氣にしていない風に話をつづけた。

「でもま。君たちのおかげで助かつたよ。おかげで現状のこの国の戦力をこつちの被害を最低限にして知ることができたよ。感謝してると哀れな道化師さん」

「何だ……貴様、何をいつて r」

「つまりあなたは用済みつてことよ。おばさん

後ろからいきなり少女の声がし、慌てて後ろに銃を向けようとした時にはもう女の首は胴体と離れていた。女は訳も分からぬまま命を落とした。

「千秋」お兄様。申し訳ありません」

「いいんだよ」冬香。僕はこうして無事なんだから」「はい。ところでどうでしたか?」

「うん。予想外な点はあつたけど、大体の戦力は把握した。それに懐かしいものも見れたしね」

「ああ、あの“人形”ですか。千秋兄さまは物好きですね」

「あれはなかなか珍しいケースだからね。つと、時間が迫つてきている。行こうか冬香」

「はい、千秋兄さま」

青年と少女はそのまま闇の中に姿を消していった。

第16話

（翌日）

『先日の”黒騎士事件”から一夜明けました。今回のテロ事件を起こしたテロ集団は中東で活動している”砂漠の獅子”だと分かりましたが、未確認IS2機については未だ分かっておりません。IS開発に詳しい佐山さん、今回出現したISについてどうお考えですか？』

『はい。まずは今回のテロで使用されたISについて説明していきましょう。今回のテロで使用されたISはテオラインドストリーで開発されたばかりの新型量産機「グラナーダ」です。グラナーダの特徴はなんといってもその出力の高さからの防御力の高さです。その防御を”黒騎士”はいとも簡単に貫いている。それはグラナーダをはるかに上回る出力の高さが分かります。さらにこのIS達は戦闘終了した際に光化学迷彩と思われるもので姿を消しているんですね。さらにISのハイパーセンサーにも探知されずにこの場所から姿を消しているんです。この2機はもしかすると現在ロールアウトしているどの第三世代のISよりも高いスペックを持つていてるかもしれません！』

『解説ありがとうございました。この謎のIS達の情報が入り次第お伝えしていきま

す。次のニュースです…………』

「やつぱり消えたところ見られてたか…………」

テレビを消しながら苦い顔をしながら私は呟いた。

「前日」

エフィの周囲にいた疑似 I S に乗つていたテロリストを半分撃墜した時、私はエフィから一夏達が戦闘に入つたことを聞きエフィに遠距離支援に向かうよう指示した。私は残りのテロリストの掃除と今回のテロの目的などを吐かせる為にその場に残つた。あらかたテロリスト共の掃除を終え、尋問も終了したときにエフィから通信が届いた。

「サーシャさん、一夏君達は無事グワナーダ2機を撃墜しました！」

「了解。こつちもあらかた終わつた」

「分かりました。一夏君達相当疲れているみたいですから先に撤退していますね」「そうして。私は1人取り逃がした奴がいるからそいつを処分してから撤退するわ」「お気を付けて」

そこで通信を切つた。私は中断していたテロリストの捜索を再開した。

（大通りと路地裏はあらかた探したが見つからない。だとするとこいつらが乗つてきた輸送船の方に向かつたか……）

面倒だなと思いつつも見逃すつもりは毛頭ないので港の方に向かつた。

「死んでる？どうして？」

港に向かう路地裏に探していたテロリストは見つかつたが首がなかつた。遺体の状況を見てみると首が鋭利なもので胴体から切り飛ばされていた。斬つた本人はこいつにかなりの恨みがあつたのか趣味なのかどうかは知らないが随分と無駄なことをしているなど私は思った。こいつを迅速に殺したいんだつたら腹や首にでも刺せば勝手に失血で死んでいただろう。なのにこいつはわざわざ首を斬り飛ばした。とても無駄で労力だけがかかることを。

ふと私はこいつの頭がどこにあるか気になつて周囲を見回してみたら端つこの方に肉塊が転がつているのに気づいた。見なかつたことにしたかつたがそういう訳にもいかず、とりあえずその肉塊を調べることにした。

調べてわかつたことだがこの頭だつたものはやはり鋭利なもので切り刻まれたものらしい。改めて首なし胴体から何か手掛けりになる物はないかと探してみたが不自然なくらい何も見つからなかつた。携帯端末もデータチップもドツグタグも。タバコとかレーシヨンなどはあるのにこいつの存在を証明できるものや組織に関すること、武器などは一切見つからなかつた。まるで証拠隠滅を図つたかのように。私はもしやと思い、急いで輸送船の方に向かつた。

案の定港には”砂漠の獅子”が乗つてきたという輸送船はどこにも見当たらなかつた。武御雷のセンサーでIS学園や軍事基地の方を探つてみたがもう戦闘は終了していたらしく情報はなにも見つからなかつた。私は仕方なくステルス機能を使ってその場から離れ集合場所に飛んだ。一夏達のことをどう褒めようかと考えながら

「現在。ホテルの一室にて」

「で? 何か言い訳があるなら聞くけど?」

「す、すみません。油断してました」

サーシャは威圧感を出しながら2人に質問した。2人はびくびくしながら土下座の体勢を取つていた。

「初めてのISでの実戦の割には上手く立ち回れたようだし、町や一般市民に被害を出さないよう戦えたようだしその辺りのことは評価するし、そこだけ見たら何だ半人前くらいにはなれただじゃないかと思つたんだけどね」

「そ、それでも半人前なんですね……」

「最後の消える所を見られるのはまずかつたわねえ、おい。ハイパーセンサーにも探しれないステルスシステムの搭載に成功したISが存在するという事実は相当まことによね」

「うう…………」

「今回はまあ仕方ない。次からは気をつければいいんだから。それよりもエフイ！」

「はひ!? な、なんでしゅか?」

まさか自分に来るとは思つていなかつたのだろう。エフイは変な声を上げながらすぐ椅子から立ち上がった。

そんなエフイを私は（自分なりに）怒つた表情で言つた。

「まさか自分には来ないとthoughtた？ 今回の反省会の主役はあなたよ、オメデトウ」「え！ まさか私だけ自分のIS中破していくことですか？」

「それもあるけど違う」

「じ、じやあ何が悪かつたんですか？」

「あなた、随分と回避がへたくそになつたわよねえ。スナイパー専門でもあれだけ鍛えとけと言つたのに」

「うう、すみません……」

「いくら陽炎が先日の戦闘で全スペックの”半分”しか出せないとはいあそこまでやられるのは単純にあなたの訓練不足よ」

「返す言葉もありません……」

先日の依頼で要塞を破壊する時にエフィは時間がないからといつて規格外兵装オーバード・ウエポンを使ふしたのだ。あれは威力が桁違いに高い代わりに機体に相当な負担がかかり、出力がしばらくの間落ちてしまうのだ。そもそも陽炎は規格外兵装オーバード・ウエポンを使用することは想定しておらず、一応一回程度なら使用可能というデータがあつたのだがまさかここまで機体に悪影響が出るとは思つてもいなかつた。故障した場所はよりにもよつてコジマエンジンやシールドバリアー、各部スラスターと専門的な場所だつた。スラスターなら時間を持ければ直せるのだがそれ以外はそうもいかない。一応陽炎にも修復機能が搭載されているのだがそのシステムもうんともすんとも言わないでの途方にくれている矢

先に今回のこれだ。正直言つてしまふと非常にまずい。どうにかして修復機能だけでも復旧しなければ戦力が大幅に下がってしまう。

と、エフィを説教しているときに私の携帯から設定したことがない着メロが鳴り出した。怪訝に思った私は携帯を開いて差出人を見たときにあまりにふざけた名前に首をかしげた。

「誰? これ?」

差出人の名前には「時計を持ったウサギさん♪」と書かれていたのだ。みんな気になつてそのメールを見たのだが”一部”を除いて首をかしげた。深い溜め息をついた一夏は

「なにやつてんだよ……東さん」

とポツリと呟いた。その呟きを聞いたシャルロットとエフィは「ええ! ?」と叫んだ。私は即座に耳を塞いだので事なきを得たが一夏はもろに食らつたらしく「ぐああ耳があ」と呻いていた。いとあわれ。

「なんでサーチャさん東博士からメール来てるんですか! ?」

「知り合いだつたんですか!?」

「束博士とは知り合いじゃないしメール友でもない。私もいきなりメール来たから驚いてる」

そういえばまだ本文読んでいなかつたなと思い本文を読んでみた。そこにはお茶会のお知らせとお茶会をする座標が記されていた。どうやら招かれているのは私達全員だけらしい。だがこれはチャンスだと私は思った。もしかしたら陽炎を修理できるのかもしれないし、私達のISの整備や補給も行えるかもしれない。このお茶会の誘いを受けない理由はなかつた。開催日と場所は3日後の沖縄。

第17話

（3日後、沖縄）

私達は篠ノ之東のお茶会に指定された沖縄にいた。とは言つても指定された場所は都市部の方ではなくおもいつきり海の上を差しているのだが。

「これって海の上でお茶会するのかな、一夏？」

「いや…………昔から奇想天外なことばかりする人だからなあ東さんは。文字通りのお茶会になることすら怪しくらいだし……」

という一夏の意見だが、座標は海上を指している。グーグルマップで近辺を調べてみたところ、周囲には島らしきものはなかった。さらに言つてしまえば、その海域の近辺は潮の流れの影響で船は近づけないらしい。そのためか地元の人間はその海域には近づかない。

（まるで人目につきたくないかのようね。まあ本人は国際指名手配を受けているのなら当然か）

なら、指名された地点に行くにはＩＳでなければ行くことができない。ということなのだろう。幸い先日破損したエフィの陽炎はステルシステムまでは壊れていなかつたので問題はなかつた。私は携帯を閉じながらさつき近くの売店で買ったサーティーアンダギーを取り、口に入れた。なんだかドーナツに似ている味だつた。

「つてまた食つてるんですか！」

と近くにいた一夏が私がサーティーアンダギーをぱくついているのを見つけると

「まだ昼食食べ終わつてから数分しか経つていないじゃないですか！しかもサーティーアンダギー3袋目とか食べすぎです！」

「私の頭が甘いものを欲したのでつい」「ついいじやありません！これは没収です」

と一夏は私が手をつけていたサーティーアンダギーの袋を取り上げた。なんて殺生な

「返して、私の糖分」

「だめです、いくらなんでも糖分の取りすぎです！午前中から甘いものを食べすぎですよ！」

「かくえくしきてく」

「そんな幼児退行したような声で言つても返しませんよ」

「ちつ」

「何か今舌打ちが聞こえてきたんですけど……」

「一夏とのサーティーアンダギーをかけた駆け引きを繰り広げていたら

「サーティーさん、一夏君くだらないことをしていいないですも行きますよ！」

「…………くだらなくなんてないし」

「分かりました。とりあえずエフイさんにこれをあげます」

と一夏はあろうことか私が買ったサーティーアンダギーをエフイにあげやがった。

「わあ、いいんですか！」

「いいんですよ」

「私のサーティーアンダギー……」

勿論取り返そとは思つたけれど、エフイは凄く嬉しそうだし、時間も押し迫つていることだし泣く泣くサーダンダギーは諦めることにした。

「……………じゃあ行きましょうか」

「なんかすごい『テンション低いですね、サーシャさん』

「海上」

現在私達4人はステルスシステムを起動させたISで指定された座標に飛んでいた
「うう、陽炎のスラスターから変な音が出てますう。これいつスラスターが停止してもおかしくないですよ」

エフイの陽炎は3日経つても修復システムが完全に復旧してはいなかつた。一応装甲とかは修復されているのだがスラスターなどの部分は一切直つていなかつた。なので現在も陽炎のスラスターからゴトゴトと変な音が出ており、さらになにやら黒い煙も出ていた。

(これは本格的に不味いかも…………というか今にも爆発しそうな雰囲気醸し出してる
し)

これ以上陽炎のスラスターに負担をかけて爆発させる訳にはいかないと思つたので、
私はエフイを陽炎を展開したままの状態でおぶることにした。

「うう。恥ずかしいですね、これは」

「文句言わない」

エフイをおぶつてから数分経つたところで篠ノ乃束に指定された座標に到着した。

「やつぱり何もありませんね……」

「……いや、海中の中に何かいる」

私はアクティブラーダーを使用して、海中にいる何かを探つていた。
——レーダーに反応。水深二百メートル付近に大型ISの反応あり。

——警告。未確認大型IS浮上を開始しました。

「みんな、高度を上げて。水中から大型ISが近づいてる」

私の声と同時に一夏とシャルロットは一気に高度百メートルまで上昇した。私もエフイを落とさないように気を付けながら高度を上げたとき、ズドンと大きな音をあげ、巨大な潜水艦が勢いよく海中から飛び出してきた。

「せ、潜水艦!？」

「も、もしかしてこれもISなの!?」

一夏とシャルロットは潜水艦がISということに驚いていた。潜水艦がISだったことに特に驚きはしなかった。ただ、この時代に潜水艦型ISが実用化されていることに驚いていた。

私達がその潜水艦の登場に色々な意味で驚いていたとき、潜水艦のハッチが開き、中からうさみみを着け、アリスの服を着た女性が先程の海中から飛び出た潜水艦のように勢いよく飛び出した。一夏が疲れたような懐かしんでいるような複雑の表情で

「お久しぶりです、東さん」

と言つた。対して東本人は潜水艦の甲板に着地すると

「久しぶりだね！ いくん！ そしてよく来たね！ 私が世界が誇る天才東さんだよ！ ぶ
い！」

この瞬間私が抱いていた篠ノ乃東博士に抱いていた憧れとか尊敬が碎け散り、やつぱ
り天才研究者は何処か頭がおかしいのかと諦めに近い思いを抱いた。

第18話（修正）

～潜水艦『シユレテインガーのウサギ号』艦内～

未来から来た私とエフィイが篠ノ乃東博士に抱いていた尊敬の念が壊れ、少し呆然としていた時に篠ノ乃東博士は「さあ、早く船の中に入つてきなよー！」と言い、先程出てきたハツチに戻つて行つた。私達も潜水艦の甲板に着陸し、ISを解除してこの潜水艦の入り口であろうハツチに入つた。

潜水艦の中は作つた本人があのような性格なのできつとまともじやないのだろうと思つていたが、実際は至極まともだつた。

「セイソウチュウ、セイソウチュウ」

機械の音声が後ろから聞こえてきたので振り返つてみたら、ドラム缶のようなフオルムにうさ耳を付けた珍妙な機械が（恐らく）清掃していた。
……訂正。やっぱり艦内もまともじやなかつた。

私は通り過ぎて行つたうさ耳ドラム缶を疲れた目で見送つた。そのとき、すぐ横の扉

が開き中から出てきた篠ノ乃束博士が仰々しく手を広げ、満面の笑みで言つた。

「ようこそ！私の新しい拠点『シユレティンガーのウサギ号』へ！」

……ネーミングセンスもまともじやなかつた。私は頼りなさげに笑う命の恩人かつマツドサイエンティストが脳裏に浮かんだ。

（あのキチガイ集団の中でもまともそうに見えたあの人でも研究・開発になると気が狂つたようなことを考案してたなあ。それでいて使用者の安全第一でお人好しで……）

私は束博士の破天荒すぎる紹介でふと未来で所属していた部隊に思いをはせていた時に隣にいた一夏が苦笑しながら変わらないですね、束さんは」と話しかけていた。

「うん！私はいつだって変わらないよ！変える気もないしね。それにしてもいつくんは結構変わつたよね。前よりもたくましくなつたし、明るくなつた。やつぱりあいつから離れたからかな？」

「まあ、結果的にそなんでしょうね。俺も百春と千冬姉から離れていろいろと分かつたことがあるし」

「うんうん。それについてもサーにやんがいつくんを引き取るとは思わなかつたよ」「…………サーにやんは止めてください束博士」

久しぶりに聞いた不愉快なあだ名に私は少し顔をしかめながら、駄目もとで止めるようになんてみた。

「ううんかわいいと思うんだけどなあ。ねえねえそう思わない? エーフィー、シャルルン?」

「私もそう思うんですけどサーシャさんそのあだ名結構嫌つているので」

「エーフィーってポケモ○にいましたよね…………」

シャルロットは束博士の意見に同意していた。その横でエフィーは自分のあだ名がポケモ○の名前と一緒にすることに複雑そうな顔をしていた。

「うーん、本人が嫌がつちやうなら仕方ないね。じゃあさーちゃんでどうかな?」「さーちゃんなら一向にかまいません」

それならよかつた、と束博士がくるりと反転し、先程出てきた部屋に戻つていき部屋の中にはお菓子やティーポッドが置かれていた。私達も部屋の中に入り各自席に座つた。

「じゃあ、お茶会を始めよう!」

束博士がにこやかにそう宣言した。私はクッキーとチョコをほうばりながら、ここに来るために抱いていた疑問を束博士にぶつけてみることにした。

「ところで東博士。今回のお茶会に私達を招いた理由を聞いてもいいですか？」

「うん、いいよ。私が君たちをここに招いたのはね、ある仕事を依頼したいからだよ」とそこで一瞬東博士が私を見たような気がしたが、すぐに視線を外したので私の気のせいだったようだ。

「報酬はもちろんはずむし、支援だつてするよ。弾薬代も負担する。これでどうかな？」

私はこの依頼は何かあるのではないかと真っ先に思つた。なぜなら、あまりにもおいしい話だからだ。だけどこの依頼を断るという選択肢はもとより私の中にはなかつた。東博士なら陽炎を直せると思うし、今回の件で東博士とつながりができるといった利点があまりにも大きい。それに東博士なら私の失われた記憶を取り戻せるのではと思つたのだ。私は隣にいたエフイに秘匿通信でこの依頼についてどう思うか聞いてみることにした。

『エフイ、この依頼どう思う？』

『かなり怪しいですけど受けない訳にはいかないでしょう。東博士とのつながりができるのなら無茶でもやつたほうがいいと私は思います』

『ふむ、そのとおりね』

私はエフイとの秘匿通信を切り、東博士に向き合つた

「分かりました。この依頼お受けしましょう」

「さーちゃんなら受けてくれると思ったよ!」

「なら3つお願ひがあります」

「うん、何かな?」

「1つはエフィイが破損させたI-Sを修理してくれること。2つ目はこれからも可能な
らば私達の支援をしてくれること、最後は私の記憶についてのことです」

「ん? 最初の2つは分かるけど最後のはなにかな?」

束博士は不思議そうな顔をしながら私に問いかけた。

「私の記憶はある時期を境に消えてしまっています。私はその記憶がどういった記憶
なのかを知りたい」

私は真剣な眼差しで言つた。束博士はふむ、と考え込み考えが纏まつたのか顔を上げ
た。

「うん、いいよ! 全部引き受けてあげる! ただし君が私の依頼を成功させたらだけど
ね」

「! ありがとうございます。」

束博士は近くにあつた棚からタブレットを取り出して私に見せてきた。

「これは……研究所の見取り図ですか?」

だ

「…………この研究所で行われているのは人体実験ですか？」

そのとき東博士は本当にびっくりしたような表情を浮かべた。だが直ぐにその表情を満面の笑みで覆つた。

「本当にすごいね！さーちゃんは！その通りここで行われているのは人体実験だよ。ここをすぐにでも襲撃してつぶしてほしいんだ」

「なるほど、それでその研究所がある場所は何処にあるんですか？」

「研究所がある場所はね…………」

そこで東博士はもつたいぶるようになめた後に目的の場所を言つた。

「第二回モンド・グロッソがあつたドイツの軍事基地近くだよ！」

第19話

（ドイツ上空）

私は現在ドイツの空をステルス化しているI-Sで飛んでいた。何故私がドイツの空を飛んでいるのかというと東博士の依頼で研究所を襲撃するためだ。そして今回は私は1人だけで依頼をこなさなければならぬ。理由は単純で東博士に陽炎を修理してもらうにはこの依頼を成功させなければならぬからだ。東博士はすぐに研究所を潰してほしいとも言っていたのでエフィにドイツまで飛行機で来てもらうことは出来ないし、沖縄からドイツまで距離が長すぎるためエフィを抱えて飛ぶというのも出来ない。それなら、シャルロットと一夏を連れていけばいいじやんという話になつてくるがあの二人はまだ4分の1人前なので来ても足手まといになるだけだし、あの研究所で行われていることをあの二人に見せたくないというのもあつた。

なので、私だけでこなさなければならないということだ。それと今回はとても頼りになるオペレーターもついていた。

『さーちゃん、そろそろ目標の研究所だよ！そろそろスラスターの出力を下げて降下

してね！」

「了解。ハイパーセンサーも索敵モードに変更する」

そう、今回は東博士がオペレーターをしてくれるのだ。この時代に来てからはオペレーターなしで戦ってきたのでとてもたのもしかつた。

私はハイパーセンサーで隠れていた研究所の扉を発見し、レーダーや赤外線センサーに探知されないように降下し、扉の前まで来た。

「いい？ 今から30分間はジャミングで応援を呼べないようになりますけど、それ以上は妨害出来ないからそれまでに研究者どもを皆殺しにして、データも回収してね」

「了解」

「それじゃ、ハッキング開始～！」

何処か締まらない声と共に東博士はハッキングを開始したようだ。数秒たつてから、ハッキングが成功したのか重厚な扉が開き始めた。私は両手にアサルトライフルを開いた。

「さて、くそったれな研究者のみなさん、索敵な殺戮劇をしましょバーティう」

私は歌うようにそう言うと近くにいた間抜け面を晒していた研究者達にアサルトライフルを掃射した。研究者達は悲鳴をあげながら血飛沫を撒き散らし、肉塊となつて

いつた。

「さて、次」

と次のエリアに向かおうとしていたとき、警報が鳴り響いた。まあ、ここまで派手にやつて警報がならなかつたらただの能無しなのだが

その時、壁や天井等からガトリングガンやグレネードランチャー、火炎放射機などが飛び出た。私は撃たれるのをただ待つてゐるつもりもないので出てきた兵器を片つ端からアサルトライフルでなぎはらつた。勿論こつちに向かつて撃つてきた兵器や応援に駆けつけた警備兵の攻撃を回避しながら新しく湧いてきたものにも撃つていつた。そろそろ残弾も怪しくなつてきたので、^{ラピッド・スイッチ}高速切替でカートリッジを交換し、両腰部のエネルギー砲『ヴエスパー』を使い扉に隠れてる兵士や兵器ごと破壊した。

数十秒間銃撃戦をし、このエリア一体の兵士達を全滅させた。

『とりあえずこのエリアはもういいから下のエリアに向かつてね』

とのことなので、地下に向かうエレベーターの扉をコジマブレードで切り裂き、とりあえずエレベーターのワイヤーを切り裂いた。すると下から悲鳴と共にズドンと大きな音がした。

『随分と派手にやるね〜』

『やるなら徹底的にというのが私のポリシーですから』

私は東博士に言うと、下のエリアに降りていった。

??? S I D E

「くそ、くそー・どうなつてはいる！」

私は地上一階の通信が途絶し、いきなり警報が鳴り響いてそれが鳴りやまないことに動搖していた。当たり前だ。誰もこの研究所が襲撃されるとは思つてもいなかつた。周りの同僚達も酷く動搖していた。

「くそー・俺は逃げるぞー……で殺されてたまるか！」

と若い男研究者が酷く取り乱した様子でエレベーターのスイッチを押したとき、いきなりエレベーターの扉から悲鳴がし、ズドン！と大きな音と衝撃がした。

「ま、まさか……」

男は恐る恐る開いていくエレベーターの扉を見つめていた。ひしやげたエレベーターのなかにはミンチになつた死体が六つ転がつていた。

「もういやあー！！」

女性研究者が両耳をふさいで狂乱したように叫んでいた。これは不味い、と思つた。敵の数は不明だが、

敵は我々を皆殺しにする気だ。ここには大切な研究資料がある。これをむざむざ敵に奪われる訳にはいかなかつた。私は急いでここでの研究の成果である人形を起動させた。まだ調整が終わつておらず、どうなるかは分からぬが今使わなかつたら全てが水の泡だ。

「ヴァルキユリヤ！ 侵入者を皆殺しにしろ！！」

「…………了解。」

銀髪の少女はISを纏い、主の命令を遂行すべく動き出した。

第20話

下のフロアに行くに連れて、抵抗が強くなるのは当たり前だとは思つてたけど、まさか I Sまで持つてくるとは思わなかつたなと私は思つた。擬似 I Sコアとはいえ、狭い廊下でミサイルやガトリングをやたらめつたら撃つてきたときは落盤するのではと思ひ肝が冷えたが、幸い亀裂が走つた程度で済んだ。

『さーちゃん、また I Sの反応が近づいてきてるよ！ 注意してね！』

「またですか……」

この研究所は随分と I Sを所有しているようだつた。私はさつき頭に入れたこの研究所の地図を思い出した。

(このエリアの隣は確か演習室だつたはず……ならそこで迎撃しますか)

なら敵が来る前に移動したほうがいいと思い、演習室に向かおうとしたとき、私のちょうど真下から高エネルギー反応が検出し、慌てて回避した。回避した直後に杭が先程まで立つていた場所を貫いた。

「ちつ！ いきなりか！」

私は演習所に向かいつつアクティブラーダーを起動し、周囲の I S反応を調べた。反

応は下のフロアに1、こつちに近づいてきている機体が3だつた。

(束博士が言つていたのは恐らく3機のほうだ。なら束博士はすぐ近くにいる機体に何故気づかなかつた?)

そこまで考えてふと気づいた。なんてことはない、あいつは高性能のステルスシステムで身を隠していただけだ。だが、その程度のもので束博士が気づかないものだろうか?

演習室にたどり着いた時、真上から気配がしたので私は上に向かつてアサルトカノンを発砲した。だが予想に反し相手はこつちの攻撃を回避し、サブマシンガンで掃射してきた。それを最低限の動きで回避し、襲撃者が私の目の前に降り立つた。

「人形?」

それが彼女への第一印象だつた。生氣のない瞳でまるで魂が抜け落ちたような表情。明らかにこちらを殺すつもりなのに殺気がまるでない。ただ彼女はなんだか昔の私ようだつた。もしかしたらこの子は私と同じなのではないかと思つた。

「あなたは一体何なの?名前は?」

「…………私の名前はヴァルキュリア。主の命によりあなたを抹殺します。」

相当深刻だった。やはり説得ではどうにもならないらしい。

「それでは作戦を開始します」

ヴァルキュリアは無表情のまま言い放ちサブマシンガンを構えた。私もアサルトカノンを構え直し、すぐさま発砲し、ヴァルキュリアもサブマシンガンを掃射した。

『東博士少しいですか？』

『よく銃撃戦しながら私と会話する余裕があるね……』

『慣れてますので。1つ頼みがあります』

『何だい、頼みつて？ 東さんにできることならある程度はするけど』

『あの少女を保護したらあの子の洗脳を解いてください』

『……本気？』

『本気です。東博士なら出来ると私は信じています』

『うーん、分かった！ 君の頼みを飲もう！ 私もあの子のことが気になるしね』

『ありがとうございます』

東博士から了承をもらつたところで通信を切り、目の前の戦闘に集中することにした。ヴァルキュリアはこの研究所で戦つてきた操縦者の中で一番強いだろう。狙いも

正確無比で全弾私の心臓か頭を撃つてくる。近づかれたら近接武器に切り替え対応していく。まるでプログラミングされたコンピューターだ。だけど、この少女の戦い方でこの子はこれが初めての実戦だということがわかつた。あまりにもきれいすぎるのだ、この子の戦い方は。何一つブラフもなくこつちのフェイントにも簡単に引っかかり、狙いも正確故に避けやすい。後続の3機がそろそろこちらに到着しそうなので決着をつけようと思つた。私はアサルトカノンから片手には突撃銃、もう片方にはIS用ブレードを持ち、瞬間加速^{イグニッション・ブースト}で一気にヴァルキュリアに接近し、こつちに向けてきたサブマシンガン2丁を右手のブレードで切り飛ばした。瞬間加速^{イグニッション・ブースト}の勢いのままヴァルキュリアに突っ込み、右手のブレードを手放して自由になつた右手でヴァルキュリアを掴みそのまま壁まで突っ込んだ。

「ぐう……」

ヴァルキュリアはうめき声を上げ私を振り払おうとした。振り払われないように強く握り、左手に持つていた突撃銃でヴァルキュリアの腹に乱射した。

ガガガガ、とISの装甲に火花を散らせながら一気にシールドエネルギーをISが解除されるぎりぎりまで削り、削りきる寸前で突撃銃を放りそのまま右手でヴァルキュリアの腹に一撃を与えた。

「かは…………！」

「おつと…………」

ヴァルキュリアから全身の力が抜け倒れこむ前に私が抱きかかえた。私はほつと一息ついた時に入り口付近が騒がしくなってきたことに気づいた。

「やれやれ、もう一戦頑張りますか」

両手に対IS用電磁ブレードを取り出し、敵の一団めがけて投げ飛ばした。1人は味方を盾にして助かったようだが残りの二人は胸や頭に突き刺さり絶命した。

「ひつ!?た、助けてください!!何でもしm」

「くたばれ」

私は先程手放したIS用ブレードを手に取り、スラスターを全力で吹かせそのまま相手の首を両断した。

「さて、残りのフロアは少ないしさつさと終わらせますか」

氣絶したヴァルキュリアを抱え先程破壊したエレベーターへと向かつた。

第21話

私はエレベーターの近くに動けないように縛り上げたヴァルキュリアを置いて、ひとまず階段まで行つた。武器をグレネードキヤノンに切り替えて階段を破壊した。理由は単純でこの研究所の人間が逃げられないようにするためと研究者がヴァルキュリアを回収を出来なくするためだ。無事階段を破壊し終えた私はそのまま破壊したエレベーターの昇降路を使って下のフロアに降りて行つた。

さつきの戦闘で戦力を使い切つたのか後は特に目立つた抵抗もされなかつた。だが、抵抗されなかつたといつてもこの研究所を潰すことが目的の為、研究所の職員は皆殺しにするので命乞いされても関係はなかつた。下のフロアに行くにつれて人道に反するような研究が目立ち始めていた。中にはコードでつながれた脳髄がよくわからない液体の中で浮かんでいた部屋を見たときは嫌悪感が隠せなかつたが、せめてもの情けとしてデータの抽出を終えた後グレネードキヤノンでその部屋を焼き払つた。それ以外にも酷い実験が行われていた部屋がいくつも見つかつた。私は例外もなく全て焼き払つた。そしてついに一番下のエリアに到着した。

そこにはひしやげたエレベーターがあつたため直ぐに一番下のエリアだと分かつた。

武器をコジマブレードに変えてエレベーターの天井を切り裂いてエレベーター内に入つた。中にはミンチになつた死体が転がつていたが特に気にもならなかつた。私はひしやげて開かなくなつていたエレベーターの扉を蹴り飛ばして開けた。そのエリアには残りの研究者が集まつておりどいつも絶望した表情をしていた。

「…………ヴァルキュリアはどうした」

その中でも一際絶望の色が濃かつた男が話しかけてきた。

「氣絶させて、放置してるが今から死ぬお前には関係ないでしよう？」

私はショットキヤノンに持ち替えながら冷たく言い放つた。男は「そんな馬鹿な

…………」と小さく零した。

「あれは私達の技術を結集させてやつとのことで作つたものだぞ…………いくらまだ未完成とはいえそんな簡単に負けるはずが…………」

私は男の言い分にいい加減うんざりしてきたのでショットキヤノンの引き金に力を入れた

「あの人形には魂がなかつた。ただそれだけだよ」

その瞬間、室内に重い銃声がし、どさりと体の真ん中に大穴を開けた男の体が地面に倒れた。

「いやあああああああ!!!!」

「嫌だ！俺はまだ死にたくない!!」

「助けてくれ！い、命だけは！何でもしますから」

（今まで散々命を弄ぶようなことをしてきたのにいざ自分の命が危うくなつたら生にしがみつくのか……どの時代でもそういうことは変わらないのね……）

「耳障りだからさつさと終わらせよう」と考え私はIS用ブレードを2本持ち片つ端から研究者たちを斬つた。悲鳴の嵐の中数秒間の間切り続け気が付いたら周りは静かになつていていた。念のため周囲の生命反応を調べてみたが反応は上のエレベーター付近のヴァルキュリアのものだけだつた。そして奥に向かい最後の端末にケーブルを差してデータの抽出を終えた後、東博士に頼んで研究所の自爆を15分に設定してもらつた。東博士が設定している間に急いでヴァルキュリアを回収してから研究所を後にした。やるせなさと後味の悪さを抱えながら私はヴァルキュリアを抱えてドイツの空に舞い上がつた。

第22話

数時間の飛行を経て私は東博士の潜水艦に戻ってきた。ヴァルキュリアを抱えていため慎重に潜水艦の甲板に着陸しそのままハッチの中に入った。ヴァルキュリアは結構前から目が覚めていたが何故かずっと大人しかつた。下手に暴れられるよりかはマシかと思い、放置していたが、改めてこの少女が何を考えているのかが分からなかつたので東博士に届ける前に意図を聞いておくことにした。

「何も命令されてなかつたのでじつとしていました」

とヴァルキュリアは抑揚のない声でそう告げた。

「あなたの主は私が殺したわ。だからもうあなたに命令する人は誰もいないのよ」「…………それは困ります」

ヴァルキュリアは困ったような表情で小さく呟いた。

「私は命令されなければ何も出来ないです……」

「なら考へなさい。それが生きるということなんだから。私も考へて考へて考へ抜いてようやく少しだけ分かつたから」

「…………わかりました、考へてみます。」

「…………随分素直ね。私はあなたの主を殺したのよ？」

「それはあなたと私が似ているような気がしたからでしようか」とヴァルキュリアは薄く笑顔を浮かべながら言つた。私はヴァルキュリアをおぶつて束博士がいる部屋に向かつた。

* * *

「おかえり、さーちゃん！いい仕事ぶりだつたよ！あ、その子がヴァルキュリアちゃんだつけ？うーん、でも名前がヴァルキュリアというのも変だしなあ。よし！束さんが新しい名前を考へてあげようではないか！」

帰つてきてそうちう束博士のハイテンションには割とうんざりしてしまつたが、ヴァルキュリアの新しい名前を考えるのには賛成だつた。流石にあの名前は痛すぎるし長かつたし、何より研究所とのつながりを絶ちきるという意味合いで賛成した。

「うーん、どんな名前がいいかなあ」

と色々な機材を引っ張り出しながらしばらく唸つて考へていたがいきなり「これだ

！」と叫んだ。

「うわあ！おどかさないでくださいよ東さん機材落としちゃうじゃないですか……」

「ごめんごめん。それよりもこの子の名前を思い付いたのだよ！」

機材を運ぶのを手伝っていた一夏に謝りながら東博士はヴァルキュリアの元に走りよつた

「君の新しい名前はね、クロエ・クロニクルにしたよ！私はくーちゃんと呼ばせてもらいうけどね！」

東博士のことだから珍妙な名前になると思っていたが普通に良い名前だつたことにその場にいた一同は驚きを隠せなかつた。

「クロエ…………いい名前だと思います」

「でしょーー！やつぱりくーちゃんはいいこだなあ～うりうり」

東博士はヴァルキュリア改めクロエを撫でまわしていた。クロエはくすぐつたそうに目をつぶつて東博士のなすがままになつていた。

「一応くーちゃんの為に洗脳解除をするための機械を用意したけどそれほど手間はからなそうだねえ」

と仮想ディスプレイを見ながら東博士は言つた。

「どういうことですか？クロエはかなり強力な洗脳にかけられていたのでは？」

と私が東博士に聞いてみたところ彼女は私が入手してきたデータを流し見しながら私の質問に答えた

「くーちゃんはさーちゃんと戦った時点ではまだ洗脳が完全じゃなくつてまだ不完全だつたんだよ。それがさーちゃんとの戦闘での衝撃とかさーちゃんとの会話で少しづつ洗脳が溶け始めているみたいなんだ」

とそこでシャルロットとエフィイが別の機械を持って部屋の中に入ってきた。

「エフィイ、それは？」

「何でも忘れてしまった記憶を蘇らせる機械だそうです。私にはよく分かりません

が」

「ありがとうございますエーフィー、シャルルン！その機械をその辺りに置いてね！ちょっと微調整しなきゃいけないからね」

と東博士は工具と色々なパーツを持つてきて今持つてきたばかりの機械に手を加え始めた。それから数分後東博士が額の汗を拭いながら言つた。

「よし、出来た！さーちゃん、これが君が失つた記憶を呼び戻す機械。名付けて『機械人形は夢を見るか？改』だよ！」

相も変わらず微妙なネーミングセンスだがその機械の見た目はかぶつたら頭がすつ

ぱり覆い隠されそなヘッドセットと2メートルくらいの箱にケーブルなどが垂れて
いるという感じだつた。

「これを被ればいいので？」

「うん！後はこのヘッドセットを被つたまま睡眠状態になつたら第三者視点でその記憶を閲覧できるようになつてるよ。実際私も使つたことがあるしね」

私はヘッドセットを被り、そのままベッドに寝ころんだ。

「それではお願ひします」

「それじゃあさーちゃん行くよお！」

東博士がコンソールで何かを叩いた音が聞こえた瞬間私の意識は遠くなつていつた。

「これをこうして…………よし！出来た」

東さんが箱型の機械から伸びたケーブルを部屋に取り付けられていたディスプレイに差し込んでいた。

「これでさーちゃんが見ている映像を私達も見ることができよ！」

「いいんでしようか？本人に内緒でこんなことをして…………」

シャルが申し訳なさそうな表情で東さんに言つた。

「こうでもしないとさーちゃんの過去知ること出来ないしね。さーちゃんつてこういうことは絶対に言わないで抱え込んでしまうタイプだろうしね」

「さーしやさんは私達にいらぬ心配をかけたくないみたいですね」

と話していたところで映像にノイズが走り始めた。俺たちはみんな黙りこんでディスプレイを見た。ノイズだらけだった画面もだんだんとピントが合っていき映し出された映像は真っ白な雪国だつた。

「どうよ……」

私は見知らぬ土地に一人立ち尽くしていた。一応周囲には住居があるので人は住んでいるらしいのだが。とそこで前方にあつた住居の扉が勢いよく開き2人の幼女がきやつきやとはしやぎながら飛び出してきた。

「こつちよ、アーニヤ！」

「待つてよおねえちゃん！」

と2人の姉妹が真っ白な雪の上で走り回っているのを見て私は何かを思い出しそうになつた。それが何なのかを思い出す前に先程の家から母親とおぼしき女性が出てき

た。

”サーシャ”、”アーニャ” 手袋忘れてるわよ！」

「今行くわお母さん！」

「あ、私も！」

(どういうことなの!?)

私はひどく混乱していた。先程”サーシャ”と呼ばれていた少女は金髪で目の色は緑だった。私の髪の色は銀髪で目の色は青だ。もちろんこれは染めてもないしカラーコンタクトでもない。本当にあの少女は私なのだろうか。また”白い”ノイズで目の前を覆われながら私はひたすら自問自答していた。現時点では決して分からぬことを知つておきながらも考えずにはいられなかつた。

第23話

それから幾つもの場面が流れた。昔の私が家族と一緒に誕生日パーティーを開いている場面。何処かに出掛けている場面。みんなで食事をしている場面。多分これが家族との日常なのだろう。そして場面が切り替わるときは決まって白いノイズが視界を覆っていくという形式だった。それと途中で気づいたのだがある程度は歩き回れるみたいだつた。昔の私がいるところを中心にして半径百メートルくらいが自由に歩ける距離で、その範囲を越えようとしたとき白いノイズに包まれて初期地点に戻される仕組みらしい。誕生日パーティーの場面の時カレンダーを調べようとしたが、カレンダーの日にちがぼやけていて読めなくなつていた。ケーキには『五歳の誕生日おめでとう』とロシア語で書かれていたため私はロシア生まれで当時五歳だつたということがわかつた。そしてまた次の場面に移るノイズが視界を覆つたのだが今回のノイズは白ではなく赤だつた。その事に不吉なものを感じながら場面が移つていつた。

次に映し出された場面はどうやらクリスマスのようだつた。しかし部屋の中は薄暗く、クリスマスだとわかつたのは部屋に飾っていたクリスマスツリーで判断した。と廊下の方が何か騒がしくなつており、なんだろうと思いつつ廊下を覗きこんだ。そこには血

まみれで倒れている男性と白いコートに身を包んだ兵士が四人立っていた。その内の1人の兵士が持っていた銃から煙が立ち上っていることから恐らくこの兵士が殺したのだろう。外に行つてみると昔の私とアーニャと（恐らく）母が同じ格好をした兵士にトラックに積み込まれているところだった。

そして今度は灰色のノイズに包まれ新しい場面へと移つていった。

そこは備え付けの椅子とテーブル以外何もない殺風景な白い部屋だった。その部屋に白衣を着た女性と首輪と手錠をした私が座つていた。女性はニコニコと笑顔を浮かべながら警戒して『私』に言つた。

「あなたが私達の言うことを従順に聞いて尚且つ結果を出せばあなたの家族には手を出さないであげる」

「…………本当？ 私が頑張ればお母さんとアーニャには手を出さない？」

「ええ、約束するわ」

嘘だなど私は思つた。こういう奴は平氣で人を欺くことを私は知つていた。だがこの幼い私はこの研究者の言葉を信じきつているようだつた。そしてまたノイズが走る。

今度の場面は訓練をしている場面だつた。見ている限りそれは彼女達にとつて地獄のように辛い訓練内容のようだつた。

さらに場面が切り替わった。どうやらここは手術室のようだ。手術室の中を観察して、出でている機材などから行われている手術は強化手術であることが分かつた。ここで初めて『私』が強化手術が行われたらしい。

「本当に録でもないわね……」

だが、まだ私が記憶を失つた理由が分からぬ。まだ先なのだろうかと思つていたら、久しぶりに白いノイズが私の視界を覆つた。

視界が晴れたらそこには『私』と茶髪の少女がいた。

「私はサーシャ。あなたは？」

「私はカノン。よろしくサーシャ」

と両者共に笑顔で握手をしていた。私は意外だなと思いながらその光景を見ていた。この場面はおそらくあの辛い訓練や手術が行われた後だろう。なのにまだ笑顔を見せられるなんて思わなかつた。しかも見せかけではない本心からの笑顔だ。どうやらあの二人は精神的に強かつたらしい。その後も『クリス』や『リエラ』が『私』とアーニヤとカノンと一緒に談笑していた。

（クリスとリエラはこの時点で出会つてたのね）

クリスとリエラは私が未来で所属していた部隊の同僚だ。同じ研究所から助け出されたというのは聞いていたが、こんなに早く出会つているとは思わなかつた。それから

の場面を見ていると『私』とカノンはどうやら親友といえる関係らしい。カノンとの自己紹介の後の場面ではほぼ必ずと言つていいほど彼女が近くにいたしとても仲が良さそうだった。

しばらく白と灰色のノイズが続いていた時だった。また次の場面へと移る時視界が”黒い”ノイズで覆われた。今までなかつた色に不吉なものを感じていたら段々と視界が晴れて行つた。

そこは先程から『私』が訓練していた演習室だつた。その演習室にナイフを持たされた『私』とカノンがいた。この時点での頭に”これ”を見てはいけないという警鐘が鳴つた。

「何でカノンちゃんと殺しあわなきやいけないんですか!?」

『私』が泣き叫びながら言つた。

『これは殺しに慣れるための訓練だ。どんな相手だろうと殺せるためのな』

「だからって！親友のカノンちゃんを殺せるわけないでしよう!?」

『君が殺さないのは勝手だがその場合は君の母親がどうなるかわかっているね？』

「?!この卑怯者!!」

『私』が外にいる研究者に抗議をしていた時、カノンはゆっくりとナイフを構えて大粒の涙を流しながら言つた。

「…………サーシャちゃん、ごめんね」

「カノンちゃん!? どうして…………」

「私にはね…………もうお母さんしかいないのお母さんを守るためだつたら私はなん
だつてやる」

カノンは必死に感情を殺しながら『私』にナイフで切りかかつってきた。

「やめ!? やめてよ!! カノンちゃん!!」

「いやだ!! もう家族を失うのは嫌だ!! だから死んでよ…………死んでよ!!!」

『私』が必死にナイフを避け続けていると

『サーシャちゃん、何をしてるの? 早く目の前の敵を殺さないと君の妹とお母さんが
どうなつても知らないよ?』

「!?

ずっと逃げ続けていた『私』に研究者達は脅しをかけてきた。『私』は一気に冷静さを
失った様子でカノンに切りかかった。カノンが『私』の攻撃を受け止めた時その勢いを
殺さずにスライディングをしてカノンの足を蹴つた。カノンは顔をしかめただけで倒
れずに右足を上げそのまま『私』の腹にかかと落としを放つた。『私』はそれを横つ飛び
に無理やり飛んでバランスを崩したのかそのまま転がつて行つた。カノンは立ち上がり
ろうとしていた『私』に走つた勢いを乗せて蹴り飛ばした。また『私』は転がつていき

壁にぶつかっていた。

「これで、終わり!!」

カノンはナイフを逆手に持ち『私』に振り下ろしたがぎりぎりで『私』がカノンの腹部にナイフを刺した。カノンのナイフは『私』の肩に深く刺さったが『私』はそれを気にせず何度も何度も執拗にカノンにナイフを突き立てた。数分が経ち『私』が我に返つたのかナイフを振り下ろすのを止めた。最初はきよどんと真つ赤に濡れた自分の右手を見つめていたが次第に現実を思い出したのか体が震えだしナイフを落とした。

「ち、ちが！ 私こんなつもりじゃ……」

『私』がカノンの体に触れた時、気づいたのだろう。

もうカノンは助からないということに

「あ、あ、あああああああああああああああああああああああああああああああ!!!!」

『私』が半狂乱したように泣き叫んでいた。その目からは光が消え失せていた。研究者達は愉快なショーケー見たかのように笑っていた。
とそこでいきなり意識が遠くなりはじめた。

た。未だ鳴りやまぬ少女の慟哭とそんな道化をあざ笑う嘲笑がいつまでも耳に残り続け

第24話

「……………何だよ、これ…………」

サーシャさんの記憶を垣間見た俺たちは言葉をなくしていた。まさかサーシャさんの過去がここまで酷いものだとは夢にも思わなかつたからだ。

「ううん、おかしいなあ」

と東さんが『機械人形は夢を見るか？改』のコンソールをいじくりながらポツリと呟いた。

「まだ続きがあるのに見ることができないなんてまるで———」
と考え込んでいたところでサーシャさんが目を覚ました。

* * *

酷い過去だつた。と目を覚ましてまず思つたことはそれだつた。あの記憶を見ている間はまるで他人の物語を読んでいるかのような感じだつたが目を覚ましてからは私の心に黒く淀んだ感情がこびりついていた。一応は私にも影響が出てるらしい。ただ、あの記憶が最後とは思えなかつた。まるでこの先を見るのはまだ早いと言わんばかり

に。

ふと部屋の空気が若干重いような感じがしたので見渡して見ると気まずそうに目をそらす一夏と少し涙ぐみながら顔を伏せるシャルロット、下手なポーカーフェイスをするエフィイ極めつけは慌ててディスプレイにつながっていたケーブルを片付けていた

東博士

私はそれらの状況証拠をつなぎ合わせてこの現状を考えた。そして察した。こいつら私の記憶見たな、と。

「全員処刑」

ギルティ

東以外全員顔色を青くして逃げだそうとしたが当然逃がすつもりはなかつた。ゴタゴタ色々と考察するのは後回しにして今はこの罪人達を制裁することにしよう。

その後逃げ回る罪人達を義眼のセンサーで一人一人補足して一発ずつ腹にボディーブローを叩き込んだ。「この東さんの目をもつてしてもとらえきれないなんて……」と足元の兎が小声で呻いていたが何だか反省していないようなので腰をおもいつきり踏みつけた。

「ぎゅむ!?」

「東さんが死んだ！」

「この人でなし！」

「もう一発腹に叩き込もうか？」

「「「すみません、勘弁してください」」」

全員が一糸乱れず土下座をしたのがなんともいえなかつたが流石に私も鬼ではないのでこの程度で済ませてあげるかと思った。

「もう殴らないから私の記憶を覗き見た理由を言いなさい」

「怒らない？」

「怒らないから」

「またサーシャさんがまた一人で抱え込んでしまうんじやないかと思つたので」

「私は単純に好奇心で」

「…………」

理由は様々なようだが一部を除いて私を心配してくれたわけなのでこれ以上怒るわけにはいかなかつた。

「はあ……東博士陽炎の修理をお願いします」

「うん、わかつたよ。さーちゃんとエーフィーは私と一緒に作業場まで来て。いくんとシャルルンはここでビデオでも見て待つてね」

一夏とシャルロットは東博士の指示に疑問に思つてゐるようだが私とエフィーはその

指示の真意をある程度は察していた。

「シャルロット、ちょっと天照借りるわよ」

「え、いいですけどどうしてですか」

「先の戦闘でちよつと不安なことがあつたから一度専門家に見てもらおうと思つてね」

「なるほど、それではどうぞ」

シャルロットは快く天照を渡した。天照を受け取り私とエフイは東博士の作業場に向かつた。

「ようこそ、私の作業場に」

そこは色々な機材やらパーツやら何かの設計図や理論が書かれた紙などが床に雑多に置かれていた。正直に言つてこの中から目的のものを探しと言われても私は探し出すことができないだろうと思わせるほど部屋の中は汚かつた。足の踏み場は多少あるみたいだが。

「それじゃあ今回の本題を話そうか」

東博士は作業場の中にあつた椅子に座りこちらを正面に見据えて話を切り出した。

「それでは私から先にあなたにあなたに聞きたいことがあります。

いつから気づいていましたか?」

「それは愚問というやつだよさーちゃん。最初からだよ。君たちがこの時代にやつてきて大地を踏みしめたその瞬間からさ」

今までには仮設の域だつたけどね、と東博士は続けた。

「確信したのは今回出した依頼と君の記憶からだね。知つてるかい? 君の使つたエネルギー兵器はまだこの時代では実用化されていないんだよ。それと君の記憶の最初に出た土地なんだけどね、使われている言語は確かにロシア語なんだけどところどころ私の知らないなまりや発音があつたんだ。私はこの世界の言語を全て網羅しているからね。そういうことは直ぐに分かつた。極めつけは幼い君がいた研究所だ。あそこで使われていた技術はこの時代には存在しないものばかりだつたからね」

「では勝手ながら質問を重ねさせてもらいます。どうやつて補足したんですか?」

「簡単な話さ。君たちが出現する十数分前にあの一帯で重力反応が検知してね。ああ、もちろん補足できたのは私だけだよ。他の奴らはまだ重力センサーなんて開発できていないしね」

(本当に最初からだつたのか……)

とりあえず私達が疑問に思つていたことは解消できた。とりあえず未来に帰つたら博士にあの隠密能力の欠片もなく私達の体を幼児退行させやがつた不良品について文

句を言つてやると心に決めた。

「種明かしも済んだところで早速修理をはじめようか」と束博士が修理をする準備を始めたのでエフィイは陽炎を固定モードで出現させ、私は陽炎の設計データを束博士の端末に送った。

「よし、受信完了。じゃどんどんいくよ！」

と束博士は設計図を読み込みながら修理を始めた。

「コアに連結しているこれは一体何なのかな？束さんの知る構造じやないね」

「これは疑似ISコアをISコアに連結させているものです。疑似ISコアを連結させることによつて活動時間の向上及び携行できる兵装の大幅な増量が可能になりました。そしてこの疑似ISコアは拡張領域バススロットとシールドエネルギーの機能しか持つていないので一個だけなら連結しても起動には問題ありません。」

「このIS隨分スラスターの出力が高いね。センサーの類を見る限り狙撃戦を重視されている機体なのに」

「それはこのISが宇宙で活動することを前提にされているからです。一応木星の重力圏をぎりぎり振り切れるくらいの出力ができるようになつてます」

「未来ではISが宇宙で活動できるようになつていてるんだね！」

と作業をしている束博士がとても嬉しそうに言つた。

(束博士って誰かに似ている気がする)

私は嬉しそうにしている束博士を誰かと重ね合わせていた。

「さーちゃんここは?」

「ああここはですね———」

そうして私達は陽炎の修復と天照の改修を続けた。一週間ぶつ続けて。もちろん全ての作業が終了したときに三人仲良くぶつ倒れて一夏とシャルロットにこつびどく叱られ、しばらくの間おやつ禁止と徹夜禁止を言い渡された

第25話

（数日後）

「それじゃあ第一次起動試験やつていくよ。二人とも準備はいい？」

「陽炎、準備オッケーです」

「天照いつでもいけます！」

「それじゃあスタート！」

東博士が開始の合図を出すと同時に緑と橙色の閃光が空に走り、次々とダミーバルーンを撃墜していく。二機ともに走り出しは順調のようだつた。私が二人の方に意識を向けていた時背後から殺氣がしたので即座に右手に握っていたブレードを振り一夏の斬撃を防いだ。

「ちくしょう、背後からでも駄目か！」

「まだまだ甘い」

一夏は下から打ち上げるようにブレードを振るつたが、私は少し身をそらすだけで回避し左脚部のスラスターを全力で吹かして一夏の胴を蹴り飛ばして、距離を開かせた。

「ぐう、くそ！」

一夏は悪態をつきながらも右から回り込むようにして加速し、左手にアサルトライフルを展開して掃射してきた。私は急上昇してそれを回避し腰部のヴエスパーを一門だけ展開し空いている左手でトリガーを引いた。緑色の閃光がこちらに飛来していたアサルトライフルの弾丸を焼き払った。私がヴエスパーを放つた一瞬の隙を狙つて一夏は瞬間^{イグニッシュョン・ブースト}加速を使つて私の足元から突きの体勢で突っ込んできただが、事前に察していたので右手のブレードで突きをそらしながら一夏の腹部にヴエスパーを叩きこんだ。先程からダメージを蓄積していた禍津火はその一撃でシールドエネルギーを削り切つた。そこで試合終了のブザーが鳴つた。

「くそ、またサーシャさんに一撃も当たられなかつた」

模擬戦が終わつた後一夏は悔しそうにスポーツ飲料を飲んでいた。

「ISに乗つてまだ一年も経つてない奴に負けられないわよ」

私はドクターペッパーを飲みながら一夏の独り言に答えた。

「つて、サーシャさん居たんですか」

「うん、そういうえば一夏にまだ大事な話をしてなかつたなつてさつき思い出したから。ちよつとここで待つててね。東博士を連れて来るから」

「なんだか猛烈に嫌な予感しかしないんですけど」

私は心なしか顔色が青くなつてきて一夏を待合室に置いてきて東博士と小道具

を取りに行つた。

数分かけて東博士と小道具が入った段ボールを持ってきた私達を一夏が視界に捉えたとき、いきなり方向転換をして逃げだそうとした。だが東博士が事前に待ち伏せさせていたクロエに捕まつてアニメのように縄でぐるぐる巻きにされていた。

「何するんですかいきなり！」

「何つてそりやあいつくんが逃げだそようとするからだよ」

「東さんがすごく悪い表情をしながら歩いてきたらそりやあ逃げだしたくもなりますよ!!」

と縄でミノムシのようになつてもまだ逃げようとしていた一夏をクロエが取り押さえた。

「いやあ、いつくん傭兵になりたいんでしょ？」

「……………そうですけどそれがどうしたんですか？」

「別に傭兵になるのはいいんだけどさいっくんつて世間では死んだことになつてるんだよこれが。それに男がオリジナルコアのISに乗れるつて世間に知り渡つたら色々と大騒ぎになるよね」

「そうですけど何かここからの展開が読めてきた気がするぞ………」

一夏の目からどんどん光が消えてつてはいるのだが束博士は気にせず話を続けた。

「そう！ いつくんが世界初の男性操縦者とばれないために！ 織斑一夏が生きていると知られないために！ いつくんには女装をしてもらうよ！！」

「いやだあああああ！！それだけはいやだああああああ！！」

どこで一夏はふと思い出した。数ヶ月前に突然サーチャが髪を伸ばせと指示したことを。

「ま、まさか数ヶ月前に俺に髪を伸ばせつて指示したのも」

「うん、そのときから一夏の女装計画は遂行されてた」

「やつぱり！！」

「さて、いつくんそろそろおめかしする準備はいいかな？ まあいつくんの準備ができるなくともやるけどね」

「嫌だあああああ！！男の尊厳を奪われてたまるかああああ！！」

束博士がそう宣言すると同時に一夏は必死にその場から逃げだそうと必死にもがいた。だが

「一夏様、暴れでは駄目なのです」

「ゴフ……!? ちょ……クロ、エ……やめ……！」

「うわあ」

一夏の上に乗つかつていたクロエが一夏が暴れるのを止めさせるためになんと背中の上で飛び跳ね始めたのだ。クロエの体重は軽いとはいえそれでも背中の上で飛び跳ねられるとやつぱり痛いのだろう一夏が辛そうなうめき声を上げているのを見て哀れに思つた。

「くーちゃん、そろそろいつくんがやばそうちから止めてあげてね」

「はい束様」

流石にこれ以上やるとやばいと思ったのだろうか、束博士がくーちゃんにレフリーストップをかけるとクロエはすぐに一夏の上からどいた。一夏はかなりボロボロになって息も絶え絶えになつていてがこれで抵抗されずに着替えをさせることが出来るので結果オーライだつた。

「じゃあいつくんを綺麗におめかししてあげるね☆」

「私も微力ながらお手伝いします、束様」

「私はエフィイ達の起動試験の方を見てきます」

「…………」

束博士は怪しげに手をわきわきさせ、クロエは化粧や服が入つたバッグを持ち、一夏は生気が完全に消えた目でなすがままになつていた。私はそろそろ起動試験が終

了する二人を迎えて甲板に向かつた。

第26話

（甲板上）

現在、私は起動試験を続いている二人の様子を見に甲板の上に来ていた。空を見上げるとさつきと変わらずにオレンジと緑の閃光が高速で飛び交っていた。私は義眼の望遠機能を使って何をやっているのか確かめることにした。

シャルロットがハイブリッドガトリングガンを使い飛んできていたミサイルを迎撃しているのが見えた。ハイブリッドガトリングガンとは二門のガトリングを内蔵した武装であり実弾とビームで分かれているのが特徴だ。ただ反動が凄まじく並みの兵士じや扱いきれないくらい難しい兵器のはずなのだがシャルロットはそれを使いこなしているようだつた。

迎撃したミサイルの爆炎の影からエフイが連射式アンチマテリアルライフルでシャルロットを狙撃していた。あれもあれでまず連射したら当たられない代物なのだがエフイはうまく衝撃を逃がしているようだつた。その努力を少しくらい近接能力に向けたらしいのにあの少女は全ての才能と努力を狙撃に捧げていた。なので今でも近接格闘能力は初心者の一夏に完封されるくらい弱い。狙撃銃を握らせたら右に出るも

のはいない位には強いのにどうしてあんなに極端になつてしまつたのだろうか。

エフィイの狙撃を数発もらつてしまつたシャルロットはよろめきながらも必死に立て直そうとした。ところがもう一発頭に狙撃を食らつてしまつた。最後の一撃でエネルギーが尽きてしまつたのだろうかシャルロットはうなだれながらこちらに降りてきた。エフィイもシャルロットに続くよう下に降りてきた。

「うーん、やつぱりエフィイさんは強いな……エフィイさんの狙撃全然避けられないや」

「あはは。狙撃だけが私の取り柄ですからね。狙撃だけはまだ誰にも負けるつもりはありませんよ」

「二人ともお疲れ様」

私は最初から用意しておいたタオルとスポーツドリンクを一人に投げ渡した。

「とと、ありがとうございます。サーシャさん」

「あう、うう…………ありがとうございます、サーシャさん…………」

シャルロットはそれらを危なげなくキヤッちしたのに対しエフィイはどちらとも落としてしまつていた。こういうところでもどんくささは発動しているようだつた。私はそれらを拾つて手で渡した。

「相変わらずどんくさいわねエフィイは」

「うう……」

エフイが落ち込んでしまったが特に慰めるつもりもなかつた。

「ところで二人とも。今下で東博士が何か面白いことをしてゐみたいよ」

「え？ 篠ノ乃博士は一体何をしてるんですか？」

「は、はい。私も気になります！」

シャルロットとさつきまで落ち込んでいたエフイは何か怪訝な目で言つてきた。
 東博士がどういう性格をしているのか分かつてゐるので東博士の「面白い」ことという
 のは彼女たちにとつて碌でもないことという認識になつてゐるのだろうか。もちろん
 私は今下で何が起きているのかは知つてゐるが楽しみを奪うつもりは毛頭ないので言
 わないことにした。

「私も東博士が何をやつてゐるのかは知らないけど『みんなを連れてきてね☆』つて
 言われてたから呼びに来ただけだし」

「じゃあ着替えてから行きますか」

エフイとシャルロットが着替えに艦内に行つたので私も続いて艦内に向かつた。

* * *

シャルロットとエフイが着替え終わり先程お茶会をした部屋に入るとそこにはに

やにやしている東博士といつも通りの無表情なクロエと顔を真っ赤にしている黒髪ロングの美少女が立っていた。

「えっと……誰？」

「あれ？ 誰ですかこの綺麗な女の子は？」

シャルロットとエフィーがほぼ同時に自分の疑問を口に出したとき黒髪ロングの美少女はもう耐えきれないと言わんばかりに両手で顔を覆つて崩れ落ちたのに対しもう耐えきれないと言わんばかりに東博士が笑い出した。私も流石に可哀そうになつてきたのでネタばらしすることにした。

私は自分ができる精一杯の笑顔で目の前の美少女に話しかけた。

「随分可愛くなつたね一夏」

「ほんと勘弁してくださいよ。これくそ恥ずかしいですしだして」

「ええ！ 君一夏なの!? とつても可愛いんだけど!!」

「お、落ち着いてくださいシャルロットさん！ 感極まつて一夏ちゃんに抱き着かないとください！」

「あんたが一番落ち着けよ！ 俺のことをちゃんとづけで呼ばないでくれ！ それとシャルはちよつと離れてくれえ!!」

「うあはははははは!! いいね可愛いよ一夏ちゃん!!」

「うるせえよ！この駄兎!!」

リビングルーム内がとつてもカオスなことになつていて。これから大事な話と
シャルロットとエフィに一夏が女装することになつた事情を話さなければならぬ
のでとりあえずまだ冷静なクロエと一緒にこの場の鎮静化を図ることにした。

数分かけて場の鎮静化を行い、みんな落ち着いたところで私はエフィとシャルロッ
トに事情を話した。そこからまた数分かけて説明してようやく納得してもらえた。

「さて、女装した一夏の新しい偽名について発表します」

「また唐突つすね！」

「戦場で女装するんだから偽名は必要でしょ？今日は束博士とクロエと私で考えて
みた結果」

「やつぱりあんたらグルだつたのかよ!!」

「だまらつしやい。一夏の新しい偽名を発表します」

「だらららららららららららら」

「セルフドラマロール!?」

と区切つたところでクロエが律儀にドラマロールをしてくれた。やつぱりその辺
りのことでも束博士に仕込まれたのだろうか。まあクロエが楽しそうなのでよしとする。

「一夏の新しい偽名は『音無 奏』に決定しました」

「それ完全にあんたの趣味じやねえかああああああああああああ!!!」

「いいじやん、その辺りは私の趣味で」

「よくねえよ！ちゃんと真面目に考えろよ！」

「ちつ。注文の多いやつね」

「今舌打ちしたよな!!」

一夏が色々と言つていたが数ある候補の中でクロエが選んでくれた名前だったの
で私としてもそれを尊重したかつたし、何より私と東博士がとても気に入つたので変更
はなしのつもりだ

「別に私の趣味じやなくてクロエが選んだ奴だから」

「あの…………ダメでしたか？」

「いや気にいつたよありがとうクロエ」

クロエが涙目上目づかいで一夏に訴えかけた瞬間一夏は速攻で折れた。やつぱり
一夏もクロエの涙には敵わなかつたようだ。

「じゃあこれからいっくんにはうーちゃんとさーちゃんと一緒に女らしさという奴
を学んでもらうよ！」

「…………マジすか？」

「何で私まで…………」

「がんばります！」

何故かは分からぬが私とクロエも巻き込まれた。クロエは妙に張り切つてゐるが私と一夏はやる気がなかつた。だがエフィとシャルロットが張り切つており東博士に出入り口を封鎖されている辺りどうやら私と一夏に逃げ場はないらしい。じりじりと迫つてくるシャルロットとエフィを見て私と一夏互いに見合わせて諦念のため息を吐き、シャルロットとエフィに掘まれてズルズルと連行されていった。

「とある一軒家にて」

「くくくく」

薄暗い部屋の中で少年がくぐもつた笑い声を上げながらノートにあることを書いていた。

「この作品の主人公だった織斑一夏はもうこの世にはいない。他の連中の記憶から一夏の存在を消し去つた。箒と鈴のフラグを立てた。全ては俺の計画通り」

正確にはサーリヤの手によつて鈴とのフラグは完全にへし折れているのだが百春は全く気付いていなかつた。これから計画書を書く手を止めいすれ来るだろう栄光の

未来を思い浮かべながら言つた。

「この物語の主人公は俺だ!!」

？？？

「千秋お兄さま」

暗がりから少女が出てきて作業をしていた少年に話しかけた。

「ああ冬香か。どうした？」

「先日行つた戦闘データの解析が終了しました」

「ありがとう、冬香」

「いえ。……その機体は？」

冬香は千秋が何の作業をしているのか気になつて聞いてみた。千秋は笑いかけながら今行つていた作業の説明をした。

「今やつていたのは新型ISの開発だよ。フレームだけは何とか完成したんだ」「どうとその機体が」

「ああ。冬香の新しい剣となる機体。第7世代型IS『紅玉』だよ」
『紅玉』……

冬香は未完成ながらも他とは違う存在感を出す赤い騎士を見つめながら思わず口に出していた。

様々な人の思惑が交錯しながら第一幕は幕を閉じる。次の舞台は二年後のIS学園

第27話

黒騎士事件から約二年。ほとんど変わらなかつた。テロを憎みその報復としてまた紛争地域が増えたり、それがきっかけになつて日本の軍備が強化されたりと世界的に変わつた部分といえばこの程度しかない。相も変わらず戦争はなくならないし女尊男卑はひどさを増す一方。

それで現在俺は何をしているのかというと。

砲弾と悲鳴が行き交う硝煙でむせ返りそうな戦場の真つただ中にいた。

「くたばれええええええええ!!」

と今までの状況確認をしていた時に横からスラスターを全開にした『グラナーダ』がパイルバンカーを構えて突っ込んできていた。俺は最小限の動きでパイルバンカーを回避し速やかに持つていたI-S用プラズマブレードで相手の頭を切り裂いた。相手は全身装甲フルスキンであつたため致命傷には至つていないうだが手応えからしてかなりのエネルギーを削つたはずだ。見てみると相手はふらつきながらも撤退しようとしていた。とそこで遠くから銃声がしたかと思うとさつきの『グラナーダ』の頭頂部に穴が空き、墜

落していった。索敵しなくとも誰がやつたのかは分かつていた。

「援護ありがとうございます、エフィイさん」

『いえいえ。それよりも三時の方向から三機が接近中です。気を引き締めていきましょう』

「了解」

俺はブレードを構え直して新しく接近してくる機体に備えた。

今回の依頼はテロリストの追撃から敗走する政府軍を援護するという内容だつた。最初から俺たちを送り込んでおけばこんな惨めな敗走はなかつたのだがとやかく言つている場合じやなかつた。

「ちつ！ 次から次へと…………！」

今戦つてるテロリスト達は随分と潤沢な武装を所有している様子で戦車に戦闘ヘリにISときたものだ。使用しているISは『グラナーダ』の初期型『とラファールリヴィアイブ』と『テンペスト』と種類が多かつた。

こつちに向かって撃つてきた機体を瞬間加速を用いながら接近して切り捨てた。

すると左の方にグレネードキヤノンを向けてきてる機体が見えたので左手に装着していたシールドのスイッチを押した。するとガシヨ、という音と共にシールドが射出され、まさに撃とうとしていたグレネードキヤノンの砲身に着弾し爆発を引き起こし

た。

「そんなのあり!」

―――シールドセイバー

シールド自体がブレードのように鋭利になつており、先も鋭く尖つてゐるため剣として使用が可能となつてゐる。そして最大の特徴がこの射出機能だ。シールドの裏にあるスイッチを押すことによつてシールドの後部にある隠されていた小型ブースターによつて勢いよく射出することができるようになつており、もう一度スイッチを押すことで腕に装着されていた装置によつてワイヤーが巻きとられ回収が出来るようになつてゐる。

スイッチを押してすぐさまシールドを回収しつつ、グレネード弾の暴発によつて少しだけひるんでいた相手に切り込んでいつたがすんでのところで回避されてしまつた。追撃しようとしたが仲間の機体から援護射撃が飛んできたので追撃を断念し回避に専念することにした。少し経つてからテロリスト達が撤退を始めた。何とか政府軍の撤退が成功したようだつた。これ以上戦う意味もないるのである程度牽制射撃をした後俺たちも撤退することにした。

「ふう……」

とりあえず安全地帯まで戻ってきた俺はISを解除してスポーツドリンクを飲んでいた。すると奥から女性兵士が近づいてくるのが見えた。

「音無奏さんとエフィ・ハーミットさん、今回の戦闘は本当に助かりました。あなたたちがいなかつたら私達は全滅していました。本当に感謝しています」

そう、俺は未だに女装をしていた。最初は全然女装というやつに慣れていなくて色々とばれそうになっていたのだが今では女装自体に慣れてしまっていた。しかも俺は結構鍛えているはずなのに筋肉が増えずに華奢なまま（なのに筋力や体力は上がっている）。背は伸びない。顔立ちも女性らしくなってきているという有様だ。これはもしかして東さんが原因なのではと思ったのだがそうではないらしい。東さん曰く織斑家に居た時碌な食事を摂つていなかつたのと体内にあるナノマシンとISに乗つている影響なのではという仮説を立てていた。

「いえ、全体の三割被害を出してしまったのでとても感謝されるようなことでは……」

「それは指揮官の見通しが甘かつたからです。あなたたちは十分やつてくれました。本当に感謝しています。本当にありがとうございます……！」

女性士官が深々と頭を下げたのでこれ以上言うことができず俺とエフィさんは困つてしまつた。

「そういえば音無さんとハーミットさんの依頼はこれで完了となります。一週間お疲れさまでした」

「私達がいなくなつても大丈夫なんですか？」

エフィさんは尤もなことを言つたが、女性士官は「大丈夫です」と言つた。

「直に本国から増援が来ますし、今回の戦闘でテロリスト側にも大打撃を与えられたので後は大丈夫です」

「そうですか」

とそこで携帯からバイブ音がしたので女性士官に断りを入れてから電話にでた。

「もすもすひねもすゝゝいつくん今時間空いてるかな？」

「ちょっと待つてください」

俺は人気がない場所まで移動してから通話を再開した。

「どうしたんですか束さん？ いきなり電話を寄越すなんて」

「いやあー、そろそろいつくんたちが仕事を終える頃かなと思つてね」

「ということはもしかして？」

「うん。いつくんの想像している通りだよ」

電話の向こうでも相手が満面の笑みを浮かべているのが分かるくらいの声の高さで

束は告げた

「いつくんたちがこつちに戻りしだい依頼したいことがあるんだ」
束は一層声を低くして言った。

「日本で初めての男性操縦者が発見されたことは知っているかい？」
「え……？」

第28話

仕事を終え依頼金をもらつた俺たちはエジプトにある会社に訪れていた。会社の受付の方に向かい、社長を呼び出してもらうように頼んだ。受付の人も直ぐに了承し電話で呼び出してくれた。

「社長室に来てくれとのことです」

「はあ、わかりました」

俺たちはエレベーターを使って最上階にある社長室に向かつた。社長室の前まで来ると少し息をついてドアをノックした。すると「どうぞ」と気の抜けた声がしたので「失礼します」と断りを入れて室内に入つた。そこにはスーツの上に白衣を着て頭にウサミミを着けた社長の威厳も欠片もない篠ノ之東がいた。

「いつくんもエーフィーもお疲れ様～。それで今回の仕事はどうだつた～？」

「今回の仕事の目標であるテロリスト集団の戦力がテロリストらしくもないくらい兵器が充実してましたね。最新型の機体もあるくらいでしたし」

「ふ～ん？ そいつは気になるね。どこかの国が援助でもしてるのかな？」

束は特に興味も無さそうにパソコンのコンソールを叩いていた。

(本当にあの束さんがまともに仕事をしているなんてあの頃じゃ考えられないよ
なあ)

俺は不真面目ながらも一応普通に仕事をしている束さんを見ながらそう思つた。我が道を行くを表現したかのような人間嫌いのあの束さんがまともに社長などをしていることには実は訳があつた。それはクロエが救出されてから一ヶ月後のクロエのある発言がきつかけだつた。

「束様はもしかしてニートなのですか?」

その発言は束の心にぐさりときたらしく、動揺を隠せてはいなかつた。慌てて弁明をしていたが、クロエが「一夏さんでも仕事しているのに?」という一言がとどめとなり 束さんは会社を作ることを決意した。元々会社を作ることを考えていたようなので一度決めたら会社を設立するまでそれほど時間はいらなかつた。各地で優秀な人材を集めつつ自分の身分を偽造して社長兼技術主任として会社に君臨した。束さんが設立した会社の名前は『シルバーラビッツコーポレーション』でおそらく自分の趣味とクロエの身体的特徴をそのまま会社の名前にしたものだと考えられる。とりあえず束さんの会社はIS企業として発足し急成長を遂げ、エジプト一のIS企業となつていた。

「いっくん達を呼び出したの他でもない。電話で伝えた通り君たちにある依頼を出し

たいからだよ」

東さんはいきなりまじめな顔をして話を切り出した。このとき俺はすぐ嫌な予感がしていた。

「東さんは俺たちにどういった依頼を出したいんですか？」

「その前に、いつくん。君はニュースを見たかい？」

「…………ええ。ここに来る前に一通りは」

俺は苦々しい表情を浮かべながら東さんの質問に答えた。東さんが俺にそう言つてきた理由は日本で発見されたのがなんと俺の実の弟織斑百春だったのだ。その事実に俺は驚愕しながらも内心まあそんなんだろうなと思つていた。なぜなら俺がISを動かせるのなら弟である百春が動かせてもなんら不思議ではないからだ。

「うん、なら話は早いね。じゃあ单刀直入で言うよ。いつくん達にはIS学園に行つてもらいたいんだ」

「…………理由を聞いてもいいですか？」

「うん。理由はいくつかあるんだけどね、大きな理由はあいつのデータを取つてきて欲しいこととIS学園の警護かなあ」

もちろんそれ以外の理由もあるけどね、と笑みを浮かべながら言つた。

「それじゃあ俺のことを世間に公表するんですか？」

「いやいや、そんなことはしないよ。いつくんには女装したまま行つてもらうよ」

「ちょっと待てや!!この駄兎!!!」

俺は聞き捨てならないことを聞いたので思わず叫んでしまつた。
「流石に I.S 学園にまで女装は出来ないですよ！絶対ばれますよ！俺変態扱いされますよ！」

「大丈夫大丈夫。この二年間でいつくんの女装能力は格段に上がつてゐるし、この束さんが作つた特殊装備と私のハッキング技術があれば余裕のよつちやんだよ！それに世間的には死人である君が突然現れたら大騒ぎになるだろうしね」

「ぐうう。と、というか I.S はどうするんですか！俺の I.S は黒騎士事件で有名になつてるんでしよう？」

黒騎士事件。それは二年前に池袋で起きたテロ事件の

名称だ。『黒騎士』はニュースを見る限り俺の I.S のことをさしてゐるのだ。おそらく俺の I.S の造形が『白騎士』に似ており、カラーが黒いからだと思うのだが業界では変に有名になつてしまい困つたものだつた。

「その点も心配いらないよ。いつくん達が使つてゐる系統の I.S は全身装甲^{フルスキン}
と半身装甲モードの二つが搭載されてるし、機体認証を阻害することも出来るからいつくんが黒騎士だつてばれる心配はないよ」

「そんな機能まであつたんですか」

俺はあまりにも多機能すぎるISに若干呆れつつ一つ気になつたことがあつたので聞いてみることにした。

「俺たちは自分のISを持つていくんですね? だつたら俺たちの身分はどうするんですか? エジプトの代表候補生とかですか」

「うん、それもあるけどね。とりあえずしやるるんとエーフィーが代表候補生として入学してもらうとしていつくんとさーちゃんが私の会社のテストパイロットとして入学ということになつてるんだよ。大丈夫、ちゃんと各国に根回ししてあるからノープロブレムさ♪」

「そこまで準備は終わつてゐんですね…………」

「うんうん、頑張つて一日徹夜した結果だよ! もつと束さんを褒めてくれてもいいのよ」

「ハイハイスゴイデスネー」

「すつごい感情こもつてないんだけど!?」

「ここで束さんは何かの作業を終えたらしくコンソールを叩くのを止めて背伸びをした。

「やつと作業終わつたよ…………ああそうだそうだ二人には渡しておくものがあつた

んだ。くーちゃん！例のものを一人に渡して頂戴！」

「はい、承知しました」

奥の部屋から声がして顔を奥のほうの部屋に向けるとちょうど部屋の中から二つの段ボールを持ったクロエが出てきたところだった。

「この段ボールの中に I.S 学園の制服とか参考書などの学園生活に必須なものが入っているからね。それとはい」

東が机の引き出しを開けて中から飛行機の切符を取り出して俺たちに手渡した。

「この切符は明後日の飛行機のだからね。それで I.S 学園の実技試験は四日後、筆記試験は免除されているから今から必死こいて頭に詰め込まなくとも大丈夫。それであらかたの説明したはけど何か質問は？」

東さんが俺たちに問い合わせたが特に聞きたいことはなかつたので「特にないです」と告げると東さんは「そつか」といい、クロエがこつちまで歩いてきた。

「それでは整備や新しい設定に変える必要があるので I.S をお預かりします」「はい、わかりました」

クロエに『禍津火』と『陽炎』を渡して、渡された段ボールを持つて部屋から出ようとした時東さんが「ああ、忘れてた」と俺たちを引き留めた。

「その段ボールの中に資料が入っているから必ず熟読しておいてね！」

「了解です」

そして俺はこれから起ころうだろう厄介ごとに頭を痛くしながらまずはできることから始めようと自分にあてがわれた部屋に戻った。

第29話

「三日後の日本」

「……日本に来るのは二年ぶりだな」

俺は飛行場から出るなり空を見上げて呟いた。二年前のあの事件以降日本には全く来ていないので。隣にいたサーシャさんも同じく頷いた。

「私も久しぶりよ。さて、さつさとIS学園に向かつて実技試験を受けるとしますか」「ういっす」

そう、俺たちは実技試験を受けに来たのだ。そしてこの実技試験のためにISの設定を大幅に変更した。通常の状態だと出力が高すぎて相手のシールドスキンどころか絶対防御を貫いたり、第三世代を遥かに上回る速度で飛び回つたりしてしまってからだ。それに殺傷能力が高すぎて封印された機能もいくつかある。『プライマルアーマー』や『規格外兵装オーバードウェポン』がその筆頭だ。『プライマルアーマー』が封印されたのにはある理由があるのだがこれについては割愛する。様々な理由があつて元の状態の性能とは天と地の差が出てしまうほど性能を下げてようやく競技用ISとほぼ互角なのだから実戦用ISの性能の高さには頭が下がる。

俺とサーシャさんは I.S 学園に向かうロープウェイに乗り込んだ。

ロープウェイの中には I.S 学園の生徒であろう少女達や大人の女性などが乗つていた。サーシャさんはロープウェイに乗つてすぐに海が一望できる窓際の席に座りぼーっとし始めた。サーシャさんは世間一般から言うと美少女の枠組みだろう。綺麗なマリンブルーの瞳。滑らかな銀色の髪。背は同年代の平均よりも低く、雪のような白い肌。そして何の色ない人形のような無表情。まさに『透明な少女』といえる。そんな浮き世離れした雰囲気を醸し出している少女が現れたのだから同性の少女たちはサーシャさんをちらちら見てひそひそと話していた。少しだけ少女達が話していることが気になつたので耳を傾けた。

「あの子何か可愛くない？」

「うん、肌がとても白くて綺麗！」

「髪もいかにも染めましたーみたいな感じじゃないよね、地毛かな？」

「なんだかお人形さんみたいで可愛い！」

「外の景色見て何を考えているんだろうね」

「多分……世界平和？」

「なにそれー」

「あはは……」

大まかにこういう内容だつた。だがみんなは少し勘違いをしている。このお人形系残念食いしん坊少女が『海』を見つめながら考へるのは世界平和だとか黄昏ているとかこの世界の悲劇に憂てているだとかそういうことじやない。それは…………

「今日の昼食魚介系にしよう、そうしよう」

今日の昼食何にしようか考へていたに決まつていた。現に口の端からよだれが少しだけ出ていた。俺はため息をつきながらサーシャさんに近づきハンカチでよだれを拭いてあげた。

「むぐう、なにをするの……」

「海を見て食欲がそそられるのはいいですけど涎は垂らさないで下さいよ。みつともないですから」

「むうう」

サーシャさんがいきなり口元を拭かれたことに抗議するようにジト目を向けてきたが俺はそれを流しながらサーシャさんの隣の席に座つた。何故だか周囲からはまたひそひそと話されているがサーシャさんと試験についての話をしたかつたのでそれを無視した。

とそんなことをしている間に目的地であるIS学園に着いたようだつた。

俺たちはロープウェイから降りて会場に向かつた。受験票によると俺とサーシャさ

んは別々の会場だつたので途中で別れた。会場に着いて更衣室に向かつた。そこは勿論女子更衣室だ。最初の方はかなりの抵抗もあつたし女の子の着替えを見ただけで顔を真つ赤にして怪しまれたりされたものだが悲しいかな今ではすっかり慣れてしまつていた。

(この二年で大切なものを色々と失つてしまつてゐる気がする)

俺は女性用ISスーツに着替えながら憂鬱な気分に落ち込んでいつた。今着てゐるISスーツはなんでも東さんが作つた特別製らしく女装してることをバレにくくする機能があるらしい。本当にその変な方向に吹つ飛んでいる努力をもつとまともなことに向けて欲しいものだ。……今回はすぐ助かるが

無事に着替え終わり、待ち合い室に向かうとそこには試験官と思われるいかにもどんくさそうな人がいた。

「シルバーラビッツコーヒー・ボレーションの音無奏さんですね？」

「はい、そうです」

「試験官の山田麻耶です。これから試験を始めますので私に着いてきてください」

山田試験官がアリーナに続く扉を開け、付いてくるように指示を受けたので俺は山田試験官に続くようアリーナに歩いていった。

アリーナに到着すると中央には『ラファール・リヴァイヴ』が鎮座しており、山田試

験官がそれに触れて一瞬光を放ち『ラファール・リヴァイヴ』を装備していた。俺も続くよう^{フルスキニ}に禍津火を展開した。いつもの全身装甲ではなく半身装甲^{ハーフスキニ}なため結構違和感があつた。

「音無さん、準備はいいですか？」

「はい」

「それではこれより試験を開始します。初撃は音無さんからどうぞ」「ではお言葉に甘えて」

俺はすぐさま重量子砲を展開し、バスター mode で放つたが山田試験官は軽々と回避した。だが急にビームが直角に曲がりラファール・リヴァイブに直撃した。

「それが禍津火の第三世代兵装ですか！なんて威力！」

禍津火は第三世代ということになつてるので大半の装備が封印され、この機体の第三世代兵装は重量子砲となつてている。この重量子砲はガンポッドモードとバスター モードがある。ガンポッドモードはマシンガンのように連射することができる。バスター モードはチャージすることによつて高威力の攻撃ができるがエネルギーを多量に消耗するという欠点がある。さらに一回だけなら90度までビームを曲げることができるという特長がある。

今回持ち込んでいる武装は拡張領域にリミッターがかかつてゐるせいでいつもより

かなり少ない。プラズマブレード一本に重量子砲が一丁、シールドセイバー、ショットキャノンが一丁といった具合だ。さらにブースターの出力の高さと重量子砲の燃費の悪さのせいで長期戦が出来ない。なのでなるべく早めに決着をつかないとガス欠で敗北してしまうことになる。

(重量子砲を直撃させることは出来たけどもうこの手は通じないだうな)

俺はガンポッドモードに変更してトリガーを引いた。だがそれも避けられ、お返しと言わんばかりにアサルトライフルを放たれた。いつもよりも速度が遅くなっているとはいえ山田試験官の銃撃の腕はいいみたいで俺が必死になつて避けようとしても何発か被弾してしまつた。

「くそ…………！銃撃戦ではあっちのほうが上か！」

銃撃戦ではこの人には敵わないと早くに悟つた俺は、なら得意な近接戦闘で決めるしかないと思つた。重量子砲をしまい、ブレードとシールドを取り出した。山田試験官は俺が近接格闘に向かつてくることを踏まえて両手にアサルトライフルとショットガンを展開しアサルトライフルのトリガーを引いた。俺はシールドを掲げながらそれを防ぎつつスラスターを全開にして下から潜り込むような軌道で接近した。山田試験官がショットガンをこちらに向けてきた瞬間俺はシールドの先を山田試験官に向けてシールド内部のスイッチを押した。シールド後部からブースターが出現し一気に山田

試験官の方に飛んで行つた。

「ええ!? シールドが飛ぶつてそんなのありますか!?

声では驚いていたようだつたが冷静にショットガンとアサルトライフルで撃ち落とそうとした。だが腐つてもシールドなので飛んでくる銃弾をものともせず目標だつたショットガンを切り裂いていつた。

「今だ!」

俺は瞬間加速で一気に近づきスマブラードでアサルトライフルを切り裂き、続いて山田試験官を切り裂いた。

「くつ……！ でもまだです！」

山田試験官もブレードとハンドガンを展開したが、回収したシールドブレードをもう一度射出しハンドガンを弾き飛ばした。そこで山田試験官がひるんだすきをつき俺は腕のスマスターを使つた瞬間加速で山田試験官が回避行動をする前に神速の斬撃を直撃させた。そのとき試合終了のブザーが鳴り響いた。

「勝者。音無奏！」

第30話

試合の後、俺は少し山田試験官と会話をしたあと、着替えるために更衣室に来て いた。

「ふう、下手すれば負けてたなあれば」

俺は I S スーツを脱ぎ捨てながら先ほどの試合を思い出しながら呟いた。試合の最後の攻撃が通つていなかつたら恐らく俺は負けていただろう。

(だからといって奥の手の一つ使つたのは痛かつたかな)

いくら勝つためとはいえ俺は試合の最後の攻撃で奥の手を晒してしまつたことを

干後悔していた。

『一点集中瞬間加速』
(ピンポイント・イグニッシュョン・ブースト)

腕部に着いているサブスラスターに機体の全ての出力を集めることで爆発的な加速を行い、必殺の一撃を与えることができる。利点といえば相手の意表をつくことができ、かつ威力が倍増することだ。欠点は使用したスラスターが耐えきれずに自壊してしまい、運が悪かつたら腕部の出力まで低下してしまうことだがエネルギーの調整さえできれば腕部の出力は低下することはない。サブスラスターは壊れるが。

誰かに見られないように手早く着替え、外に出るとどんよりとした空気を纏つたサー

シヤさんがいた。

「うわ、どうしたんですか？そんな暗い顔をして。そんなにお腹空かせたんですか？」俺は冗談半分で聞いてみたが「半分はそう」とサーシャさんは切なそうにお腹をさすつていた。

（まじかよ。でも半分って言つてたな。残りの半分の理由つてなんだろう？）

残りの半分の理由が気になつた俺はそちらの理由も聞いてみた。サーシャさんは隠すつもりもないらしく直ぐに話してくれた。

〔試験の試合で負けたから〕

〔…………へ？〕

「負けたのよ。いくら武御雷の性能が格段に落ちていてその落ちた性能に慣れていなかつたとはいえよりもよつて得意の近接戦でね」

悔しそうに口の端を曲げながらサーシャさんが話してくれたが俺には信じられないかつた。あの無茶苦茶な反応速度を持ち、俺たちのなかでは唯一あの東さんを捕まえることができるくらいの運動能力を持つサーシャさんが負けるビジョンが思い付かないのだ。

〔相手は誰だつたんですか？〕

〔織斑千冬。あいつ本当に化け物ね。〕

織斑千冬。その名前を聞いたとき何となくだが納得した。流石のサーシャさんでも世界最強のブリュンヒルデが相手では分が悪かつたらしい。

「また鍛えなおしていつか再戦を挑むとしてとにかく今はお昼を食べましょう。私もうお腹と背中がくつつきそうだわ。というか早く食べないと私行き倒れそう」

「サーシャさんは本当に燃費悪いね。今朝私の二倍食べてたのに」

サーシャさんは心なしか顔色を青くしながらせかすように言つてきたので俺は呆れながら返した。サーシャさんは激しい戦闘の後はまるでガス欠を起こしたかのように激しい空腹を覚えるらしい。ということはやはり織斑千冬との戦闘はかなり激しいものだつたのだろうか。

このままだと本当に倒れてしまいそうなくらいふらついていたので急いで食堂へと向かった。

「ふむ………」

「あれ? 織斑先生どうしたんですか?」

試験終了後、今回の受験者のデータを整理している最中に千冬が何かを考え込んでいたのを気になつた摩耶がデータをまとめながら話しかけた。

「ああ、シルバーラビッツ^s コーポレーションからの受験者で私が試験管をやつた奴なんだが少し気になつてな」

「何が気になつたんですか？」

「動きは少しきこちなかつたくせに反応速度が異常に早くてな。もしかしたら私よりも反応速度が速いかもしれん」

「そんなに早かつたんですか？」

「ああ、操縦技術の差で私が勝つことはできただがな」

「それはまたすゞい娘が来ましたね、と摩耶は驚いていたが千冬はそのとき別のこと考えていた。

（試験中に何度か私の急所を狙つた攻撃を寸止めしたときエーデルバインの目が金色になつていた……あいつは一体何者なんだ）

千冬はドイツにいる教え子のことを思い出しながら仕事に戻つていった。

第31話

入学試験からはや二週間。俺たちはI-S学園に無事入学することができ、新しいクラスに割り振られた。クラスの内訳は俺とシャルとサーシャさんが一組、エフィイさんが二組といった感じだ。その厳しい現実を目の当たりにしたエフィイさんが「ボツチはいやですぐ！」と泣き出し、それをゲラゲラと大笑いした束さんを腹パンしたのはまだ記憶に新しい。そして俺は安定の女装でエフィイさんよりもよっぽど泣きたい心境にあつた。ばれたら最後女装して入学した変態扱いされ、身分を偽装した罪で刑務所直行使のチケットを手渡されることだろう。

三年間ずっとばれずにやつていけるのかと頭を痛くしていると、出来ることなら二度と見たくなかった顔を見つけてしまった。弟の織斑百春だ。だが少し様子がおかしかつた。詳しく言うと、シャルの方に顔を向けてからだ。まるで幽霊を見たかのように顔を青くした。百春の表情が豹変したことにシャルが怪訝な顔をしたとき、一人の女子が小走りで百春に近づいていった。

「百春ではないか、久しぶりだな！」

「あ、ああ。久しぶりだな筈」

篠ノ之箒。束さんの妹であり、俺と百春の幼なじみだつた少女だ。出会つた頃から百春にはああいつた感じで猫のように甘え、俺には気に入らないことがあつたら直ぐに竹刀で殴つてくるような関係だつたため箒とはあまり仲がいいとはいへなかつた。

（あの感じだと箒も一組なのか……）

ますます気が重くなつてきたので、サーシャさんの様子を見てみた。サーシャさんはココアシガレットをくわえながら片手にはライトノベルを、もう片方にはハードカバーの小説を持つて二冊同時に読んでいた。普通だつたらそんな器用な真似は出来ないのだがサーシャさんならではの裏技があつた。サーシャさんの左目は義眼になつており、義眼で読んだ本の情報を脳で処理させて、右目で読んだ本の情報を脳で処理することができらるらしい。なんというか壮大な技術の無駄遣いをしていた。ココアシガレットをくわえている理由は並列処理をやつていると糖分が欲しくなつてしまふので直ぐに糖分を補給できるようにくわえているらしい。単純にココアシガレットが好きだからくわえているというのもあるのだろうけど。

本人にとつては効率のいい読書のつもりなんだろうが周りからしたら頭のおかしいことをしているようにしか見えない。だが驚いたことに何人かのクラスメイトがサーシャさんに近づいて行つて会話を始めた。…………当の本人は読書をしながら。何を思つたのかサーシャさんがのほほんとした少女にココアシガレットを手渡していた。

のほほんとした少女は大喜びでココアシガレットをくわえて席に戻つていつた。

「…………疲れるのかな、私」

なにもしていないのでなんだかとても疲れた気がしたので、俺は考えることをやめて素直に眠ることにした。

このあと直ぐになにをやるのかを失念したまま

Side Out

百春Side

俺は今日の前の現実を前に酷く動搖していた。なぜなら本来ならいるはずがない人物が居たからだ。…………駄目だ。混乱しすぎて考えがまとまらない。ひとまず冷静になるために今までのことを振り返つてみた。

俺の名前は織斑百治。世界最強である織斑千冬の弟であり転生者でもある。この世界に転生する前によくある二次小説よろしく真っ白な部屋に立派な髭を持つた神様がいた。そこまでは二次小説ものと変わりがなく、この俺が転生者に選ばれた理由も抽選というのも事前に転生する世界がインフィニット・ストラトスであることもまだ予想が

できた。だが、問題は特典の方だ。

「十六年前転生前の白い部屋にて」

「それじやあ転生する前に特典をお主にやろう」

「特典か……何個もらえるんだ?」

「お主何か勘違いをしておらんか? 特典は個数ではなくコスト制じやよ」

「…………は?」

俺は思わず自分の耳を疑つた。普通特典というものは個数制じやないのか!?

「ちよつと待つてくれ。そういえば容姿や性別変更とか生まれとかもまだ決めてなかつた…………まさか!?

「そのまさかじやよ。それも特典の中にはいつておるわい」

まじかよ、と俺は思わず頭を抱えた。てつきりそいつたものは特典の中に入つてないものだと思っていたのだ。

「コストは合計三十に収まるのであればいくらでもいい。ただし、生まれや性別変更、

容姿は勿論 I S 適正とか才能も特典じやからそういうこととも吟味して考えるのじや」

「…………じやあ王の財宝とか直死の魔眼とか一方通行とか大嘘憑きのコストはどう

れくらいなんだ?」

「それくらいのチート能力だと百かの」

「習得できねえじやねえか！」

「あたりまえじや。元々一般人でしかないお主がその能力に耐えられるとでも？」

「じゃあIS適正Aはどれくらいなんだよ神様？」

「八」

「結構軽いな。それと能力の劣化はありか？」

「うむ、ありじやよ。能力の性能でコストも変動する仕組みじや」

その後俺は一時間くらいかけて考え抜いてなんとか特典を決めた。『内容は織斑家の生まれであること』『IS適正A』『洗脳（劣化）』『イケメン』にした。『洗脳（劣化）』は対象が女性のみで一人につき一回しか洗脳することができず、洗脳内容も無条件で俺に惚れるのみ。最初から強い洗脳はできず、洗脳がかかっている状態で徐々に強くなつていくといつた具合だ。さらにこのときは知らなかつたのだが回数制限もあるくらいに劣化していた。

「現代」

転生した後、俺はインフィニット・ストラトスの主人公になるために沢山努力した。剣術の稽古を必死にこなし、成績も常にトップを張れるように生前よりも沢山勉強をし

た。この洗脳能力で既に千冬、篠、鈴、蘭は俺の手中にあつた。織斑一夏もこの世から消えた。洗脳能力が回数制限付きで後三回しか使えないこと、原作には存在しなかつた事件が起きたこと以外は俺の計画通りだつた。だが、今日の前に起こつてることが俺の余裕を奪い去つていった。

シャルロット・デュノアが女子の制服を着て読書をしていた。

（何だ、何が起きていやがる……！？）

本来シャルがI.S学園に来るのはクラス対抗戦の後に男装をして入学してくるはずだ。なのに本来の性別でここにいる。それが何を意味しているのかは明白だつた。

（まさか、この世界はもう俺の知つている“原作”の世界じやないのか？いや、だが待て。だとしたら誰が原作を歪めた？）

そこまで考えた俺はあることを思い出した。それは今から約二年前の黒騎士事件が起きる直後のことだ。

（まさかあの女か？だとしたら筋が通る。あいつは俺の洗脳を無効化したみたいだから）

推察をしていたところに教室の奥の方から見知った声が聞こえてきたのでとのひとまずこのことを考えることを後回しにすることにした。

（誰が相手だろうと知つたことか。この世界の主人公は俺に変わりないんだから）

そう結論づけると今は素直に久しぶりに再会した幼馴染との会話を楽しむことに専念した。

心の奥底で出来た不安を見て見ぬふりをしながら

第32話

「お…………ん」

(ん? 何だろう、誰かに呼ばれたような?)

俺はまどろみの中、かすかに聞こえた声に気づいた。

「お…………し……さ……」

(誰かが、呼んでる?)

「音無さん! 起きてください!」

「ひやい!! す、すみません!」

いつの間にか教卓の前にいた女性が涙目で俺の名前を叫ぶように呼んでいた。慌てて起きて周りの様子を見てみた所、苦笑している人、生温かい目でこつちを見ている人、不快そうな表情でみていてる人で別れていた。

(ていうかさつきの俺の奇声全然男っぽくないよな……)

なんだかどんどん男らしさが消えていくのを感じ気が重くなっていく。だが落ち込む前にやらなければならないことがあるのでまずはそつちを優先することにした。

「あ、大声出してごめんなさい。でも、次は次は音無さんの番ですから自己紹介お願ひ

します。だ、駄目ですか？」

「い、いえ。眠つてた私が悪かつたんですから駄目じゃないです。だから落ち着いて……」

「そ、そうですか？ よかつたです」

そのとき斜め後ろから殺氣にも似た視線が飛んできているのを感じた。間違いなくサーシャさんだ。というかサーシャさんいくら俺がへんな悲鳴を出してばれるリスクを高めたからつて教室内でそんな戦場にいる時のような殺氣を出さないでくれますか。そのせいで「うひい！」って山田先生が悲鳴を上げちゃつてるじやないか。

「え、えっと。シルバーラビツツ^Rコーポレーションのテストパイロットの音無奏です。これからよろしくお願ひします」

「シルバーラビツツコーポレーションつてあの？」

「テストパイロットつてすごくない？」

「もしかしてエリートなのかな？」

確かにシルバーラビツツコーポレーションは東さんが気に入つた人じやないと入れない（東さんが気に入るということは何かしら人より秀でた才能がある）のでエリートという言葉には間違はない。なので”エリート”と”テストパイロット”いう言葉に反応して妬みや興味の視線に晒されることは予測していた。

だが、敵意の視線に晒されることは予想外だつた。しかもちようど真後ろから。

（確か俺の後ろつて百春だつたはずだ。何で俺に敵意を向けてくるんだ？）

と考え込んでいる間に百春の番になつたらしく俺に敵意を向けるのを止めて立ち上がつた。流石に注目が集まつている中では評判に関わるようなことはしないらしい。

「世界で一人目の男性操縦者になつた織斑百春です。至らないところがあるでしょうがどうかよろしくお願ひします」

とほぼ完璧ともいえる百春の自己紹介が終わつた時、後ろの扉が開く音がした。教室に居た全員の視線の先には黒いスースをきつちりと着た俺の姉だつた人——織斑千冬が立つていた。

「織斑先生、もう会議の方は終わつたんですか？」

「ああ。山田先生にクラスへの挨拶を押し付けてしまつてしまないな」

「いえ。これも副担任の仕事ですから気にしないでください」

千冬が教卓に立つた時一瞬だけ鋭い視線をサー・シャさんの方に向けた気がした。だがすぐに視線を正面に戻したので俺は氣のせいだと思った。

「諸君、私が織斑千冬だ。私の仕事はお前たち新人を三年間で使い物になる操縦者に育てるために最低限の基礎を徹底的に叩き込むことだ。私の言うことはよく聞き、そして理解しろ。出来ない者には出来るようになるまで指導してやる。理解できなかつ

た者は遠慮せずに質問しろ。

私の言うことには「はい」か「イエス」しか許さん。口答えも許さん。いいな」
正に独裁者のような挨拶が終わつた時教室内は静まり返つた。そのとき俺は嵐の前
触れのような気配を感じ取り慌てて耳を塞いだ。俺の勘は見事に的中したらしく、耳を
塞いだのとほぼ同時のタイミングでまるで音波兵器のような歓声が教室内に響き渡つ
た。

「キヤアアアアアアアア！本物よ、本物の千冬様よ！」

「千冬様が現役のころからファンだつたんです！」

「千冬様に憧れてこの学園に入学したんです！北海道から！」

「貴方のためならなんだつてできます！それこそ貴方の椅子にだつて！」

引退しても尚織斑千冬の人気は些かも衰えておらず、織斑千冬に憧れて入学したとい
う発言からどれ程の影響力があるのかがうかがえる。というか熱狂的過ぎて完全な変
態もいるのは多少同情する。

現に織斑千冬は不愉快そうに顔をしかめていた。

「毎年毎年何で私の受け持つクラスには馬鹿者ばかりが集まるのだ。私に対する嫌が
らせなのかこれは」

声色と表情から察するに本心らしい。まあ、毎年毎年同じ感じの生徒ばかり担当して

いるのなら嫌にもなるか

「きやあああああああ！お姉さまもつと罵つて！」

「でもたまには優しくして！」

「そしてつけあがらないように躾してえ！」

「うわあ……」

あまりにレベルの高い変態淑女に思わずドン引きしてしまった。俺これから三年間上手くやっていけるのだろうか。

「相変わらずの人気ぶりだね千冬姉」

「百春、学校では織斑先生だ」

「ああ、ゴメンゴメン織斑先生」

このやり取りで二人の関係に気づいたクラスメイト達で教室内がざわめいた。

「もしかして百春君って千冬お姉さまの弟？」

「世界初の男性操縦者にして千冬様の弟ってすごく羨ましい……！」

俺は仲のいい兄弟といった雰囲気を出している織斑兄弟を直視出来ず顔を背けた。

（俺にはあんな穏やかな表情見せてくれなかつたのに百春には見せるのか。俺の何が悪かつたんだ……）

一時間目の終了のチャイムが鳴るまで俺は手から血が出るほど強く握りしめて決し

て晴れぬ疑問を問い合わせた

人物設定

サーシャ・エーデルバイン

百五十年前の未来から織斑千秋らを抹殺するためにタイムスリップしてきた少女。過去にとある研究機関に捕らわれて人体実験をされていた経歴を持つ。その結果髪の色や目の色が変化し、記憶と感情のほとんどが消えてしまっている。藤堂博士やクリスのおかげで多少は感情を取り戻しており、エフィや織斑一夏、クラリスにシャルとの出会いでサーシャ自身に様々な変化をもたらしている。趣味はゲームとアニメ鑑賞と漫画と食事

エフィ・ハーミット

サーシャと共に未来からやって来た少女。今でも変わらず近接が苦手だが、一夏との特訓で多少克服している。軍学校に入る前はとある国有名な貴族だつたらしいが、軍学校の入学を巡って親との壮絶な喧嘩をし勘当され家を追い出されており見た目によらず行動力が高い。なのでハーミットという名字は偽名だつたりする。家の家訓の中には「名譽ある貴族の娘たるもの何がなんでも料理は得意であるべし」といった内

容のものがあるせいで料理が得意になつた。

織斑一夏／音無奏

原作の主人公なのだが織斑百春というイレギュラーのせいで幼い頃から家族と周囲から虐げられてきた。第二回モンドグロツソが開催されているときにサーシャによつて誘拐される。たが、サーシャの提案によりサーシャ達の家に引き取られた。世間では死んだことになっていることと、世界初の男性操縦者であることがばれないために女装することになつた。最近の悩みは男らしさがなくなつていくことらしい。

音無奏の由来は当時サーシャがはまつていたアニメから來ているのだとか
専用機は試作第7世代禍津火

シャルロット・ルミエール

原作とは異なりデュノアに引き取られていないためかそのためか一人称は僕ではなく私になっている。サーシャによつて引き取られたにも関わらずエーデルバインの名字を名乗らないのはサーシャが「義理とはいまだ母親になるような歳じやないし、シャルロットにはクラリスの姓を名乗つていて欲しい」と言つたため。可愛いものには目がなく休日にはサーシャとクロエを着せ替え人形にして楽しんでいる。

専用機は第6・5世代天照

篠ノ乃束

この世界で最初にサーシャ達を観測した人物。その後サーシャ達を遠隔で追跡していた。第二回モンドグロツソの際にサーシャ達に一夏と百春を誘拐して欲しいと匿名で依頼したのも束であり、この時の対応次第でサーシャ達を囮むか殺すかを判断していた。結果サーシャ達は束にとつて満点に近い得点をあげられるような行動をしたので囮むことを決意する。その後とある研究所から保護したクロ工にニートというレツタルを付けられたためどうせならと対抗する会社がいなさそうなエジプトに会社を立ち上げ、クロ工によつて付けられたレツタルを剥がそうと努力した。その過程で束の性格が若干ではあるが改善されたのだが本人は気づいていない。

織斑百春

この世界に突発的に現れた転生者の中の一人。主人公の座を奪うべく日々努力をしてきた。なので原作一夏よりからは多少スペックが高い。転生の特典に洗脳（大幅弱体化）をもらつたはいいが回数制限付きだとは気付かずに乱用した結果原作開始時には残り三回になつてしまつてている。重ねがけにも回数が減つてしまつたためかなり切羽詰

まつ
て
い
る。

第33話

休み時間に入り、サーシャと俺で会話をしていたときに金髪縦ロールの少女が「ちょっとよろしくて？」と声をかけられた。

「どうしたの？ イギリス代表候補のセシリア・オルコットさん」

サーシャがそう返すと「あらつ、私のことをご存知でしたか」と少し驚いていた。

「入学する生徒について少し調べてたからそのときね」

「成る程」

「オルコットさん、私たちに何か用があつたんじゃないの？」

「大した用ではないのですわ。ただ、あの有名な企業のテストパイロットである貴方がたと挨拶がしたかつたのですわ」

「あはは……」

シルバーラビッツ^s_rコーポレーションがIS界隈で無駄に有名になつたのは、突如として現れ変態的な製品ばかりつくること。そして入社試験で合格できるラインがかなり厳しいことだ。身分を隠している東さんが直接試験を行うため、東が気にいった人しか合格できないようになつているのだ。しかも東さんが気にいる条件もその時の気分次

第といった酷い有様で、入社試験に来た人たち全員合格にしてしまつたり逆に全員不合格にしてしまつたりするくらいだ。なのでSRCはエリートでしか入れないという噂が一気に広まつたということだ。別にSRCはエリートしか入れないという訳ではないのだが。

なので見るからにプライドが高そうなこの少女は私達に対してライバル意識のようなものを抱いているのだろうと考えられる。

「これから学園生活よろしくセシリア・オルコット」

「え、ええ。よろしくお願ひしますわエーデルバインさん、音無さん」

「うん、よろしくオルコットさん」

サーシャのあまりに固苦しい挨拶にオルコットさんは苦笑し、俺は思わず頭を抱えた。これでも半年前に比べればまだマシなのだ。半年前はもつと固苦しくて何だか機械のような挨拶だつたのだから。

「では、これからエジプト代表のルミエールさんと挨拶してきますわ」

ルミエールという名字はシャルの母親の名字だ。シャルはサーシャさんの名字のエーデルバインという名前を名乗らずに今でも母親の名字を名乗つているのだ。サーシャさん自身もそれを望んでいたようだったのでそれで落ち着いている。

オルコットがシャルの元に向かつていったのを確認するとサーシャは鞄からSD

カードを取り出して、誰にも見られないように気を付けながら首のチョーカーに差し込んだ。

「どうしたの？ いきなり」

「少しだけセシリア・オルコットのISに興味を持つたから暇潰しにね」

「ああ、なるほど」

サーシャのISの待機形態がチョーカーであり、さらにISと義眼が無線で繋がつているため、誰にも見られずにデータを閲覧することが出来るのだという。

「便利アイテム過ぎませんかそれ？」

「まあ確かにそうだけどさ」

サーシャは何ともいえない表情になつて何やらぶつぶつと小声で何かを言つていた。耳を済ませてみると「目からビームつてなによ」とか「BT兵器の技術を応用したサードアイプロジェクトとかワケワカンナイ」とか色々と義眼に積むような技術ではないことがサーシャの口から漏れていた。

「何というか……苦労してたんですね」

「…………うん」

疲れたような表情でサーシャは答えた。

そのときだった。

「認めませんわ!!」

とクラス中に響き渡る位の声でオルコットの怒声が響き渡った。何だ何だと声がした方向に顔を向けるとそこには怒りで顔を真っ赤にしたオルコットと不愉快そうな表情をした百春がお互いを睨み合っているという構図が出来上がっていた。

前日談

始まりのプロローグ

2150年現在、急速に発達した宇宙開発によつて宇宙に進出した人類と度重なる戦争によつて汚染された大地に住み着く人類とで大規模な戦争が勃発していた。その戦争の引き金は宇宙コロニーからの使者が式典の最中に何者かに射殺されたからだと教官から教えられたが実際のところは起きたべくして起きたのだと俺は思つてゐる。何故なら、地球の人々は昔から宇宙の人々を差別していくたし、宇宙の人々は地球の人々を見下していくので両国の関係は昔から冷えきついていたのだ。憎みあつてゐたのだ。関係の修繕のしようがなかつた。だが、その両国の関係を何とかして改善したいという人間が現れた。それが前述の宇宙コロニーからの使者なのだが、俺はこれが仕組まれていたものだと思つてゐる。当然だ。なぜなら地球側はともかく宇宙側には地球に戦争をふつかけたい理由があるのだがこの考察は割愛させていただく。このことを書いてみると本当に長くなるからだ。

そしてこの戦争の主戦力はインフィニット・ストラトスと呼ばれるパワードスーツ

だ。約百五十年前に篠ノ乃束博士によつて作られた。現在稼働している大体のISの世代は第六世代となつてゐる。第四世代が装備の換装なしでの全領域・全局面展開運用能力の獲得を目的としたより戦闘に特化させた世代ならば、第五世代は宇宙開発を行うための無重力での運動性・エネルギーの効率化などIS本来の用途である能力の向上と劣化型ISコアなどのISの量産を目的とされた。次の第六世代は宇宙での戦闘能力の向上及び艦艇のIS化を目的とされた世代だ。これによつて宇宙においてのISの継戦能力が飛躍的に向上すると共に艦艇のIS化によつてスペースシャトルを遙かに上回る移動能力を獲得し、さらに搭載火器、防御能力の向上、スペースデブリを出さずに大気圏を突破することが可能になつた。

「ふうー、やつと終わつたあー」

俺は背伸びをしながらペナルティで出されたレポートを保存し印刷ボタンをクリックした。誰だつてこんな面倒くさい課題を好き好んでやりたくないものなのだ。

「冬樹終わつたー？」

「美鈴…………幼なじみでもノック位しろよ」

「女の子じやあるまいし別にいいじやない」とのたまひながら俺のベッドに腰かけたのは幼なじみの鳳美鈴だつた。

「ていうかお前はレポート終わつたのかよ?」

「当然もう終わつてるわ」

ヒラヒラとペナルティのレポート三枚をひらひらと俺の前に見せていた。

「…………早くね?」

「まあね」

フフンと得意気な顔をしているが、つまりレポートを書く位教官からペナルティーのレポートを書かされているということなので自慢できることではないと俺は指摘したくなつたがここはグッと抑えた。俺はどこか子どもっぽいこいつとは違つて大人なのだ。

「不良の安い挑発に簡単に乗る人が大人というのね。私始めて知つたわ」

「俺の心読むなよ」

「あなたの考えてることなんて簡単に読めるわよ単純だし」

「うぐつ」

確かに俺は単純だと我が姉から口うるさく言われているが、そんなに分かりやすいものなのだろうか?

「そんな下らないことよりレポート終わつたんなら早く出そよう。新型のＩＳ早く受領したいしね」

美鈴がそう言つてきたのでそれもそうだなと思い、今印刷が終わつたレポート用紙を掴んで俺たちの上司の元に向かつた。

*

*

スペースコロニーの発着口に一つの輸送機が入つてきた。輸送機からは灰色の髪をした中学生位の少女に銀髪の女性と金髪の女性が連れ添う形で降り立つた。

「全く博士は早く新型を見たいからといって私たちに高速輸送機で迎えに行かつて言うなんて。」

金髪の女性がやれやれと呆れた様子だつたが銀髪の女性がジト目で金髪の女性を睨むようにして言つた。

「博士は”おとなのれでいゝ”の全裸を見るより新型のISフレームを見た方が興奮するようなISキチだから馬鹿にしないで」

「いやなんか随分生々しい例え方なんだけど。それとサーシャの方が博士のこと馬鹿にしてるし」

「私語は慎みなさいサーシャ・エーデルバイン大尉、クリス・ルクレール大尉」「申し訳ありません、ヴィクトリア・クロニクル大佐」

サーシャとクリスは直立してヴィクトリアに謝罪したがヴィクトリアはくすりと笑

いながら「冗談ですよ」と二人に告げ「それに」と続け

「博士が超弩級の変態なのは周知の事実じやないですか」

「うわお、いつも以上に辛辣ですね。つてあれ? もしかしてサーシャが言つてた博士に裸を見られた』おとなれでいい』つてもしかしてヴィ……」

「口を慎みなさい。今年の給料半分にしますよ」

「イエッサー!! やっぱり気のせいになりました!!」

「よろしい」

情けない程に態度を変えて自故保身に走った同僚と敬愛する博士に裸を見られた上に博士がほぼ同時に到着した新型のジュネレーターの設計図に興奮して何のリアクションも出されないという二重の屈辱を味あわされたという上官のやり取りを冷たい目で見ながら、サーシャはなんでこう自分の身の回りには変人が多いのかと嘆いていたがサーシャのことをよく知っている人が見ていたらこう言つただろう。「お前にだけは言われたくない」と

その後も上司に関する愚痴を言いあいながらジープに乗り、目的地である軍事区画に向かつた。

「しつかし地球連邦はなかなか大胆なことをしますよねえ。中立地域のコロニーに軍の最高機密である第七世代の二号機と三号機を製造するなんて」

「戦況が戦況なだけに結構余裕ないみたいですよ。上の人たちも」

「ああ……。頼みの綱の一號機^{禍津火}が誰にも起動出来なかつたというのもあるだらうし

ねえ」

「禍津火に適合できない理由が分からなかつたから博士結構落ち込んでたし」

禍津火は今から二ヶ月前とあるコアをベースにして製造された世界初である第七世代型ISなのだが地球連邦に所属する（サーシャ、クリス等も含む）操縦者誰一人として適合することがなかつた不遇の機体でもある。その失敗を踏まえて設計されたのが『伊邪那岐』と『伊邪那美』だ。機体の名前が日本神話に登場する神の名前なのは單純に日本の研究者の趣味だつたりする。

「でもさ大佐。その新型の操縦者まだ養成所から出たばかりなんだつけ？大丈夫なの？」

「はい。一応腕はいいみたいです。素行に多少問題があるみたいですけど」「多少やんちゃな方が操縦者に向いてると思うな」

とそのときだつた。目的地である軍事区画から大きな爆発音と共に大きな炎が吹き荒れているのが遠くからでも見えた。

クリスは顔を強張らせながらボツリと呟いた。

「ねえ、あの爆発が起きた場所つてさ新型が開発されてる場所の近くじやなかつたつ

け?」

「ただの事故…………というわけではなさそうですねあの様子では」

「だとしたら宇宙連合の連中による新型の強奪あるいは破壊と考えるのが自然ね」と結論づけると共にクリスとサーシャはシートベルトを外して車の扉を開いた。ヴィクトリアは通信機を起動させながら二人に告げた。

「二人とも、早急に軍事区画に向かい新型とデータ、操縦者の保護を最優先に。敵は最低一人出来れば指揮官辺りを生け捕りにしてください。聞きたいことがあるので」

「了解」

その瞬間二人は車から飛び降りたと同時に『不知火』を展開しスラスターを全開にして軍事区画に急行した。ヴィクトリアはそれを確認しながら通信機で今起こっていることの把握をしながら軍事区画の指令室に急いだ。

強奪

冬樹と美鈴はペナルティの書類を持つて上司の部屋に訪れていた。重圧を放つている上司の部屋の扉を見て、冬樹は「ぐくりと喉を鳴らしながら恐る恐るノックをした。

「失礼します。織斑冬樹一等准尉と鳳美鈴一等准尉です。ペナルティーのレポートを提出しにきました」

「よし、はいれ」

俺と美鈴が部屋に入るとそこには凛とした大人の女性の雰囲気を持つ上官である
織斑十夏おりむらとおかが椅子に座つてこちらを見据えていた。

「これがペナルティーのレポートです」

俺と美鈴が十夏姉にレポートを渡すとパラパラと俺たちのレポートを流し読み、読み終わった時には呆れた様子になっていた。

「よくもまあここまでレポートを書き慣れたものだな」

「いえいえそれほどでもありません」

「いや全然誉められてないぞ美鈴」

美鈴は昔から十夏姉に憧れているのは知っていたが何か最近拗らせてきてるなど養

成所を卒業してからの美鈴の言動を振り返りながら思った。憧れの十夏姉に会えて興奮しているのは分かるがもうちょっと落ち着きをもつて欲しいものだ。

「それにしてもいくら一般市民のか弱い少女達を助けるためとはいえ不良十人を病院送りにしたのは少しやりすぎではないのか？」

「そ、それは流石に数が多くて手加減する余裕なかつたしさ」

ちなみにその病院送りにした十人のうち六人をやつたのは中国のカンフーマウンテンゴリラこと美鈴だつたりする。こいつは身長と胸が小さい代わりに身体能力がズバ抜けている上に本人の性格がかなり好戦的なのだ。なので彼女が喧嘩したら大抵は病院沙汰になることが多い。

「確かにお前達は正しいことをした。だがお前達はもう軍人だ。加減くらい覚える。これ以上問題を起こせば流石の私でも庇いきれなくなる、いいな？」

「はいすみませんでした!!」

「頑張つて加減を覚えます!!」

「よろしい」

「………十夏姉が俺たちの返事に満足したように頷くと引き出しから旧世代の電話帳のごとく分厚い本を二冊取り出した。俺と美鈴は思わず顔を青くした。

「…………えっとそれは？」

恐る恐るといった感じで美鈴が聞くと十夏姉が不敵な笑みを浮かべた
 「これは新型の I-S の仕様書だ」
 マニュアル

「ちょっと待つてくれ、こんなに分厚くなるくらい注意事項が多いんですか!?」
 「当然だ。お前達も聞いたことくらいはあるだろう? 第七世代のコンセプトは」
 十夏姉の問いに俺はうろ覚えの知識をなんとか引っ張り出したどたどしい口調で答えた。

「ええと、確かシールドスキンを上回る防御と展開装甲を越えた機動力を持ち、戦艦級の兵装をぶんまわすことができる新世代の機体……だつたかな」

「その答えでは満点はやれないがまあいいだろう。正しくはそれ一つで戦況をひっくり返すことができる超兵器、規格外兵装の使用を前提とした世代だ」

オーバード・ウェポン
 規格外兵装と聞いて俺はとある事件について思い出していた。約九ヶ月前に不知火がまだ作られたばかりの規格外兵装『ヒュージキヤノン』を運用試験で廃棄された輸送艦に叩き込もうとしたら、撃った衝撃を全く吸収できずに弾丸は明後日の方向に飛んでいき、その不知火の操縦者の肩が絶対防護貫通して文字通り吹き飛んでしまったという悲惨な事件のことを。その事件が切っ掛けで第七世代のコンセプトが変わったという噂があるくらいに有名な話であり、滅茶苦茶ヤバい兵器なのだ。その規格外兵装というものは。

「……俺の肩パージしませんよね？」

「多分大丈夫らしいぞ」

「全然安心出来ないんですけど」

「まあ、今回の新型は規格外^{オーバード・ウエポン}兵装の中身操縦者がどうなるかは知らんが」

最後に何か聞き捨てならないようなことを聞いたような気がしたが一々追及していたらきりがないのでここはスルーをすることにした。

「それでは私たちはこれから開発者達に新型の説明をしてもらいに行くので失礼します」

「ちよつ!? おいでって！あ、失礼しました!!」

「……相変わらずそそつかしいなお前達は」

「これ以上不安になることを言われたくないのか美鈴は無理矢理会話を断ち切るよう言うと俺の手を掴んで部屋から出ていった。部屋を出る時に十夏姉の溜め息混じりの咳きは俺の耳には届かなかつた。

*

俺達は十夏姉に渡された分厚い仕様書を読みながら新型の最終調整が行われている
マニュアル

というラボに向かつていた。

「ふむふむ、なるほどよくわかつたわ」

「何がわかつたんだよ？」

美鈴はある程度納得したような様子で仕様書を閉じた。

「ええ、よくわかつたわ……。この機体を作つた奴等はただの変態だつてことがね！」電話帳の如く分厚いそれを床に叩きつけながら叫んだ美鈴。その様子はまるで怒り狂つた虎の如く恐ろしかつた。

「なによ！ この大型多目的スラスターつて。こんなもの最大出力で飛ばしたら操縦者

が潰れるわよ！ しかも装備も装備なら武装も武装よ！ なによこの八連装ガトリングガンつて！ 八連装とか多ければいいつてもんじやないでしょ！ 実用

性考えなさいよおおお!!」

「お、落ち着けよ美鈴！ もしかしたらちちゃんとまともなものがあるかもしれないだろ

！」

慌てて俺が仕様書^{マニュアル}をパラパラと捲り、適当な武装のページを見てみた。そこには『240ミリ狙撃砲』と書かれており、具体的な使用法や注意点が記されていた。

「ねえ。多分これ狙撃銃の分類よねこれ」

「…………そのはずなんだけどな」

おかしい。何がおかしいって何で砲身が戦艦のものなんだということだ。確かに戦艦級の砲身だつたら威力も出し射程も長いだろう。それにこの第七世代は戦艦級の武装も扱えると書いてあつた。

「だからって本当に戦艦の主砲を持つてくるか普通さあ……」

それだけならまだよかつた。第七世代の性能を引き出した武装だなと言えた。でもこのライフルの砲身の下にくつづいているもの。それだけは許容できなかつた。

「何でライフルの砲身の下にチエーンソーがくつづいてるんだよ！」

これだつた。銃剣やグレネードとかくつければ取り回しがかなり悪そうだけど使える武装だなど胸を張つて言えた。でもチエーンソーつてなんだよ。よりもよつて何でチエーンソーを取り付けたんだよ。ロマン求めてるならパイルバンカーでもいいだろ。これじやただのネタ武器じやねえか等を開発者に小一時間程度問い合わせたくなつたがどうせ録な返事が返つてこなさそうなので止めた。

「これ以上これを読むのは止めようぜ」

「異義なし」

俺達は何も見なかつたことにしてマニュアル閉じた。誰だつて自分の胃は大事にしたいのだ。

そんなことをしている間に無駄に分厚い金属の壁に覆われている第一ラボに到着した。俺達は十夏姉の部屋に入るとき以上の緊張感を持つて部屋の扉を開けるために十夏姉に事前に渡されていたＩＤカードを専用の機械に差し込んだ。ガチャガチャと金属音がした後にギギギと音を鳴らして扉が開いたそこには

悲鳴と銃声が鳴り響く戦場と化していた

「…………は？」

俺達は訳がわからなかつたがとりあえずここに棒立ちになつていては危険だと判断し大急ぎで近くの遮蔽物に隠れた。

「ちよつとどうなつてんのよこれ!?」

「俺に聞くなよ！なんだ、どうなつてんだよこれ！あれか？最近の研究者は自分達の職場で撃ち合いでもするのかよ！」

「いやあー。流石の私でもそんな口ツクなことはたまにしかしないなあ」

「だ、誰なの？」

「私？私はこここのラボの主任の篝火ホタルだよ、よろしく」

「それで篝火さん今はどんな状況なんですか？」

「ええとね。第二ラボで伊邪那美の調整が終わつた瞬間にね、数人の研究者が拳銃取り出して乱射し始めてね。そのあとすぐに覆面被つた人達がアサルトライフルばらまきながら調整が終わつてた伊邪那美を奪つていつたらしいのね」

「え？ ちよつと待つてください。確か伊邪那美つて私が乗るはずだつた機体ですよね？」

美鈴がわなわなと手を震えさせながら篝火に聞いた。

(あ、これはまずい)

幼馴染みの様子に危機感を感じた瞬間だつた

「うん、そだよ」

(言つたあああおあ!!爆発寸前の美鈴にストレートに言いやがつた!)

「お、落ち着けよ美鈴……美鈴？」

美鈴は湧き出る怒りを無理矢理押さえているかのように体を震わせてたが、その震えが急に止まり満面の笑顔を浮かべながらちよど近くに転がつていたアサルトライフルを拾い上げ、

「ぶつ殺す」

「待て待て待て待て!!」

「止めないで冬樹あいつらぶつ殺せない！」

「落ち着け美鈴！まだ状況が完全にわかつてねえだろが！」

完全に目が据わっている美鈴をどうにか羽交い締めしているのを篝火は「青春だねえ」とニタニタと笑いながら向かって来る兵士たちの頭をヘッドショットをするという力オスな空間が生まれていた。

始動

数分間の間暴れる美鈴を羽交い締めにしている間篝火に現在の状況を教えてもらつた。

「…………つまり今こここのラボの奥に伊邪那岐があつて、侵入者達が伊邪那岐も奪おうとしていたのでそれを奪われないためにここで銃撃戦が勃発していたということですか？」

「うん、そゆことだよ」

口笛を吹きながら的確に敵を撃ち抜いている歴戦の兵士顔負けのことをやつてのけている篝火を見てようやく落ち着いた美鈴が少し興味を持ったのか「ねえ、何で研究職のあなたがそんな場馴れしてるの？」と聞いた。

「それはね。たまに脱走する生物兵器とか職員を仕留めてたらこうなつたんだよ」

「はい？」

予想をはるかに上回るレベルの意味不明さだつた。

「生物兵器つてなに？ ていうかここで何育ててるのよ！」

「えーとね。かなり昔の娯楽で『○イオハザード』とか『マブ○ヴ』とか『○ツップをね

らえ!』に兵器を圧倒する生物が出てたんだけどね。同僚からその話を聞いたとき I S を生物兵器で仕留められないかなあーって徹夜のテンションで思い付いたんだけど思ひの外皆のノリもよくてね。作っちゃったの』

「作っちゃつたつておい』

『それで溶解液とか物理で強化カーボンで作られたケージを破壊して脱走したりしていたのを私たちが泣く泣く処分していたつてわけ』

あまりにも現実味がなく一步間違えてたら昔のゲームよろしく生物災害バイオ・ハザードが起きていたかもしないという事実にこここの研究員の頭にウジ虫でも湧いているのではないかと本気で思い始めていた。とここで俺の頭に二つくらいの疑問がわいたのでとりあえず篝火に聞いてみようとしたら先に美鈴が口を開いていた。

「ちょっと待つて。あんたさつき職員も仕留めたつて言つてたけどあれは?』

「ああ、それはね。あの人工知能を超越したきもさも持っている生物兵器を飼育しているとどうも飼育している職員の sun 値がゴリゴリ削れるみたいでね。たまにわけわからぬことを叫びながら脱走したり生物兵器と駆け落ちしようとするとからその阻止を

ね』

ブラック企業も真っ青な職場の環境にドン引きした俺たちの表情を見て篝火は何を勘違いしたのか「もちろん職員には麻酔銃使っているからね」といらない弁明をしてく

れた。美鈴はこの意味不明すぎるラボの実態に頭を痛めながら俺のもう一つの疑問を篝火に問いかけていた。

「だつたらあんたのお気に入りの生物兵器を使つてあの侵入者達を撃滅すればいいじゃないい」

「ああ、それはできないんだよ」

ふつ、と篝火は酷く寂しげな表情をして呟いた。

「どうしてですか？」

「それはね。生物兵器を無断で作つていることが十夏ちゃんにばれてね。私たちに重いペナルティーを科した上に問答無用で生物兵器に関する全てのデータを抹消したんだよ・・・」

「つて無断で作つてたのかよ!!」

無駄にシリアルスな空気が台なしだつた。というかそんな人間の正気度を吹き飛ばすような危険生物即処分されて当然だ。とそのとき外部につながる扉が爆発でこつちに飛んできた。

「おわあ！そ、そういうやここ戦場だつたんだよな」

「この人のせいで私もすっかり忘れてたわ・・・」

「ていうかお前も人のこと言えないからな？分かつてるのかカンフーゴリラ」

「あ、あ？」今なんつたおい？」

「お二人さん。仲がいいのはいいことだけどちよつち状況がますいよ」

篝火は飄々とした表情に冷や汗を流しながら目の前の状況を分析していた。

「奴さんたち痺れを切らしたのかISまで持ち込んできた」

「IS!? ちょっとまずいんじやないのそれ！」

「幸い第三世代みたいだけど流石にこの戦力じやあ精々足止めをするのが関の山つてところかな」

「そこでだ」と篝火は今までで一番まじめな表情をした。

「私たちで何とか敵の足止めをするから冬樹君、君はこのラボの奥にある伊邪那岐に乗つて敵を倒して欲しいんだ」

「このまま奪われる訳にもいかないしね」と付け加えビームアサルトライフルの弾倉を取り換え排熱を行つていた。いきなり責任重大な役目を押し付けられた俺は思わず手が震えてしまつた。もし俺が失敗してしまつたら美鈴や篝火は死んでしまうのだ。
(俺に出来るのかそんなヒーローみたいなことを……)

そんな俺を見ていた美鈴はため息をつきながら俺の背中を思いつきりたたいてきた。

「シャキッとした冬樹！」

「いってえ!! 力強すぎんだよ、この怪力女！」

「ふふんあんたが貧弱すぎるのよ。だからこっちのことを気にせず思いつきりやりなさい」

「…………おう」

こんな状況でも変わらない態度で接してくれたおかげで少しだけ気が楽になつた。俺は篝火からエネルギー・シールド発生装置を受け取り、美鈴は予備の弾薬を受け取つていた。

「ほかの研究員達の準備も完了したよ。私の合図で君は飛び出してただひたすらに後ろの扉まで走つてくれ。簡単でしょ？」

「確かに簡単ですね。単純明解でやりやすい」

「はつはー！その意気だよ冬樹君」

篝火さんによるとエネルギー・シールド発生装置は敵の銃撃なら120秒、第三世代機のビーム攻撃は4発耐えられるらしい。

「それじゃカウント開始。3」

篝火さんがカウントを始めた同時に俺は直ぐ飛び出せるように準備をし、美鈴は自分の周囲に予備弾倉を置いた

「2」

じわりと手のひらが汗で滲んだのが鬱陶しくてシャツで拭き、ただその瞬間を待つ

た。

「1」

俺は足に力をこめ篝火さんは閃光手榴弾のピンに手をかけ、美鈴はトリガーにかかつている指に力を入れた。

「ゴーゴーゴー！」

篝火さんは閃光手榴弾を正面のゲートの方に放り、瞬間眩い光がこの空間を覆つた時俺は物陰から飛び出して後ろの隔壁に急いだ。俺に気づいたISが攻撃を仕掛けようとしたとき篝火さんたちからの銃弾の嵐と爆風で狙いが逸れ俺の横をビームが通りすぎていった。

「死んでたまるかあああ！」

恐怖で足が止まりそうになるのを抑えるために叫びながらただひたすらに隔壁を目指した。何回か『キン』と何かが弾かれた音がしていったので正常にエネルギー・シールド発生装置が働いているようだった。

とそのとき重い衝撃が俺の背中を襲い、思わず足が縛れて転びそうになりながらも何とか隔壁までたどり着いた。見ると下の方が何とか潜り込めそうなくらい開いていたので転がるようにして下をくぐつた。

「織斑冬樹さんですね。主任から話を聞いています。こちらです」

整備を担当していた整備兵に誘導され、俺は機材とコンテナが散乱しているガレージの中央に案内された。そこには灰色をベースにした機体がケーブルにつながれ鎮座していた。

「これが伊邪那岐……なのか？」

「はい、この機体こそが三番目の第七世代型 I.S.。新時代の I.S. です」
伊邪那岐の周囲で作業をしていた整備員達がコンソールを忙しなくたたいていたりケーブルを着けたり引き抜いていたりと忙しそうに働いていた。

「伊邪那岐のスラスターエネルギー充填完了です！」

「弾薬の補充完了しました！」

「伊邪那岐いつでも起動可能です！」

「わかりました。冬樹君、伊邪那岐に触れてください。それだけで装着が出来るはずです」

「それだけでいいんですか？」

俺は伊邪那岐に近づき灰色の装甲に触れた。すると部屋一帯まばゆい光が覆い尽くした。俺は自分の体を伊邪那岐に預けるようするといつの間にか鋼鉄の装甲を身に纏っていた。頭部の装甲が俺の頭を覆つた時頭部のスピーカーから機械音声が聞こえてきた。

——生体認証開始

——正規の操縦者織斑冬樹と断定

——操縦者へのスキヤン開始

——健康状態良好。しかし肉体の強度が規定値を下回っています

——肉体強度を上昇させるためナノマシンを投与。

「痛。な、何だ？何が起きてるんだ？」

突然俺の首筋にチクリとした痛みがしたのを不審に思っていたがISの謎の処理はまだ終わっていないようなので今は気にしないようにした。

——肉体強度が基準値を上回つたことを確認

——スラスター、サブブースター正常に稼働開始

——※※エンジン安定

——火器管制システム正常

——関節ロツク全解除

——最適化完了

——システムオールグリーン。第七世代型IS伊邪那岐起動します

「伊邪那岐が起動したよ！・総員退避――！」

「ケーブル切断します」

「隔壁開けろ――！伊邪那岐が出るぞお――！」

「織斑冬樹、伊邪那岐出撃します！」

灰色の装甲に色が付きまるで新雪のように白と暗闇を凝縮したかのような黒を基調にした騎士が今新たな戦場に飛び立った。